

二本松市文化財調査報告書 第26集

# 二本松城址 VII

## —平成15年度発掘調査報告書—

平成16年 3月

二本松市教育委員会

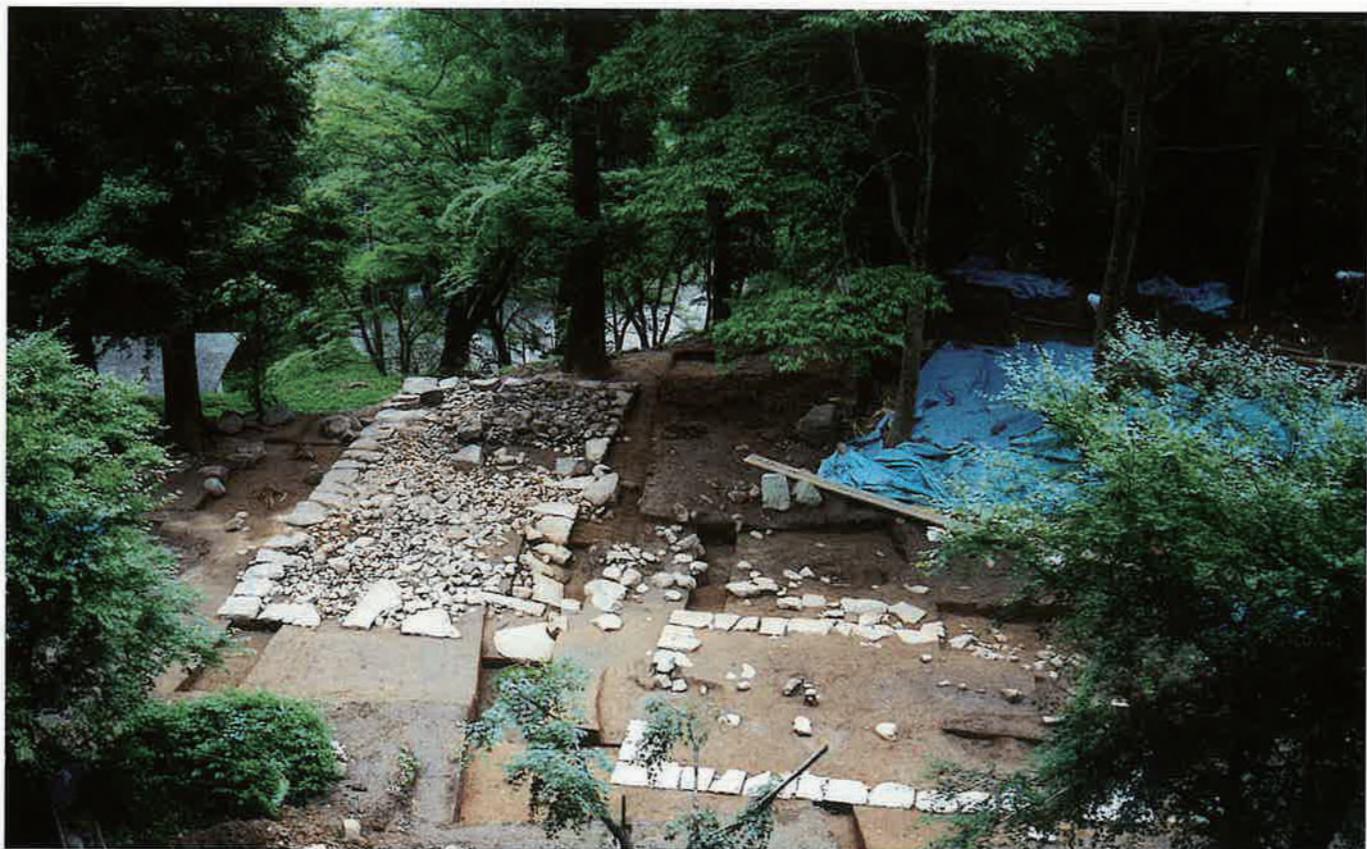
二本松市文化財調査報告書 第26集

# 二本松城址VII

—平成15年度発掘調査報告書—

平成16年3月

二本松市教育委員会



1 1号・2号建物跡(S B01・S B02)全景(西より)



2 3号建物跡(S B03)全景(西より)

原色図版 2



1 1号建物跡精査状況  
(西より)



2 1号建物跡精査状況  
(南東より)



3 2号建物跡精査状況  
(東より)



1 3号建物跡精査状況  
(北より)



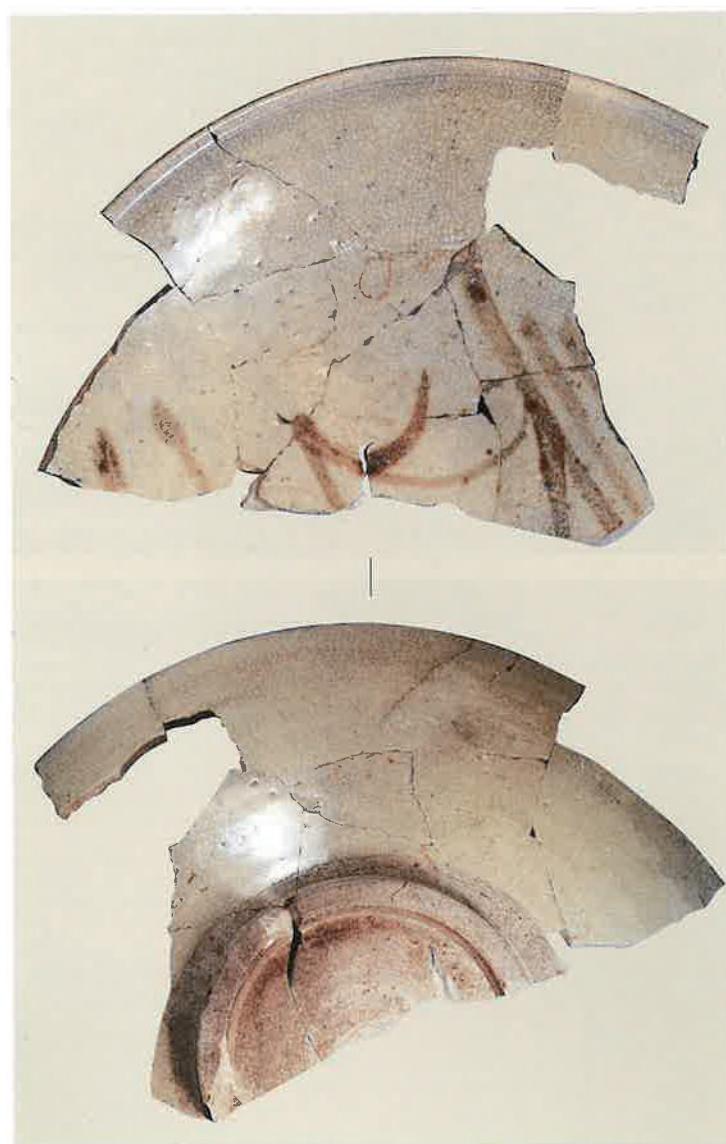
2 3号建物跡階段部  
精査状況(北西より)



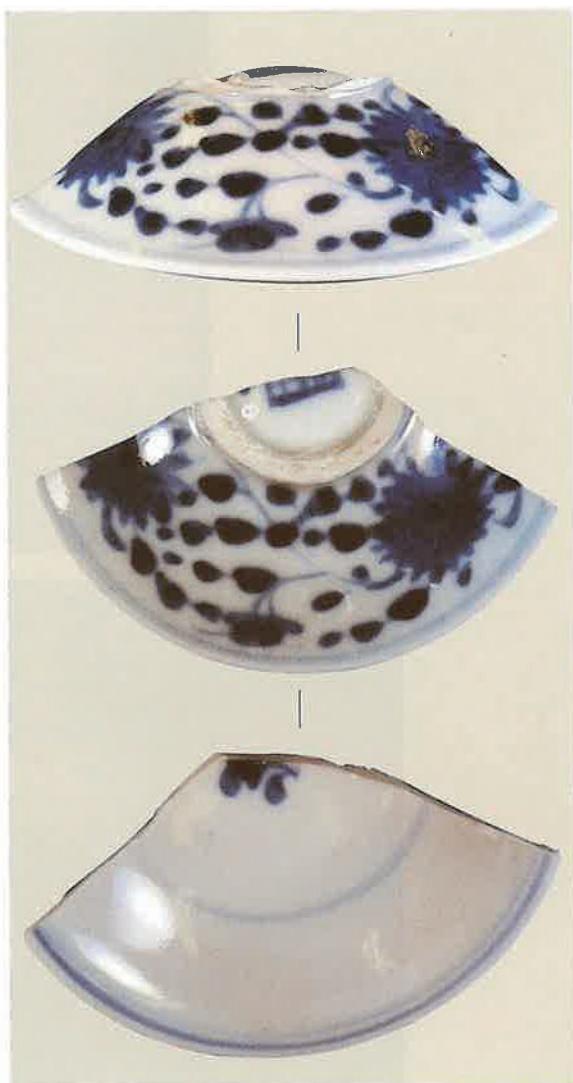
3 石積2精査状況(南より)



1 軒丸瓦・軒平瓦  
(上-S B03サブトレントチ a 瓦層  
(下-S B03サブトレントチ c 瓦層)



2 皿(瀬戸)(3 TL 2、L 4、L 5)



3 蓋(伊万里)(14 T 石積 5 下層)



1 皿(白磁)(S B01-d 磕1層)



2 脚付碗(S B01)



3 瓦(S B01L 1)



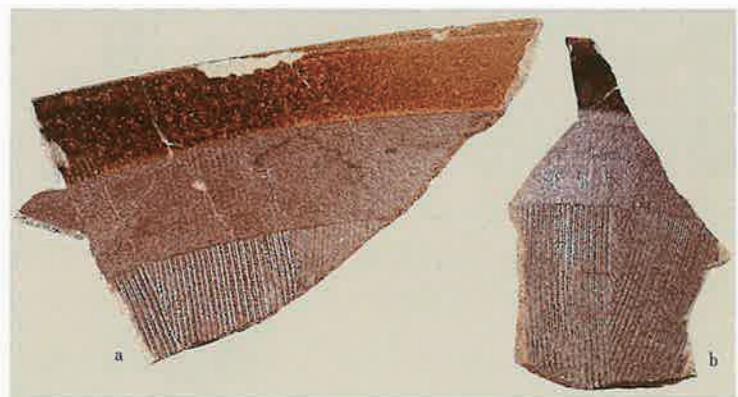
4 石臼(上臼)(S B01-f 磕1層)



5 碗(S B01-b 磕1層)



6 碗(S B01-e)



7 すり鉢(本郷)(S B02サブトレンチ c L 7)

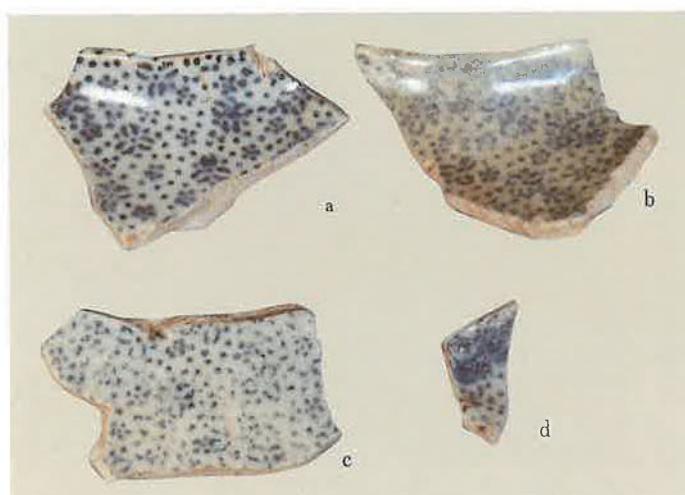
## 原色図版 6



1 碗(S B03サブトレンチ a 2 ~ 瓦層)



2 碗(S B03サブトレンチ a 2 ~ 瓦層)



3 先付鉢(伊万里) (a - 12TL1、b - 13TL1  
c - 石積3L1、d - 12T2層)



4 覗(7T上層)



5 碗(石積5下層)



6 石積5出土遺物

(a - 盆(本郷)、b - かわらけ、c - 碗(相馬)  
(d - 碗(波佐見)、e - 盆(本郷)、f - すり鉢(本郷))



1 脚付碗(石積3表土)



2 碗(瀬戸)(石積3L1)



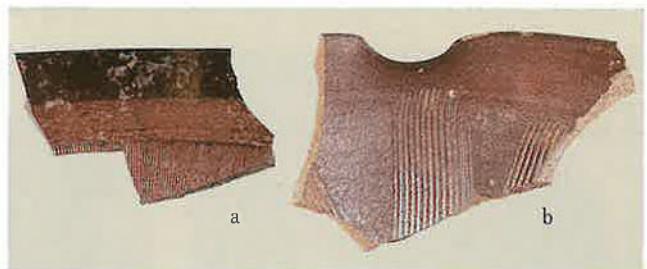
3 碗(石積3L1)



4 碗(相馬)(石積3L1)



5 すり鉢(本郷)(石積2下層)



6 すり鉢(本郷)(石積2下層)



7 碗(相馬)(石積2下層)

8 碗・皿(初期伊万里)  
(a - 石積2下層)  
(b - 石積3下層)

## 原色図版 8



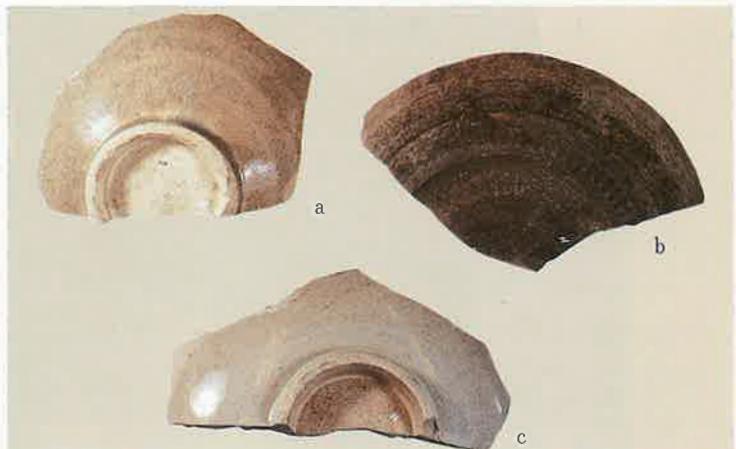
1 すり鉢(本郷)(石積3下層)



2 甕(瀬戸)(石積2下層)



3 碗(伊万里)(石積3下層)



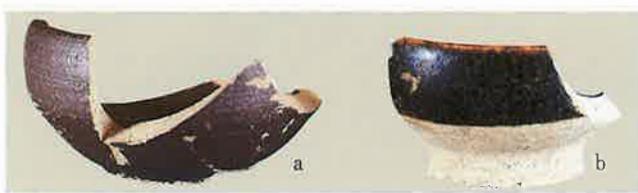
4 碗(石積3下層 a—相馬)



5 碗(相馬)(石積3下層)



6 すり鉢(本郷)(石積3サブトレンチ1～2層)



7 灯明皿(本郷)(a—石積3サブトレンチ1～2層、  
b—7TL1)



8 石積3下層出土遺物  
(a—甕(本郷)、b—碗(本郷))



9 2区出土伊万里焼小片

## 序　　言

二本松の歴史と文化を伝える当城址の調査は、平成3年度から様々な分野の調査を実施してまいりましたが、平成9年度に策定いたしました二本松城址保存管理計画書に基づき、同10年度から特に地下遺構に重点をおいた二本松城址総合調査事業に着手し、今年で6年目を迎えるました。

とりわけ、同11年度からは幸いにも文化庁所管国庫補助対象事業の採択をいただき、計画にしたがい遺構確認を目的とした発掘調査を進め、この間、所期予想を超える調査結果と、今後の調査遂行における問題提起を示唆する成果など得るものが多くありました。

特に、本年度は昨年度に引き続き、文化庁文化財部記念物課の磯村幸男主任文化財調査官に現地視察として遠路ご来跡いただく機会を得ることができ、調査を進める上で多くのご教示、及び今後の城址保存管理を進めることについてのご助言をいただきました。これらを踏まえ、今後も慎重かつ積極的に当事業へ取り組まなければならぬことを改めて認識した次第であります。

本書は、第8次発掘調査の結果をまとめたものですが、多くの貴重な遺構が確認されており、特に二本松藩主丹羽氏の家紋を付した軒平瓦・軒丸瓦を有する蔵跡の検出によって、城内の往時の姿を想定する上で大変参考になるものと確信しております。

最後に、本調査の実施に際し多くのご指導、ご助言をいただきました磯村幸男主任文化財調査官、及び当初からの調査指導者であります鈴木啓先生、建造物についてご教示いただきました草野和夫先生、並びに県教育庁文化財グループ、さらに研究心をもち従事いただいた作業員の方々に心から厚く御礼を申し上げます。

平成16年3月

二本松市教育委員会教育長 渡邊專一

## 例　　言

1. 本書は、平成15年度国庫補助事業として二本松市教育委員会が実施した二本松城址総合調査事業における発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 出土遺物の整理は洗浄を桑原尚子(二本松市教育委員会社会教育指導員)、遠藤嘉一、橋本陽子、野村昌司(二本松市教育委員会文化課臨時職員)が実施し、注記・分類・復元を桑原、門馬久子(二本松市教育委員会社会教育指導員)が実施した。
3. 遺物の実測は門馬が、拓本は桑原が、トレースは中村が担当した。また遺構、遺物の挿図・版組は中村が担当し、その修正は門馬、桑原の協力を得た。
4. 遺構及び遺物の写真は中村が担当した。
5. 遺構の全体平面写真測量及び石垣立面測量は(株)シン技術コンサルに委託した。
6. 本報告書の執筆は中村が担当した。
7. 本調査で出土した遺物及び写真・図面等資料は二本松市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 測量における基準設定は(株)シン技術コンサルに依頼し、遺構実測図中の方位は座標軸を示す。
2. 遺構実測図の内断面図に示した数字は海拔高度を示し、平面図のアルファベットは対応する断面図の位置を表している。
3. 柱穴については特徴的な遺構及び遺物を出土した遺構に限って記述し、他は一覧表に示した。
4. 遺物は石臼を1/4、古銭を原寸、瓦は1/3で収録し、その他は全て1/2で収録した。  
遺構については図ごとに縮尺を示した。
5. 遺構断面図の土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖(1990年版)』によった。
6. 陶器類において釉の範囲を一点鎖線で示した。
7. 遺物実測図における遺物の寸法において、単位はcm、( )のあるものは残存長を示す。
8. 本文中で使用した略号は次のとおりである。

S B …礎石立建物跡　　S K …土壙　　S D …溝跡　　P …柱穴

## 目

原色図版

序言

例言・凡例

第1章 過去の調査	1
第2章 調査経過	7
第1節 調査要項	7
第2節 調査に至る経過	7
第3節 調査日誌	8
第4節 調査方法と概要	10
第3章 調査結果	14
第1節 1区の遺構と遺物	14
(1) 磁石立建物跡(SB01~03)	14
(2) 磁石跡	28
(3) 4Tの遺構と遺物	30

## 次

(4) 5Tの遺構と遺物	30
第2節 2区の遺構と遺物	
(1) 石積1	31
(2) 石積2・3	31
(3) 石積4・5(14T)	36
(4) 7T	38
(5) 12T	38
(6) 13T	39
第3節 出土遺物	39
(1) 瓦	41
(2) 石製品	43
(3) 鉄製品	43
(4) 銅製品・古銭	43
第4節 まとめ	43

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 過去の調査区域及び第8次調査範囲	5
第3図 トレンチ配置図	9
第4図 1区遺構配置図	11
第5図 SB01実測図	15
第6図 SB02実測図(1)	19
第7図 SB02実測図(2)	21
第8図 SB03実測図(1)	24
第9図 SB03実測図(2)	25
第10図 SB03実測図(3)	27
第11図 SB01サブトレンチd実測図及び 1区磁石1~4実測図	29
第12図 石積1~3立面図	33
第13図 14T実測図	35
第14図 石積4~5立面図	37
第15図 13T実測図	40
第16図 出土遺物: 石臼	43

## 目 次

第17図 出土遺物: 陶磁器類(1)	51
第18図 出土遺物: 陶磁器類(2)	52
第19図 出土遺物: 陶磁器類(3)	53
第20図 出土遺物: 陶磁器類(4)	54
第21図 出土遺物: 陶磁器類(5)	55
第22図 出土遺物: 銅製品	55
第23図 出土遺物: 瓦(1)	56
第24図 出土遺物: 瓦(2)	57
第25図 出土遺物: 瓦(3)	58
第26図 出土遺物: 鉄製品(1)	59
第27図 出土遺物: 鉄製品(2)	60
第28図 出土遺物: 鉄製品(3)	61
第29図 出土遺物: 鉄製品(4)	62
第30図 出土遺物: 鉄製品(5)	63
第31図 出土遺物: 鉄製品(6)	64
第32図 出土遺物: 鉄製品(7)	65
第33図 出土遺物: 古銭	65

## 表 目

第1表 出土遺物観察表[鉄製品]	46~50
第2表 出土遺物観察表[古銭]	50

## 次

第3表 出土遺物観察表[碁石]	50
第4表 出土遺物観察表[銅製品]	55

## 図版目次

- 原色図版 1  
原色図版 2  
原色図版 3  
原色図版 4  
原色図版 5  
原色図版 6  
原色図版 7  
原色図版 8
- 図版 1 1区礎石1～4精査状況  
図版 2 1区礎石3精査状況  
図版 3 1区礎石4精査状況  
図版 4 1区礎石2・礎石1精査状況  
図版 5 S B 02サブトレンチaセクション  
図版 6 S B 02サブトレンチbセクション  
図版 7 7T北壁・西壁セクション  
図版 8 5T石列遺構精査状況  
図版 9 2区石積1精査状況  
図版10 2区石積3精査状況  
図版11 2区礎石1精査状況  
図版12 2区礎石4精査状況  
図版13 2区石積5精査状況  
図版14 2区石積4、14T精査状況  
図版15 14Tセクション  
図版16 1区S B 01・02、1～5T出土遺物  
図版17 S B 03出土遺物  
図版18 7・12～14T出土遺物  
図版19 2区石積1・4・5出土遺物  
図版20 2区石積2・3出土遺物
- 図版21 2区石積3出土遺物  
図版22 3～5T、S B 01出土鉄製品  
図版23 1区S B 02出土鉄製品  
図版24 1区S B 03出土鉄製品(1)  
図版25 1区S B 03出土鉄製品(2)  
図版26 1区S B 03出土鉄製品(3)  
図版27 1区S B 03出土鉄製品(4)  
図版28 石積1・2・7・13T出土鉄製品  
図版29 出土遺物：碁石  
図版30 出土遺物：砥石  
図版31 出土遺物：銅製品(1)  
図版32 出土遺物：銅製品(2)  
図版33 出土遺物：古錢  
図版34 出土遺物：軒丸瓦  
図版35 出土遺物：平瓦  
図版36 出土遺物：軒平瓦・輪違  
図版37 出土遺物：丸瓦(凸面)  
図版38 出土遺物：丸瓦(凹面)

## 第1章 過去の調査

当城址に関する調査は、本格的な調査としては平成3・4年度に実施された本丸部平面調査(第1次)、平成5～7年度に実施された本丸石垣修築復元に伴う調査(第2次)に続き、平成10・11年度には二本松城址総合調査事業として新城館に比定される平場の調査(第3・4次)を、平成12年度は本丸西側の帶郭の調査(第5次)を、平成13年度には搦手門跡付近の調査(第6次)を、平成14年度には本丸南側正面部の調査(第7次)を実施している。以下にその概略をまとめることとする。(第2図)

【第1次調査】 期間：平成3年3月6日～同年8月2日(延97日間) 面積：約3,000m<sup>2</sup>

霞ヶ城公園整備計画に伴い、本丸跡の天文台及び休憩所・便所等の既存建造物が撤去されたため、本丸跡平場をA・B・C地区、その周辺部をD地区、さらに本丸直下大石垣と前面平場をE地区と便宜上呼称し、調査を実施した。なお当調査が二本松城址における初の本格的な発掘調査であった。

〈発見遺構〉 A～C地区：掘立柱建物跡8棟・掘立柱塀跡3列・礎石立建物跡1基・井戸跡1基・溝状遺構1条・土壙3基・性格不明石列1条

D地区：虎口右側隅角部から天守台東側入角部に至る全長約56mの石垣

E地区：現存大石垣の右側に連続する高さ約4m・長さ約8mの石垣、及び大石垣前面平場から柱穴とピット約200基・土壙1基

〈出土遺物〉 A～C地区：小刀(小柄)・こうがい・吸口・古銭「至道元寶」「熙寧元寶」「元豐通寶」「政和元寶」「洪武通寶」「永樂通寶」「寛永通寶」

D地区：落款・石臼・石皿(ヒデバチ)

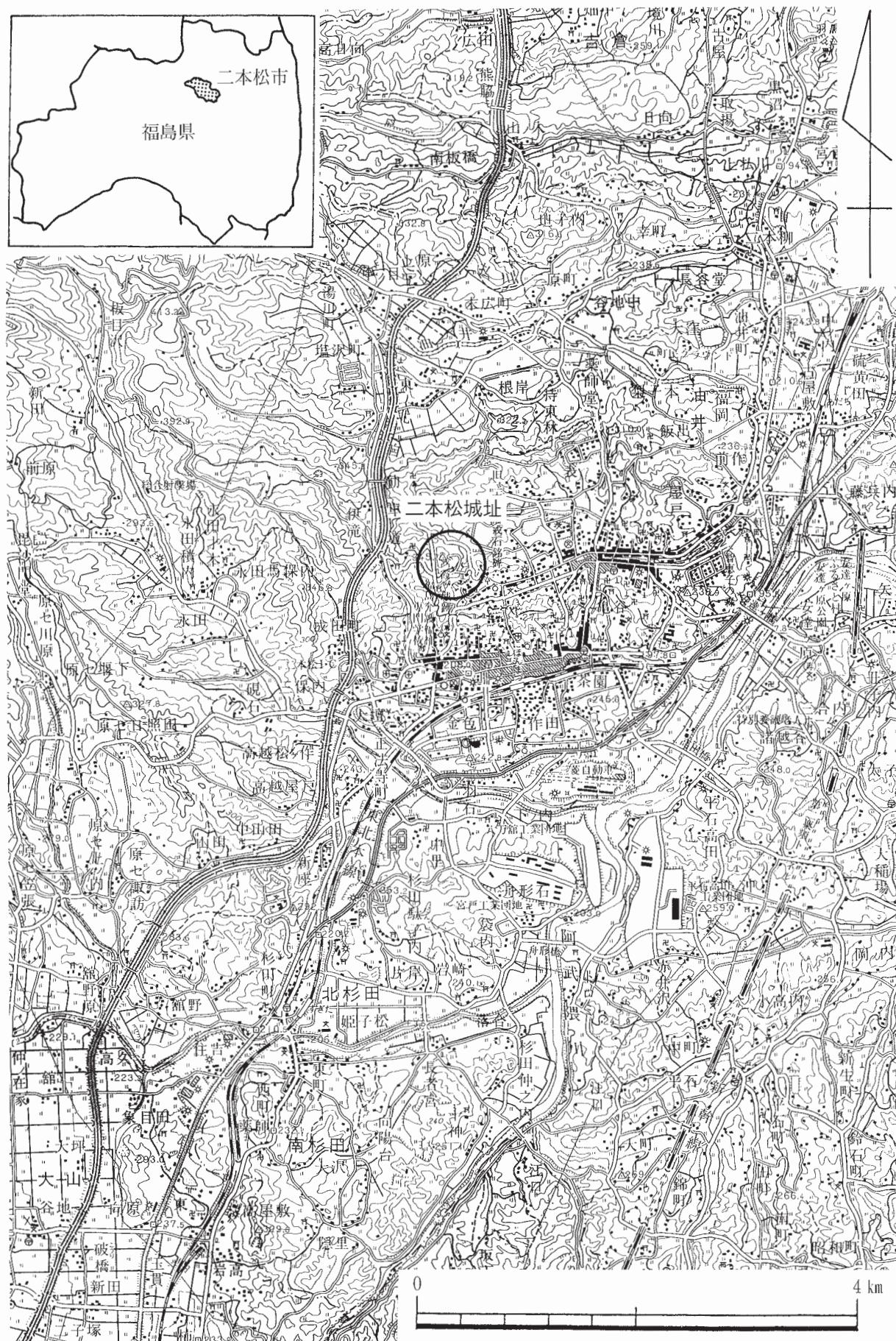
E地区：油皿・縁・雁首・古銭「熙寧元寶」

〈まとめ〉 A～C地区検出の建物跡は、配置関係や切り合いなどから5期にわたる時期区分が想定された。特にSB01は庇付きの身舎と考えられ、伊達成実による整備期に相当する主屋で、その東西に各々付属建物を配している。D地区の検出石垣は、最も残りの良い部分で9石であったが、始築時に相当する慶長期の穴太積みによる古式石垣をはじめ、その後に改築された元和期・寛永期・江戸後半期と、各時期の石積様式が確認でき、本丸石垣の変遷を紐解く上で大きな成果であった。なお、詳細については、『二本松城址I』(平成2・3年度調査報告書 平成4年3月)を参照されたい。

【第2次調査】 期間：平成5年8月13日～同7年6月30日 面積：約2,200m<sup>2</sup>

第1次調査の成果を受けて本丸石垣を修築・復元するため、3年11月に二本松城址石垣復元委員会を組織し、文化財としての本格的な整備を図るべく検討作業に入った。その結果、第1次調査前の既存石垣の大部分は昭和期の修復であることが判明したため、基本方針として本丸全体を対象に“二本松城址が城郭として機能していた時代=安土桃山～江戸時代の技法のなかで、修築・復元を進めることが望ましい。”との結論付けがなされた。

これを受け、二本松城址本丸石垣修築復元事業に着手した。そして、工事と調査が大規模、



### 第1図 遺跡位置図

かつ慎重さを要する学術調査を目的とすることから、教育委員会と市長部局の専任職員からなるプロジェクトチームを組織、約2年の歳月と総工費約5億3千万円を費やして実施した。

〈基本方針〉

1. 時代性=安土桃山・江戸時代に機能した二本松城の、各時期の石積様式を活かしたこと。
2. 伝統技術=先人が残した知恵と技術をくみとり、石の石配方法や加工方法にそれぞれの時代を反映した技術を採用したこと。
3. 地域性=二本松城の構築技術を調査・検討し、ノリ・ソリなど二本松城ならではの特徴を活かしたこと。
4. 強度=裏込め石の選択や、軟弱な支持基盤の補強、雨水処理など、できる限りの耐久性を考慮したこと。

〈まとめ〉 二本松市独自に作成した作業工程要領=マニュアルに基づく検討を経て、全国でも初めての例とされる本丸石垣全体を対象とした当事業は、所期目的を概ね達成できたといえる。また、工事に並行して隨時慎重な調査を実施することで、現存石垣の内部から旧石垣の一部が検出され、古記録・絵図との比較検証から、蒲生氏による慶長初期の本丸石垣を、寛永初期に加藤氏が拡張して現況の縄張りに至ったことが判明したことは、大きな調査成果であった。なお、詳細については、『二本松城址Ⅱ』(二本松城址本丸石垣修築・復元事業報告書 平成9年3月)を参照されたい。

【第3次調査】 期間：平成10年6月8日～同年7月24日(延32日間) 面積：約500m<sup>2</sup>

【第4次調査】 期間：平成11年6月7日～同年8月21日(延46日間) 面積：約600m<sup>2</sup>

平成6年度に「二本松城学術検討委員会」を組織し、主に遺跡としての側面から城址の保存管理について調査・検討を行い、9年度に二本松城址保存管理計画を策定した(『二本松城址保存管理計画報告書』平成10年3月)。その中で、今後の保存管理及び活用をする上で城址全体の現状把握と遺構確認等が最優先とされた。この提言を受け、9年度に城址全体の現況平面測量図を作成、10年度から「二本松城址総合調査事業」と称し、長期計画により資料収集を目的とした遺構確認調査を実施することとなった。調査地区は、中世から戦国期の新城館及び再蒲生期二城代時代の西城比定地である通称“少年隊の丘”を対象とし、土捨て場・平場面積等の関係から第3次・第4次の2ヶ年にわたって調査を実施した。なお平成11年度の第4次調査から文化庁所管国庫補助対象事業となった。

〈発見遺構〉 掘立柱建物跡3棟・掘立柱柵列跡6条・溝跡2条・土壙11基・焼土遺構6基・石敷遺構1基・石組遺構2基

〈出土遺物〉 陶磁器片(相馬・志野織部・肥前等)・鉄製品(釘・ヒウチガネ・クサビ・弾丸・小札・鉄宰等)・銅製品(雁首等)・漆木製品・古銭・碁石

〈まとめ〉 中世から戦国期に相当する遺構・遺物はほとんど確認されず、掘立柱建物跡のうち2棟は出土遺物から18世紀後半期に位置付けされた。しかし、絵図等史料から当地区に新城館及び西城が置かれたことはほぼ間違いない考察であることから、中世から近世後半期まで普遍的に建物等諸施設の建て替えが行われたためと判断された。また、焼土遺構のうち直径4

m・深さ2mほどの大穴からは、人為的に廃棄された大量の焼土と炭化材が出土した。畠山・伊達両氏の二本松城攻防戦の末、畠山氏が自燃し開城、入城した伊達成実がその跡を清掃したとする諸記録がある。それによると、自燃した場所を実城・本丸・本城・城中などと記している。第1次調査では自燃の痕跡と見られる遺構はまったく確認されていないことから、上記の焼土遺構が自燃、そして清掃の痕跡である可能性が極めて高いと考察された。したがって、当該地区は少なくとも天正期において、本丸・本城的機能を十分有していたと判断された。なお、詳細については『二本松城址Ⅲ』(平成10・11年度発掘調査報告書 平成12年3月)を参照されたい。

【第5次調査】 期間：平成12年9月14日～同年11月15日(延43日間) 面積：約825m<sup>2</sup>

本丸西側、一段下の南北に長い平場、通称“ミニゴルフ場”的北側半分を対象とし、畠山期の侍屋敷跡の検出が予想されることから、中世の生活実態を明らかにすることを目的とした。

〈発見遺構〉 掘立柱建物跡2棟・溝跡4条・土壙7基・石敷遺構1基・石列遺構2条・井戸跡2基

〈出土遺物〉 陶磁器片(岸等)・軒丸瓦・鉄製品(釘、クサビ等)・銅製品(銅碗、雁首等)・碁石

〈まとめ〉 当平場は昭和期の公園整備の際に攪乱を受けており、本来の平場の幅が現況の半分以下であること、その平坦面も急峻な地形を盛土して確保していることが明らかとなった。また盛土しながら積んだ自然石による石組の井戸が発見され、これが慶長年間の遺構であることから、当平場を成形した時期も同時期とみられる。さらに、北部に検出された土壙から、当平場北部が畠山期の“権現丸”として機能した可能性が指摘された。したがって畠山期と慶長期と、少なくとも2時期の改変・利用が判明し、近年までこの慶长期の様相を維持していたことが推察された。

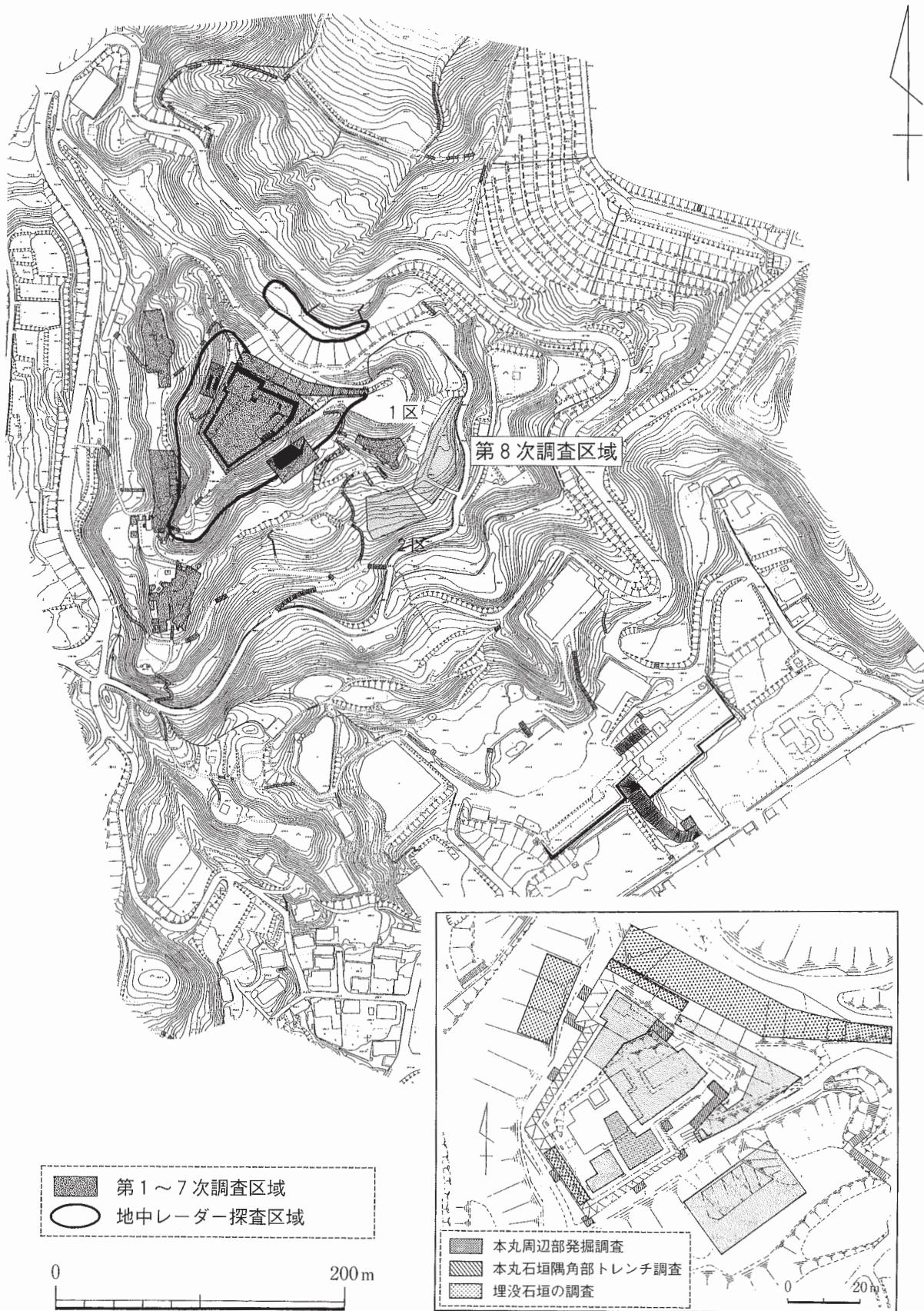
【第6次調査】 期間：平成13年9月4日～同年11月9日(延39日間) 面積：約970m<sup>2</sup>

本丸西側、一段下の南北に長い平場、通称“ミニゴルフ場”的南側半分と、搦手門付近を対象とし、搦手門周辺の施設、及び門の変遷等を明らかにすることを目的とした。

〈発見遺構〉 掘立柱門跡1基・溝跡2条・土壙2基・ピット48基・石垣54.8m

〈出土遺物〉 陶磁器片(肥前、相馬、唐津等)・瓦・灯明皿・鉄製品(釘等)・銅製品(吸口・雁首・古錢等)・石製品(砥石・石臼)

〈まとめ〉 当平場は昭和期の公園整備の際に攪乱を受けており、本来の平場の幅が現況の半分以下であり、通路的な帶郭であったことが判明した。また2時期の門跡が確認された。第1期は掘立柱による冠木門で、現存する門跡のやや南側に検出された。初期蒲生氏の所産と推定される。第2期の門跡は現存する礎石立の門跡で、高麗門である。搦手門台石垣の調査により門台石垣との同時性および加藤氏の時期の構築であることが確認された。寛永期の所産と推定される。さらに平場東斜面中腹には4段約54.8mにわたる石垣が検出され、畠山氏による切岸等の施設を加藤氏が利用して築いた石垣であると判断され、改めて城内における同様の立地に対する石垣調査の必要性が指摘された。以上のことから搦手門付近が加藤氏により石を用いて整備されたことが明らかとなった。



【第7次調査】 期間：平成14年6月5日～同年8月8日(延42日間) 面積：約610m<sup>2</sup>

本丸東側に位置する“乙森”広場の一段下、通称“りんどうの丘”及び日影の井戸付近を対象に調査を実施した。城址内の南側に位置する平場については大石垣下平場に続いて2ヶ所目の調査であり、ほとんど不明である城址正面部の様相を明らかにすることを目的とした。

〈発見遺構〉 掘立柱塀跡1条・礎石立塀跡1条・柱穴128基、溝跡6条、土壙10基、焼土遺構2基、集石遺構、石積(石垣)2ヶ所

〈出土遺物〉 陶磁器片(岸、本郷、織部、志野、漳州窯系、相馬等)・灯明具・香炉(岸)・猿型水滴・天目茶碗(瀬戸・美濃系)・瓦(軒平、軒丸、平、丸)・土師質土器・須恵器系陶器・鉄製品(小札・釘・玉・鉄滓等)・銅製品(刀子・吸口・雁首・古錢等)・石製品(硯・碁石・石臼)、カマド材状土製品、縄文土器片

〈まとめ〉 当平場は、本来傾斜していた地形を大規模に切り出して平坦面を確保していることが明らかとなり、少なくとも3期にわたる変遷が判明した。第Ⅰ期は遺構の大部分が属する地山直上に営まれた時期である。第Ⅱ期はⅠ期に30cmほど盛土して整地したもので、Ⅱ期はさらに2時期確認されており、Ⅱ-1期には大規模な掘立柱塀跡、これより新しいⅡ-2期には平場の南西辺に“屏風折”的礎石立塀跡が検出されている。

日影の井戸周辺で新たに検出された2ヶ所の石積は、絵図に描写されていない石垣が埋蔵されている可能性を示唆するものである。これまでに検出されている穴太積石垣と異なる点として、(1)石材が小型であること(2)勾配が急であること(3)裏込石がみられないこと、などが指摘されている。これらの石積の年代については、中世山城的な施設である切岸に伴うことなどから、当城址内では蒲生時代をさかのぼる最も古い時期に属する可能性が考えられる。

## 第2章 調査経過

### 第1節 調査要項

遺跡名称	二本松城址(遺跡地名表登録番号 2100019)
所在地	福島県二本松市郭内四丁目228-1
遺跡現況	公園
調査面積	約2,600m <sup>2</sup> [掘削面積約780m <sup>2</sup> ] (遺跡全体面積72,000m <sup>2</sup> )
遺跡性格	城館
遺跡時期	中世～近世
調査目的	保存管理計画に基づく資料収集のための発掘調査
調査期間	第8次：平成15年(2003年)6月18日～同年9月5日(延べ42日間)
土地所有者	二本松市(市長 三保恵一)
調査主体	二本松市教育委員会 教育長 渡邊專一
調査担当	中村真由美(二本松市教育委員会文化課副主査・日本考古学協会会員)
調査補助員	桑原尚子 門馬久子(以上、二本松市社会教育指導員)
調査指導	鈴木 啓、草野和夫(以上、二本松市文化財保護審議会委員) 根本豊徳(大平住民センター所長)
作業員	安斎丑一 石川公夫 遠藤嘉一 菅野勝与 国分正三 斎藤武雄 佐藤四郎 鈴木重治 土屋 博 円谷由光 橋本陽子 本田イサ子 松本長吉 宮島三郎 安田ミヨ子 柳田ユキ子 吉田清治 渡辺金造 渡辺三男(以上、地元有志)

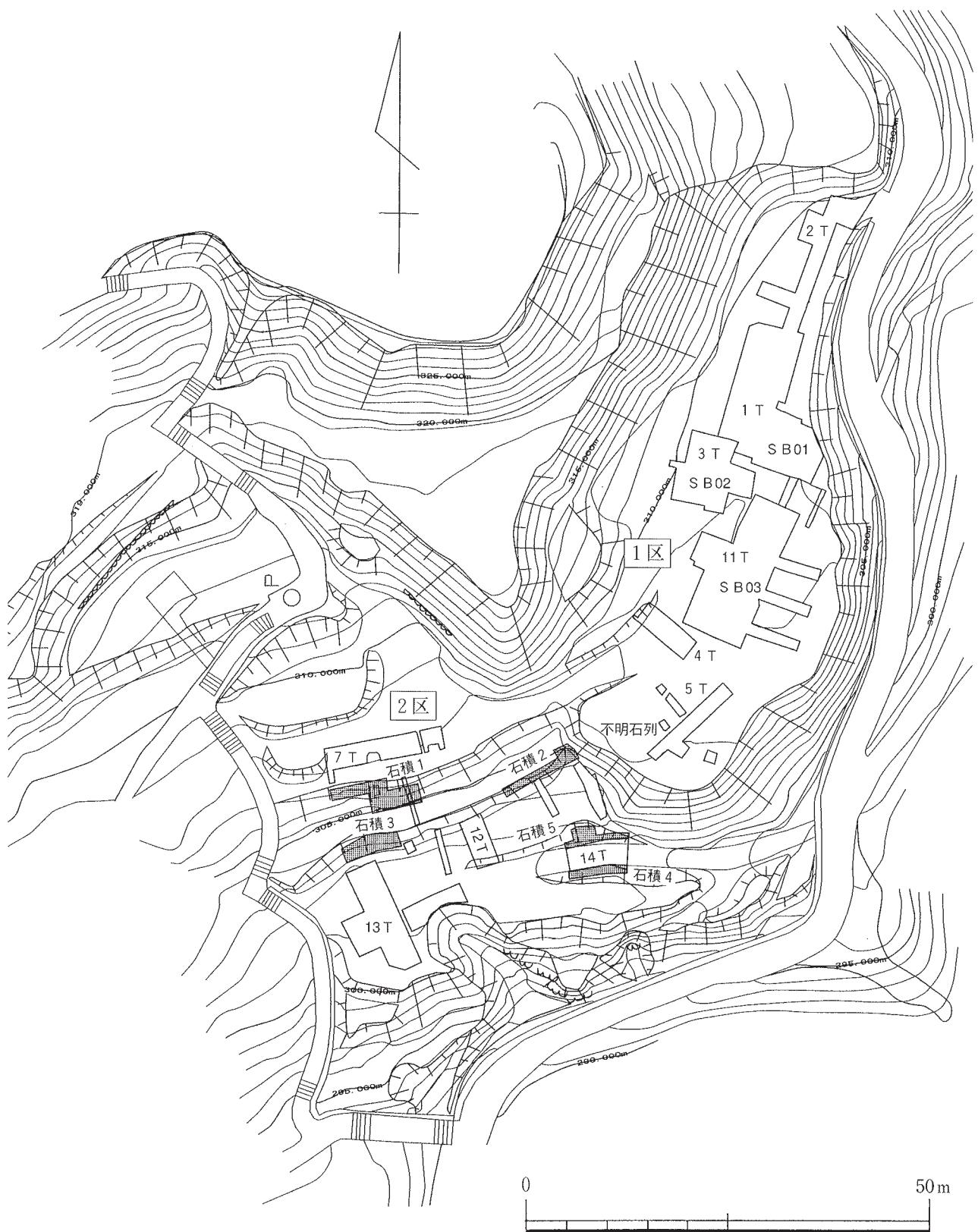
### 第2節 調査に至る経過

当城址は都市公園として利用されていることから、“遺跡の保存”と、“公園としての活用”という2つの面を推進していく必要がある。市教育委員会は活用するためには城址の現状把握、すなわち遺構の残存する場所と規模、性格等を把握することが不可欠であるとして、「二本松城址総合調査事業」と称し、長期計画により資料収集を目的とした発掘調査を実施することとした。平成9年度には城址の平面測量が実施され、正確な地形の把握がなされた。平成10・11年度は東・西城の二城代時代に西城が置かれていた「新城館」と比定される平場である少年隊の丘を調査対象とした。12年度は本丸西側、一段下の平場であるミニゴルフ場北側を調査対象とした。13年度は同じ平場の南側半分及び搦手門付近を調査対象とし、およそ本丸西側における調査を終了した。14年度は本丸正面部に移り、本丸東側に位置する“乙森”広場の一段下、通称“りんどうの丘”及び日影の井戸付近を対象に調査を実施した。

今年度の調査は、本丸東側に位置する“乙森”広場の南東方向1段下の平場及び日影の井戸南方傾斜部付近を対象に調査を実施した。城址内の南側に位置する平場については昨年度に引き続き3ヶ所目の調査となる。

### 第3節 調査日誌

- 6月18日 機材搬入。起工式。調査区(1・2区)及びトレンチ(1~11T)設定。表土層の掘削開始。
- 6月19~20日 1~3Tを拡張しながらL3'を検出。1TでSB01、3TでSB02・SD01検出。11T表土除去。8・9T精査。
- 6月23・25日 1~3T精査。P1検出。SB03検出。
- 6月26・30日 1・2Tセクション実測。SD01・P1半裁、実測。石敷1・2、礎石1実測。トレンチを拡張しながらSB01・02の全長確認。SB03より直違紋入軒丸・軒平瓦出土。根本氏来跡指導(26日)。
- 7月1~3日 SB01を6区(a~f)に分け、c・f区の礎を一段ずつ除去。SB03を3区(a~c)に分け、a区の礎を一段ずつ除去。1TP2半裁、実測。
- 7月4・9・14日 SB01-d・SB03-a区の礎を一段ずつ除去。4・6TのL1除去。SB02サブトレンチa・bを設定、掘削。鈴木啓先生、根本氏来跡指導(9日)。
- 7月15・16日 SB01-b・d区の礎を一段ずつ除去し、束石を確認。  
SB02サブトレンチa~eを設定、精査、実測。SB02が亀腹状の盛土をしてから當まれていることが確認される。SB03サブトレンチa・b、南東サブトレンチを設定、掘削。瓦層の範囲確認。
- 7月17日 SB01全体精査。SB01サブトレンチf掘削、精査。SB02内焼土半裁、実測。SB03サブトレンチa~c精査。4Tセクション実測。5TL1掘削。
- 7月18日 SB02サブトレンチf設定、精査。SB03サブトレンチd掘削。SB03サブトレンチa~c精査。SB03西側中央部の精査、階段部検出。5TL2除去。
- 7月22・23・25日 SB02サブトレンチa・b実測。SB03サブトレンチa~d精査、焼土3検出、半裁、実測。SB03西辺精査。5T精査。7T1・2層除去。
- 7月28・29日 SB03サブトレンチa~c・f、SB02サブトレンチe・f、5T精査・実測。SB03サブトレンチe・g、階段部精査。7T2層除去。SB01~03の土台石の水洗い。石積1~5の検出。18代当主丹羽長聰氏来跡(28日)。根本氏来跡指導(29日)。
- 7月31日、8月1日 1区全体精査。SB03サブトレンチe・g、SB02サブトレンチe実測。7T3~4層掘削、精査。石積2前サブトレンチ精査。石積3~5検出。12・13TL1除去。県文化財グループ菊地芳朗氏来跡指導(31日)。(財)福島県文化振興事業団青山博樹氏、五十嵐敏裕氏来跡(31日)。
- 8月4~8日 SB01~03エレベーション実測。7T精査、実測。石積1~5の根石基礎部精査、写真撮影、サブトレンチ実測。12~14T精査、実測。



第3図 トレンチ配置図

	草野和夫先生来跡指導(4日)。博物館実習生3人受入(4~8日)。まほろん研修生21人受入(6~8日)、郡山女子短期大学桑野先生来跡(6日)。
	東北学院大学門屋先生来跡(7日)。鈴木啓先生来跡指導(8日)。
8月11・18・20日	雨水の除去。S B03中央サブトレンチ設定、礫を一段ずつ除去。7・12~14T精査、写真撮影、実測。5T拡張。石積1精査。 市長、建設部長、建築住宅課長、都市計画課長、公園係長、教育長、教育次長、文化課長、文化係長来跡(20日)。
8月21日	発掘成果について報道機関へ公開。雨水の除去。1区清掃。S B03中央サブトレンチの礫除去、精査。7・12・13T実測。5・14T精査。鈴木先生来跡指導。
8月22日	1・2区清掃。5T拡張、精査。14T精査。 (財)福島県文化振興事業団木本元治氏来跡指導。
8月23日	全体清掃、遺構表示等説明会準備。現地説明会開催。121人参加。
8月25日	7T拡張、5・14T、石積2精査、写真撮影。2区東端斜面精査。全体清掃。写真測量(25~27日)。
8月28・29日	2区東端斜面精査、写真撮影。5T実測。全体清掃。見学路づくり。
8月30・31日	第3回北日本近世城郭検討会開催。北垣聰一郎先生来跡指導(30日)。
9月2~5日	平場部分は重機、遺構部分は人力による埋戻し開始。S B01・03には除去した玉石を戻す。2区は土納袋により石積を保護し、埋戻し。機材撤収。

#### 第4節 調査方法と概要(第3・4図)

今回の調査地は2つの地区に分けられ、本丸東側に位置する“乙森”広場の南東方向1段下の平場を1区、日影の井戸南方傾斜部付近を2区として調査を実施した。トレンチ調査を基本とし、遺構の検出状況によりトレンチを拡張して確認を行った。

1区は標高309m前後を測る平場で、乙森との比高差は約20m、本丸とは約36mを測る。主軸をほぼ南北にとり、南北約76m、東西最大幅約25mを測り、南半分がやや膨らんだ細長い平場である。ほぼ平坦で北辺から西辺を乙森から落ちる急峻な崖に囲まれ、東辺と南辺は急峻な崖面となり約8~9m落ちて通路に達する。北東部はこの通路がやや内側にカーブすることにより平場の幅が狭くなっている、通路開削の際に平場が一部掘削されたことが確認されている。したがって本来この部分の平場幅はもう少し広かった可能性がある。現況は平坦であるが、西側の斜面部から東側の一段低い道路側へ向けてやや傾斜する。さらに、西側斜面基部がうずたかく、これは斜面の崩落土によることがわかる。

2区は南から北へ傾斜する南北約32m、東西約40mの範囲を調査対象とした。3段の平場が確認され、一番上の平坦面は7Tを設定した日影の井戸から続く傾斜地の末端で、標高は308m前後を測る。ここから3m急激に落ちて標高305mの平坦面に達するが、ここは幅2~3mの犬走り状を呈する。さらに3mほど急激に落ちて一番下の平場に達する。この平場は北から



第4図 1区遺構配置図

南へ緩やかに傾斜し、標高300～302mを測る。南北約15m、東西約40mを測り、東端は通路状に窪んで前述した通路へ達する。したがって南東部の平場端は土壘状を呈している。この平場の南端は急激に落ちる斜面で一部花崗岩が露頭している。

トレンチは全部で14ヶ所設定し、遺構の検出状況により拡張しながら調査を実施した。1区の北端に2T、その南側の平坦地に1T、さらにその南方やや西よりの傾斜地に3Tを設定し、1TではSB01、3TではSB02が検出され、さら2Tでは礎石1～4が検出されたことから、それぞれ拡張したために結果的に1～3Tは連続した調査区となった。また、1区と2区の接続部分の1区側に4T、1区の南東部の一段高い平坦地の南方に5T、北方に6T、6Tの西側、平場の中央部に11Tを設定した。5Tは東西に4ヶ所確認のトレンチを入れて調査した。6Tは11TでSB03が検出され、11Tのサブトレンチとして拡張して調査した範囲に含まれたため欠番とした。2区では日影の井戸から続く傾斜地の末端部分、一番標高の高い平坦地に7Tを設定した。ここから落ちる傾斜地に3ヶ所のトレンチ(8～10T)を設定したが、調査状況により欠番とした。この傾斜地では石積1が検出されている。また一番低い平場のうち最も南北幅の広い部分に13Tを設定し、13Tよりやや東、2段目の傾斜地の中央部下平場に12Tを設定した。14Tは2区南東部の道路状を呈する部分に設定した。

検出された遺構は、1区において土台石を伴う建物跡3棟、礎石跡4基、土坑1基、不明石列1条、ピット2基、焼土遺構3基、2区において石積5ヶ所、礎石跡4基、ピット2基が検出されている。

1区では各トレンチで検出された建物ごとに整地をしているため、互いの相関関係が把握しにくい状況であり、全体の基本層序は把握できなかった。したがって、層位の機能でもって分類をしたため、特にL3とL4においてはまったく同質の層ではない場合もある。以下、機能分類を示す。L1：表土層、L2：耕作土層あるいは後世の盛土層、L2'：黄茶褐色土層(SB02西側のみでみられた遺構面をパックした層)、L3：整地層①(1～3Tの生活面)、L4：整地層②(SB01・02の石材を半分ほど埋設している層)、L5：崩落土層(傾斜部に起因する人為的でない盛土)、L6：整地盛土層(SB02の基壇)、L7：整地層③(暗黄灰茶褐色土で地山粒が多く混入している)、L8：整地層④(暗黒茶褐色土で火碎流ブロック・炭粒を含む)、L9：地山(花崗岩風化層)の10層が確認されている。

L3はSB01・02の検出面であり、SB03ではみられなかった。L3とL4ではどちらがSB01・02の生活面か不明である。L7はSB01～03を営む際の基盤となった層であり、L8が中世の遺構面である可能性が考えられる。SB03の生活面は瓦層がL4上面にあるためL4の可能性が高いと考えられるが、礎石4基はいずれもL3上面から営まれており、最終的にはL3上面を生活面とした時期があったといえる。

2区でもトレンチごとに層序を確認している。

7TではL1：表土の下は大規模なL10：整地盛土層がみられ、その下層に自然地形である開析谷の堆積土が確認されているが地山層までは確認していない。

石積遺構はほぼ表土のみであり石積の際から出土したものについて下層とした。12・13Tや石積3サブトレンチはL1：表土及び道路層、2層：暗茶褐色土層が堆積し、3層：暗黄茶褐色土の遺構検出面に達する。3層は自然地形を整地した層とみられる。14TではL1：表土及び道路層がみられ、3層：整地面に達する。その下層に2層ほどの堆積がみられ、L9：地山層へ達する。

## 第3章 調査結果

### 第1節 1区の遺構と遺物

遺構面は東側で表土から10cm程度と浅く、またSB03はほぼ露出していた状態であったが、遺構の残りが非常によいことから、この地区が後世に大規模な改変を受けていないことが判明した。検出された遺構は礎石立建物跡3棟、礎石跡4基、溝跡1条、焼土遺構3基、不明石列1条、ピット2基である。建物跡はいずれも土台石を伴う建造物であり、東西幅が北側に比較して広い、平場の南側に集中して検出されている。以下、遺構ごとに詳述する。なお、遺物についてはそれぞれの遺構に伴うものについては概略を記載するが、その詳細については第3節において、遺物の種別ごとに記載することとする。

#### (1) 級石立建物跡（第5～11・17・22～33図、原色図版1～6、図版8・9・16～20）

1号建物跡[SB01] 1Tの南端に検出された遺構で、全体を確認するため1Tを東に拡張して調査を実施した。3棟の中で最も北側に位置し、10.5×4.8mを測る東西棟である。幅約50cm、控え約60～80cm、厚さが約20～30cmを測る花崗岩の荒割石を、小口を外側へ向け長方形に配し、内部には直径約15～30cm程度の玉石(川石)が充填されて検出されている。これらの花崗岩は土台石とみられるため、周囲の土層を確認するために、遺構西側にはサブトレントfを、南側にサブトレントd(SB03と共通)を設定して調査を実施した。その結果、サブトレントdの状況から、SB01の南辺はL7上面に約18cmの盛土(6層)がなされてから土台石を据えていることが判明し、サブトレントfの状況から建物西辺においてはL7上面に据えられていることが判明した。サブトレントdは平場東側であり、全体の地形としては谷側、すなわち傾斜部に位置する。したがって、L7で当平場を整地した際に完全に水平にできなかったため、土台石を据える際に盛土(6層)をして高さを調整した可能性が考えられる。

土台石をL7上に据えた後は、西辺では石の厚さの5～8割程度をL4で埋設し、さらに残りの部分をL3で埋設していることが観察された。

またサブトレントdではSB01の前面約60cmの地点に、土台石と平行して東西に長い溝が検出されており、上幅約68cm、下幅約30cm、深さ約42cmを測り、断面形はU字状を呈する。土台石を据えた際の盛土(6層)から掘り込まれていることとその方向性からSB01と同時期に営まれたものである可能性が高い。したがって南辺には雨落溝が伴う可能性が示唆される。しかし、北辺にはその痕跡は検出されないことと、その規模・構造からSB01～03も含めた建物群全体の排水のための溝である可能性が高い。

土台石は隙間なく並べられているところが多いが、厳密には約10cm前後の間隔をあける部分もみられる。またほぼ水平に据えられており、土台石上面を標高309.25m前後に揃えている。ただしこれは西辺周辺であり、東へ向かうにつれやや傾斜し、東端では標高309.1m前後に達する。前述したように、南東部はL7上に盛土をして石を据えていることがわかっており、地盤が強固ではないために沈下した可能性が考えられ、本来は309.25mを目安として水平に土台石を据えたものとみられる。



第5図 SB01実測図

また、建物の南西角石を含む南辺の西寄りの4石は大きく南へ傾いて落ちており、何らかの理由で地盤が沈下したと思われる。沈下した後にL4で埋められた可能性が高く、すなわちSB01廃絶後にL4が整地されたことを示唆する。したがって、SB01が機能していた時には土台石はL7上に据えられただけの状態であったものと考えられる。後述するが、SB02がL4整地後に営まれたとすれば、SB02の方がSB01より新しいが、L7上にL6を亀腹状に盛土した状態で使用したとすればSB02との前後関係は不明であり、同時期の可能性が考えられる。

また、建物の東部、特に北東隅角の石材は平場の落ち際に位置しており、建造物の基礎としては安定感に欠ける状態にある。したがって、東側に現存する道路の開削により平場は削平されたものと考えられ、本来の平場はより東側へ広い平場であったことが推測された。

内部に充填された玉石は土台石の上面より最大で20cmほど高く積まれており、腐葉土が覆つてはいたが、現況では地表に露出した状態であった。玉石の堆積状況を確認するためSB01の平面を6区分し、南西角をa、その北隣をb、aの東隣をc、その北隣をdというようにaからfまで区分して、市松模様にb・c・fの玉石を除去して調査を行った。なお、調査の状況でd区の玉石も除去して調査した。その結果、玉石は上部ほど土の混入が多いことが判明し、また土混じりの玉石で土台石を覆っている部分もみられるため、玉石の一部はSB01廃絶後に積まれた可能性が高い。さらに玉石を土台石の上面と同じ高さあるいは若干レベルを下げた状態まで外したところ、長径5~10cmほどの石が密集して検出されるようになり、少なくともこの部分は本来の状態を保っていると判断された。特にSB01-bからは直径30cmを測る平坦な石が2基、SB01-cから1基検出され、規則的に配置されてはいないが、東石の機能をもつ可能性が指摘される。また、この建造物の梁行中央の土台石は東辺、西辺とも長く、さらに2つの土台石をつなぐライン上には長方形の石がラインに沿って据えられている。このライン上の石材上面の高さは西辺の元位置を保っていると思われる土台石の上面と高さをほぼ同じくしており、建築当初からの構造物であることがうかがえた。これらは棟持ち柱を支えるための施設とみられ、ライン上の石材が建物の中央ではなく、東側に偏っていることから、東側のみ中2階をもつ上屋構造を推測することができる。

南辺の中央前面には、長径約90cm、幅約50cm、厚さ約30cm以上の石が建物に沿って東西に長く据えられている。この石の上面は平坦であることから、階段の機能も備えたアガリ石と判断され、この部分が入口であることが推察される。したがって平入りの建造物であることが明らかとなった。また、この玉石を除去している最中に、SB01-dの第2層目から銅板製品が出土しており、不動明王の持つ剣の一部とみられる。ただし前述したように土砂と玉石が混入した層であるため、SB01に伴うものとは限らない。

出土遺物はSB01周辺の上層から平瓦片32点、丸瓦片4点、陶器片6点、磁器片9点、内1点は染付のみられる碗(図版16b)である。さらに土師質土器片1点、炻器の甕の口縁部片1点でいずれも小片である。第17図2(原色図版5-2)は、黄白濁した釉が内外面ともに施され外面は底部際まで釉がみられる三脚の陶器の碗である。L1からは磁器片7点が出土し、内1点は無文で口唇のみ茶色を呈するものである(図版16c)。陶器片2点、平瓦片11点、磨滅した土

師質土器片1点がみられた。また硯1点(第17図4、原色図版5-3)は薄手で表面は丁寧に研磨され、裏面は割れたままで加工しておらず、使用痕はあまり見受けられない。

L1～L2からは土師質土器片3点、平瓦片1点でいずれも小片かつ磨滅している。L2からは陶器片1点、磁器片2点、L3からは平瓦片12点、丸瓦片2点、すり鉢片1点、明治期以降の磁器片3点が出土している。L4からは灰白濁した釉がみられる陶器の碗1点(図版16h)がみられた。本郷の系統をひくもので、幕末から明治前期の所産である。

S B01-aの礫層上からは陶器片1点、土師質土器片1点が出土しいずれも小片かつ磨滅している。他に平瓦片2点、丸瓦片2点が検出されている。礫1層からは同一個体とみられる磁器片45点(図版16d～f)、陶器片1点、平瓦片6点、丸瓦片1点が出土した。土台石付近からは土師質土器片1点、陶器片1点が出土し小片かつ磨滅している。

S B01-bの礫1層からは平瓦片9点、磁器片1点、染付のみられる碗1点(原色図版5-5)が出土している。

S B01-cの礫1層からは丸瓦片5点、平瓦片1点、軒平瓦1点、陶器片1点、磁器片2点、不明土製品1点が出土している。磁器片の内1点は染付がみられる(図版16g)。礫2層からは丸瓦片1点が出土している。

S B01-dの礫1層からは平瓦片9点、丸瓦片2点でいずれも小片である。また白磁の皿1点(第17図1、原色図版5-1)が検出されており、小型で非常に薄手かつ丁寧なつくりである。礫2層からは丸瓦片2点、平瓦片1点、軒丸瓦片1点、石英質円礫1点、ガラス片2点が検出されている。礫3層からもガラス片1点が検出された。

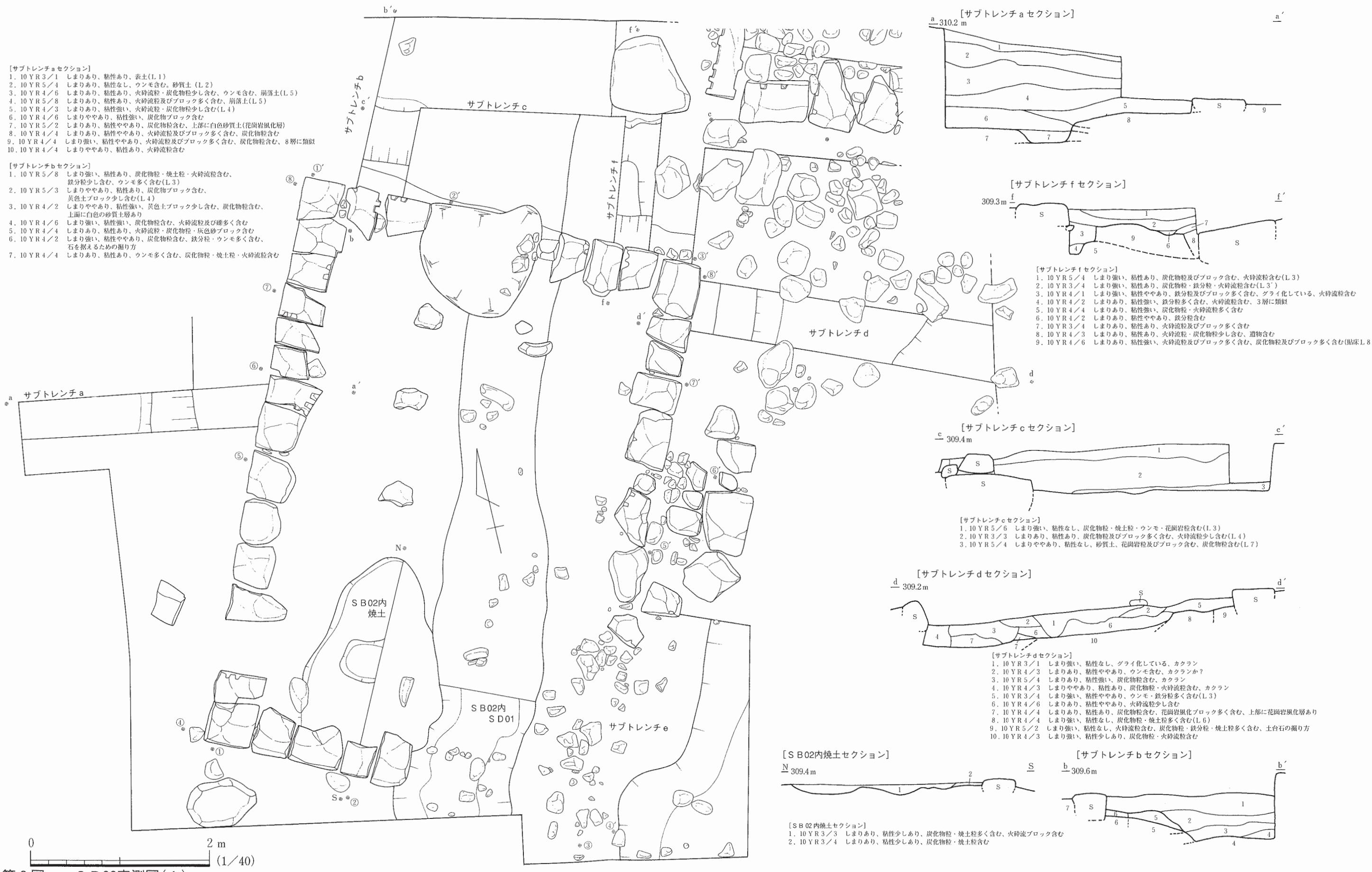
S B01-eの土台石付近からは磁器片2点、1点は染付のみられる碗でS B01のL1、S B03付近L1出土のものと接合する(第17図3、原色図版5-6)。これは過去に接合痕がある。もう1点は口唇のみ茶色を呈する白色の碗である。

S B01-fの礫1層からは染付のみられる磁器片2点、陶器片1点、平瓦片8点、丸瓦片3点、石臼片1点(第16図、原色図版5-4)が検出された。上臼で1/4ほど残存している。

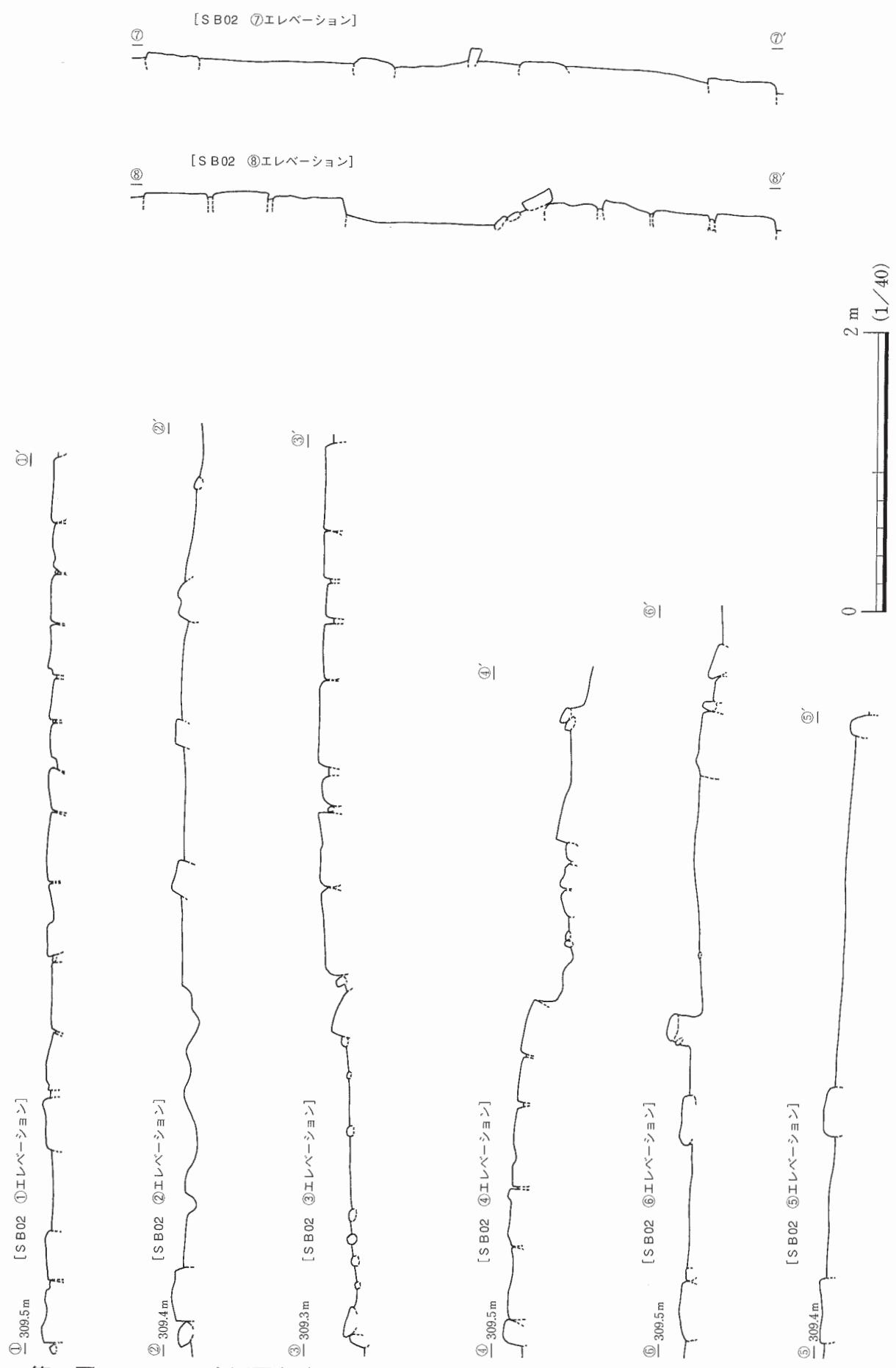
S B01サブトレントfのL3から土師質土器片1点が出土し、焼成後に火を受けていることが観察された。

金属製品は釘19点、不明鉄製品3点、銅製品4点が検出されている。(詳細は別表を参照)

2号建物跡 3Tに検出された1号建物跡の西側に位置する南北棟である。規模は6.3×4.5mを測り、L8上に亀腹状に盛土をした後、その面を掘り込んで土台石を据えていることが観察された。サブトレント(サブa～f)を設定して調査した結果、この盛土はこの建物の土台石より1mほど大きく行われていることが西側と北側で確認されている。土台石上面の標高は西辺と東辺では約10cmの差がみられた。石材は全て花崗岩を用い、石の規模は幅約40cm、長さ約50cm、厚さ約15～20cmを測り、他の2棟と比較して、小型で丁寧に成形されていることが特筆される。内部に玉石は充填されておらず、束石が4基検出されている。規則的に配置され、桁行に沿って北辺との距離は130cm(約4尺)、束石と束石の間隔はそれぞれ90cm(3尺)、梁行に沿った西辺及び東辺との距離は160cm(約5尺)、束石と束石の間隔は120cm(4尺)を測る。カク



第6図 SB02実測図(1)



第7図

S B02実測図(2)

ランにより南東部は破壊を受けているため東石は検出されていないが、この部分にも東石が存在していた可能性が考えられる。しかし、一部が床張り、一部が土間の建造物であった可能性も考えられよう。また、建物南西部にあたる西辺の一部には土台石が存在していない部分があり、ここが出入口の機能を有していた可能性が指摘されている。なお、建物南東部に受けたカクランにより、南東隅の土台石は存在していないが、土台石を据える際に用いたとみられる花崗岩の木端石が残存しているため、土台石が存在していたことがうかがえる。このカクランからは磁器片3点、平瓦片2点が出土している。

建物内部に焼土跡1基が検出されており、L1より磁器片2点、陶器片1点、土師質土器片1点、釘2点が出土しているが時期は明確ではない。

また桁行に沿う形で溝跡が1条検出されているがこれは後世のカクランである。小片かつ磨滅した瓦片31点、磁器片8点、陶器片3点内1点は瀬戸産の皿(図版16t)、土師質土器片1点、砥石1点、釘1点、刀子状鉄製品1点、ガラス片4点が出土している。

出土遺物はL1からはずり鉢片1点、軒平瓦片1点、小片かつ磨滅した平瓦片19点、磁器片14点、内1点は濁った暗緑色の釉がみられ非常に薄手な磁器片でSB03L1出土のものと同一個体である。もう1点は口唇のみ茶色を呈する白色の碗である。またオリーブ色の釉が施された陶器片1点が出土している。L2からは平瓦片18点、染付のみられる磁器片3点、陶器片2点、土師質土器片2点が出土している。L2'からは小片かつ磨滅した瓦片47点、丸瓦片2点、染付のみられる磁器片10点、土師質土器片6点、植木鉢1点、陶器片5点が出土している。第17図9(原色図版4-2)は、瀬戸産の皿で暗黄白色の釉が施され、細かい貫入がみられ見込みには鉄釉で草文が描かれる。非常に小片に破碎し一部はL2出土のものや、L4及びL5出土のものと接合する。図版16iも瀬戸産の皿である。L3からは小片かつ磨滅した土師質土器片1点、瓦片1点、磁器片2点(図版16j)が出土している。L4からは陶器片2点、磁器片2点、すり鉢片1点、土師質土器片1点で、いずれも小片である。陶器の内1点は瀬戸産の皿(図版16k)である。L5からは平瓦片6点、陶器片1点、磁器片1点、すり鉢片1点(図版16l)が出土した。L1~L2からは軒平瓦片1点、平瓦片3点、土師質土器片2点、陶器片6点、磁器片5点、昭和33年の1円硬貨1点が出土している。

サブa L2からは瓦片1点、L4からは小片であるが糠白釉がみられる陶器片1点、L5からは陶器片2点が検出されている。サブbにおいては、土台石の掘り方内から磁器片1点、土師質土器片1点、瓦片2点が検出されているが、いずれも小片で詳細は不明である。L4からは口唇部に炭化物の付着がみられる土師質土器片1点(図版16m)がみられた。サブc L3からは小片かつ磨滅した土師質土器片4点、陶器片1点がみられた。L4からは磁器片2点、すり鉢片1点が出土している。後者は近代に属する。L7からは染付のみられる磁器片1点、すり鉢片2点(第17図5・6、原色図版5-7b・a)がみられた。後者は口縁部に飴釉が施され、幕末~明治初頭に属する本郷である。L8上からは同一個体とみられる陶器片2点が出土しているが、詳細は不明である。サブd L3からは小片かつ磨滅した土師質土器片1点、磁器片1点、L4上からは陶器片1点、碗の高台部である磁器片1点(図版16n)、平瓦片1点が出土し

ている。サブ e L 3 からはすり鉢片 1 点(図版16 o)、磁器片 1 点、L 4 上からは陶器片 2 点、内 1 点は糠白釉と貫入が特徴的な志野織部である。サブ f L 3 からは土師質土器片 2 点、陶器片 2 点、L 8 からはすり鉢片 3 点(図版16 p)、土師質土器片 1 点が検出されている。

ほかに古銭 1 点、碁石 2 点、火縄銃の玉 1 点、釘 24 点、不明鉄製品 3 点が出土している。

3 号建物跡 1 号建物跡の南側約 5 m に位置し、これとほぼ直交して存在する南北棟である。建物の構造及び土台石の規模・材質、玉石の状況等は 1 号建物跡と同様であり、両者は同時期に営まれた可能性が高い。1 号建物跡同様、玉石が露出している状態であったため、桁行を 3 等分し、北から a ・ b ・ c 区として a 区の玉石を一段ずつはずして調査する方法をとった。その結果、 $16.3 \times 5.4$  m を測る非常に大規模な建造物であることが判明した。また、1 号建物跡では土台石は一段のみであったが、3 号建物跡では北辺の一部に 2 段に石材を積んでいる部分が観察された。土台石上面は全辺ともほぼ同じ標高を測るため、地形に合わせて低い部分のみに 2 段に石材を用いたものと判断されよう。

なお、西辺の中央前には階段状に据えた石材が検出されており、入口であることが推察され、1 号同様、平入りの建造物であることが判明した。階段は 4 段確認され、最も上部の段は土台石より 30 cm ほど高く、高床式の倉庫であった可能性が考えられる。また階段前部分には小礫が敷き詰められており、入口として整備された状況がうかがえる。

建造物東側に設定したサブトレーンチ a ~ c (サブ a ~ c) からは丹羽氏の家紋である直違紋の施された軒丸瓦及び軒平瓦を含む大量の瓦片が検出されており、瓦の集積箇所が土台石に沿って 2 列に検出された。土台石際に集積した 1 列と、そこから東側に 3 ~ 4 m 離れてこれとほぼ平行して南北に長く集積しているものとが確認されており、前者は屋根から倒壊した状況を呈するとみられよう。そのほか釘などの鉄製品が多量に検出されているが(詳細は第 1 ~ 3 表)、陶磁器類は非常に少ないとみられ、日常生活の場ではないことが推察される。

出土遺物は、S B 03 付近から軒平瓦片 3 点、瓦片 1 点、土師質土器片 2 点、外面にのみ釉がみられ、3 点とも同一個体である陶器の小片 3 点(図版17 s ・ t) が表採されている。

L 1 からは素焼きの土器片 29 点が出土し、内 1 点は黒褐色を呈した火鉢の口縁部(図版17 y)で外面に菊花状の型押文がみられる。明治期のふすべ焼に類似する。土師質土器片 1 点、炻器片 6 点、すり鉢片 3 点(図版17 v)、平瓦片 63 点、軒平瓦片 4 点、軒丸瓦片 1 点、丸瓦片 8 点、石英質礫 1 点、器面に木目状の文様のある土器 2 点などがみられる。陶器片 14 点が出土し、内 1 点は断面にまで自然釉がみられ、焼成後破損してから再度熱を受けたことがわかる。内面には融解した銅分が付着し、S B 03 サブ a の 2 ~ 瓦層出土のものと類似した様相を呈する。また濁った暗緑色の釉がみられ、非常に薄手で肩部に耳がつき、四耳壺の可能性があるものが 22 点(図版17 w) みられる。注口も検出され急須の可能性もある。他に磁器片 16 点が検出され、内薄手の磁器片が 4 点で、この内 3 点は染付であり、さらにその内の 2 点には焼成後に火を受けた様子がみられ、銅成分の付着がみられる。陶器片 4 点が検出され、内 1 点は乳白色の釉がみられ、鉄釉による草文がみられることから唐津である可能性が高い(図版17 x)。もう 1 点は九曜紋が型押しされたものである。L 2 からは L 1 出土の四耳壺と同一個体であるものが 4 点、L

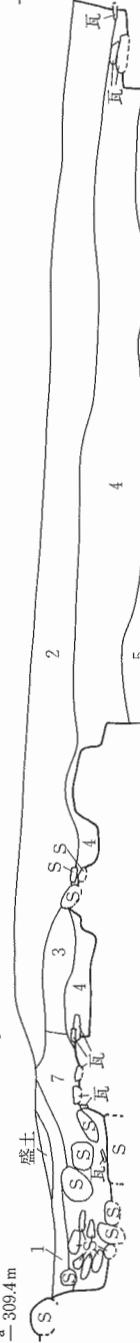


第8図 SB03実測図(1)

[サブトレーンチ a セクション]

$\frac{a}{309.4m}$  [サブトレーンチ a セクション]

第9図



[SB 03サブトレーンチ c セクション]

$\frac{c}{309.3m}$  [サブトレーンチ b セクション]

S B 03実測図(2)



[SB 03サブトレーンチ d セクション]

$\frac{d}{309.0m}$  [サブトレーンチ e セクション]

S B 03実測図(2)



[SB 03サブトレーンチ f セクション]

$\frac{f}{309.0m}$  [サブトレーンチ g セクション]

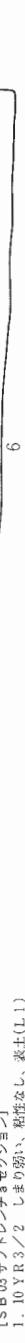
S B 03実測図(2)



[SB 03サブトレーンチ h セクション]

$\frac{g}{309.0m}$  [サブトレーンチ i セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ e セクション]

$\frac{e}{309.1m}$  [サブトレーンチ e セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ f セクション]

$\frac{f}{309.0m}$  [サブトレーンチ g セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ h セクション]

$\frac{h}{309.0m}$  [サブトレーンチ i セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ i セクション]

$\frac{i}{309.0m}$  [サブトレーンチ j セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ k セクション]

$\frac{k}{309.0m}$  [サブトレーンチ l セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ m セクション]

$\frac{m}{309.0m}$  [サブトレーンチ n セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ o セクション]

$\frac{o}{309.0m}$  [サブトレーンチ p セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ q セクション]

$\frac{q}{309.0m}$  [サブトレーンチ r セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ s セクション]

$\frac{s}{309.0m}$  [サブトレーンチ t セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ u セクション]

$\frac{u}{309.0m}$  [サブトレーンチ v セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ w セクション]

$\frac{w}{309.0m}$  [サブトレーンチ x セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ y セクション]

$\frac{y}{309.0m}$  [サブトレーンチ z セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ z セクション]

$\frac{z}{309.0m}$  [サブトレーンチ a セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ a セクション]

$\frac{a}{309.4m}$  [サブトレーンチ b セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ b セクション]

$\frac{b}{309.3m}$  [サブトレーンチ c セクション]

S B 03実測図(2)



[サブトレーンチ c セクション]

$\frac{c}{309.2m}$  [サブトレーンチ d セクション]

S B 03実測図(2)



1～L 2 からは陶器の小片 1 点、L 4 からは陶器片 1 点、土師質土器片 1 点、貼土層からは染付のみられる磁器片 1 点(図版17 u)が検出されている。

サブ a の 2 層からは染付がみられる口縁部の小片を含む磁器片 2 点、陶器片 2 点で陶器片の内 1 点はオリーブ色の釉がみられる瀬戸(図版17 a)で 2 ～瓦層出土のものと同一個体である。2 ～瓦層からは陶器の小碗 2 点が検出され、ほぼ完形である。いずれも同規模で形状も類似しているが、第17図 7 (原色図版 6 - 1)は内外面とも釉がなく、灰褐色の地肌に自然釉が若干みられる。一方第17図 8 (原色図版 6 - 2)は外面には薄く釉がみられるが、自然釉の可能性もある。さらに内面は融解した銅が付着しており、焼成後に再度熱を受けたものと推定され、表採されたものと接合した。オリーブ色の釉がみられる瀬戸の陶器片 3 点が出土し、S B 03-a 出土のものと接合した。円筒形の壺であるとみられる。瓦層からは陶器片 5 点(図版17 b・c)、内 2 点(図版17 c)は瀬戸で外面にオリーブ色の釉がみられる。土師質土器片 2 点、磁器片 1 点、磨滅の激しい瓦片 1 点が出土している。3 層からは染付がみられる磁器片 1 点が出土している。瓦片は全部で整理箱(60×44×15cm、以下同じ)に換算して12.5箱検出されている。内、軒丸瓦や軒平瓦は 2 箱を占める。

サブ b の L 1 からは器面にランダムな櫛目がみられる土器片 1 点(図版17 d)が出土した。2 層からは炻器片 1 点(図版17 e)、磁器片 3 点、土器片 3 点が出土し、土器片の内 1 点は L 1 出土のものと同様である。もう 1 点は格子目が刻まれているがいずれも小片で詳細は不明である。岸産のすり鉢片 1 点が検出されている。陶器片 2 点が検出され内 1 点は糠白釉と貫入が特徴的であり唐津(図版17 g)とみられる。もう 1 点はオリーブ色の釉がみられる瀬戸の陶器片(図版17 f)でサブ a の 2 ～瓦層出土のものと同様である。濁った暗緑色の釉がみられる磁器片 3 点(図版17 h)が検出され非常に薄手の蓋であり、S B 03 L 1 出土のものと同一個体である。瓦片は整理箱で13箱が検出された。

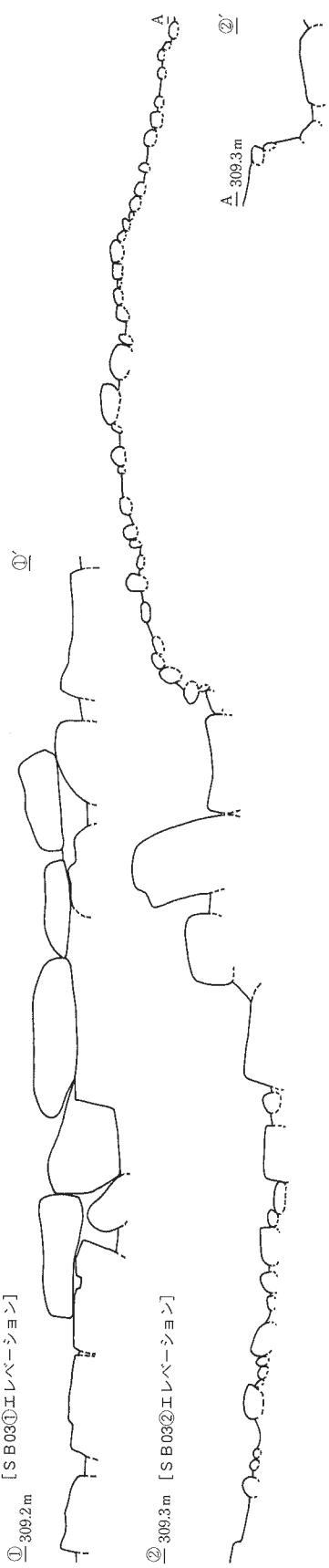
サブ c の 2 層からは軒丸瓦片 1 点、磁器片 3 点、土師質土器片 1 点が検出され、磁器片の内 2 点は染付、残り 1 点は濁った暗緑色の釉がみられるものであり、S B 03 L 1 出土のものと同一個体である。瓦層からは土師質土器片 4 点がみられるが小片かつ磨滅していて詳細は不明である。器形にゆがみがある陶器片 1 点が検出されている。瓦片は全部で整理箱12.5箱に換算され、軒丸瓦・軒平瓦は2.5箱を占める。

サブ d の L 1 からは染付がみられる底部片が 1 点、平瓦片 10 点、丸瓦片 1 点、L 1 ～ 2 層からは軒丸瓦片 1 点、軒平瓦片 2 点、平瓦片 20 点、丸瓦片 5 点、陶器片 2 点、磁器片 1 点、2 層からは平瓦片 1 点、磁器片 1 点、土師質土器片 1 点がみられた。

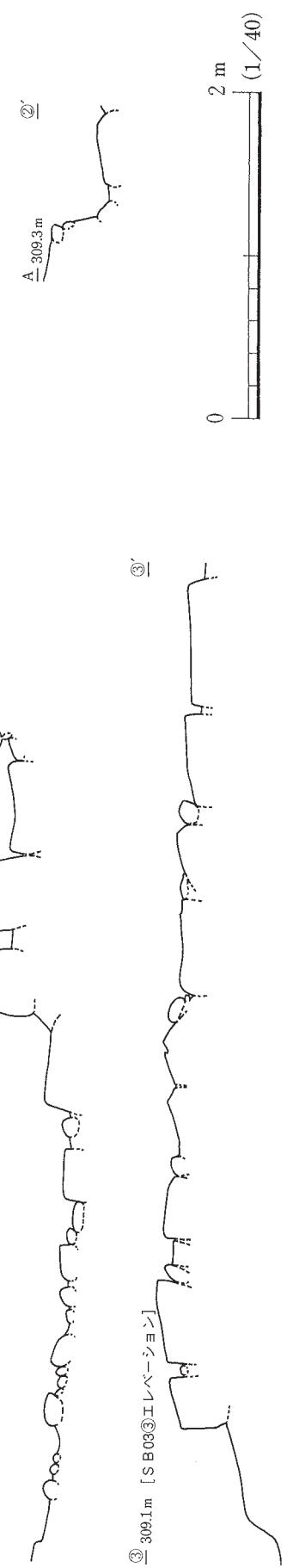
サブ e の L 1 からは磨滅した土師質土器片 1 点、平瓦片 5 点、丸瓦片 3 点、L 2 からは陶器片 1 点、平瓦片 3 点、黒色土層からは平瓦片 3 点、丸瓦片 2 点、陶器片 2 点で、内 1 点はオリーブ色の釉がみられる小碗の底部である。L 4 からは平瓦片 10 点、丸瓦片 2 点、軒平瓦片 1 点、素焼きの土器片で甕の口縁部が 1 点、ガラス片 1 点が検出されている。

サブ f の L 1 からは薄手で、無釉の陶器片 5 点(図版17 i・j)が出土し、内 1 点は内面に融解した鉄分あるいは銅が付着しており、焼成後に再度熱を受けていることが明らかである。

① 309.2m [SB03①エレベーション]



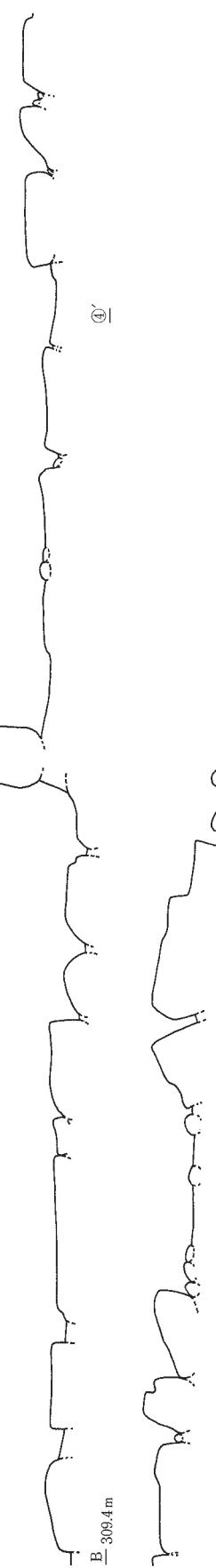
② 309.3m [SB03②エレベーション]



③ 309.1m [SB03③エレベーション]

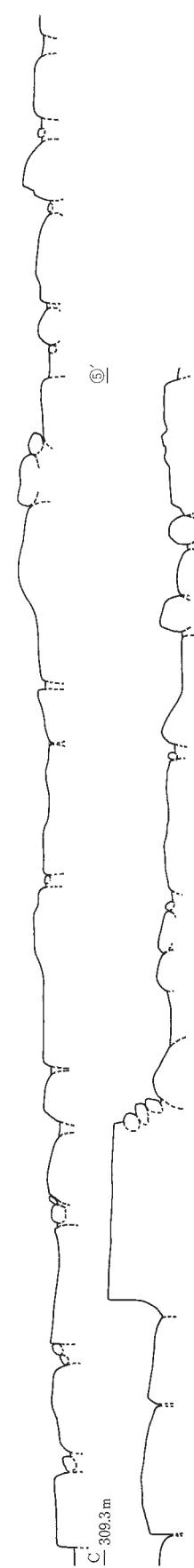


④ 309.4m [SB03④エレベーション]



B  
309.4m

⑤ 309.3m [SB03⑤エレベーション]



C  
309.3m

第10図

SB03実測図(3)

サブ g からは平瓦片 7 点、口唇のみ茶色を呈する白色の磁器碗 1 点(図版17 k )、L 1 からは土師質土器片 1 点(図版17 ℓ )、発色は悪いが岸産と判断されるすり鉢片 3 点(図版17 m )、瓦片が整理箱 1 箱検出されている。瓦層からは瓦片が整理箱で1.5 箱、素焼の火鉢の口縁部片 2 点がみられた。その他、サブ g 付近からは、破碎された瓦片が整理箱で2.5 箱検出されている。

S B03-a の礫 1 層からは陶器片 3 点、磁器片 3 点で、陶器はいずれも岸産(図版17 p )とみられる。ほかに平瓦18点、丸瓦片 1 点がみられた。礫 2 層からは平瓦片 1 点、丸瓦片 1 点、岸産の焼き締められた陶器片 6 点(図版17 q · r )、白濁した釉が施された相馬産の碗 1 点、礫 3 層からは平瓦片 4 点、丸瓦片 1 点、軒平瓦片 1 点が検出されている。

S B03-b の礫 1 層からは陶器片 1 点、平瓦片31点、丸瓦片 3 点がみられた。礫 2 層から平瓦片13点、丸瓦片 3 点が検出されている。

S B03-c の礫 1 層からは土師質土器片 4 点で、内 2 点は厚手の甕片、もう 2 点は外面に刻目のみられる土器片である。他に陶器片 1 点、磁器片 1 点、平瓦片 5 点、軒丸瓦片 1 点がみられ、礫 3 層からは陶器碗の口縁部 1 点、土師質土器片 1 点がみられた。他に S B03-c 周辺からは、整理箱 2 箱に換算される瓦片が出土している。

S B03 内トレンチ礫 1 層からは丸瓦片 3 点、平瓦片 5 点、S B03-b L 1 出土のものと同一個体である磁器片 2 点がみられた。他に薄手の磁器片 1 点、陶器片 2 点が検出されている。礫 2 層からも S B03 L 1 出土のものと同一個体とみられる磁器片 4 点がみられ、他に磁器片 3 点がみられる。礫 3 層からも S B03-b L 1 出土のものと同一個体とみられる磁器片 1 点、他に染付のみられる磁器片 2 点がみられる。

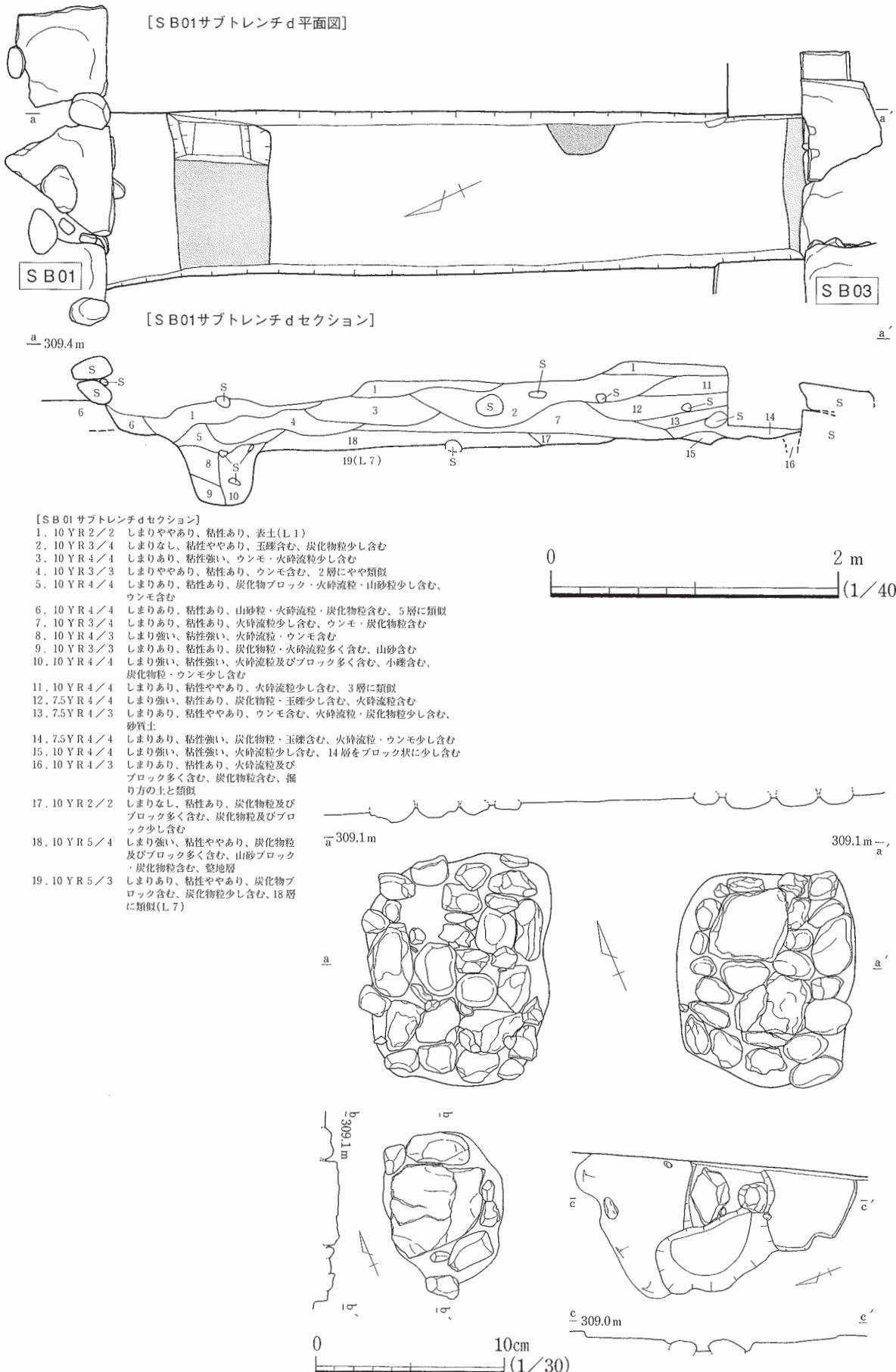
S B03 の階段部 L 1 ~ L 2 からは S B03 L 1 出土のものと同一個体とみられる暗緑色の釉がみられる磁器片 6 点が出土し、他に陶器片 4 点(図版17 u )、磁器片 7 点、土師質土器片 8 点、丸瓦片 1 点、平瓦片 4 点、砥石片 1 点(図版17 o )が検出された。L 4 (整地層)上からは土師質土器片 2 点、陶器片12点、磁器片 1 点、黒色土層からは土師質土器片15点、硯片 1 点、S B03 L 1 出土のものと同一個体で暗緑色の釉がみられ四耳壺状の磁器片 2 点、他に磁器片 2 点、瓦片 4 点確認されている。

鉄製品としては釘や不明鉄製品が180点以上出土しており(詳細は別表を参照)、さらに銅製品が 2 点、古銭が 2 点、碁石が 4 点検出されている。

このように大量に出土する釘の用途であるが、屋根葺きの際にも用いたほか、壁面構造として釘を多量に使用するものであった可能性がある。すなわち土壁ではなく、板壁の可能性が考えられよう。このことはいずれのサブトレンチにおいても壁材とみられる堆積土が確認されていないことからも推察されよう。

## (2) 硏石跡

礎石跡 1 号建物跡の北側約4.5m に 1 基(3 号)、そこからさらに4.2m 北方に 1 基(1 号)、この東側80cm に並んでもう 1 基(2 号)検出されている。1 · 2 号礎石跡は約 1 × 0.8m の隅丸長方形に直径約25cm の礫を敷き詰めた状態で検出されている。表土より約10cm で検出されたため、根固石のみが残存した状態と判断され、礎石跡とした。両者の中心間の距離は約1.5~1.8



第11図 SB01サブトレーンチd実測図及び1区基礎石1～4実測図

mを測る。3号礎石跡は直径約80×60cmの楕円形の掘り方に、1辺45cmの扁平な石を中心に据え周囲に礫を充填している。この東側1mには掘り方とみられる土坑が1基検出されている。1・2号礎石跡とは規模が異なるが、周辺に礎石跡や、掘り方等が検出されないことから、これら4基が組み合うものとみられ、門跡の可能性が指摘されている。

出土遺物はないため明確な時期は特定できないが、L3上面で確認されていることから前述した建物群とは同時期かこれよりも新しい時期の可能性が高い。

なお、この礎石群より北側の部分についてはピット1基と焼土跡1基が検出されているが、いずれも近代以降のものとみられ、江戸期以前の遺構は検出されていない。

### (3) 4Tの遺構と遺物

1区の南部、3号建物跡の南西部に設定した東西に長いトレンチである。2区との通路部分にあたることから、何らかの通路施設が期待されたが、とくに遺構は検出されなかった。1区と2区の間の最も標高が低い部分にあたり沢状地形を呈するため、平場の水分が全て集中する部分であることが判明した。当時の生活面は現況より約40cm以上低かったものと判断され、排水を兼ねた通路であったものと思われる。

出土遺物は表土より陶器片2点、染付のみられる磁器片2点、L1～L2より陶器片7点、磁器片6点、土師質土器片2点、L1より瓦片18点、陶器片2点、磁器片2点、土師質土器片2点、L2より磁器片6点(図版16u)、土師質土器片1点、旧生活面上からは土師質土器の坏片2点(図版16w)、磁器片2点、内1点は染付の碗(図版16v)である。他に瓦片が整理箱1箱検出されている。

### (4) 5Tの遺構と遺物

1区の南東端部に設定した北東から南西に長いトレンチである。ここではL1及びL2の堆積のみがみられ遺構面に達する。堆積土は畝によるカクランがみられた。石列遺構が1条確認されており、1段ないし2段につまれ、長さ約6m、北東から南西に延び、花崗岩の切石及び安山岩の自然石を用いて石面を南東に揃えて並べてある。安山岩の自然石を用いた部分では板状の石を石の前面に据え、平坦な石面を作り出していることがわかる。石尻には直径15cm程度の玉石が充填されている。周辺を確認することができなかつたため、この石列の用途等は明確ではないが現在のところ通路施設として考えている。しかしながら、石列の延びる南西側は既に崩落しているとはいえ急峻な谷であり、通路であったとすればどのようなルートであったものか考慮すべきところである。

出土遺物は磁器片2点が表採され、L1から陶器片2点、磁器片1点、土師質土器片1点、砥石状不明石製品1点、平瓦片12点、L2からは織部の皿とみられる陶器片2点(図版16x)、磁器片4点、平瓦片72点、丸瓦片3点、軒平瓦片1点、土師質土器小片2点、炻器の甕の胴部片1点(図版16y)が検出されている。石列のそばからは平瓦片2点、磁器片1点、土師質土器片1点、すり鉢片1点がみられた。またこの付近は瓦片が多数表採され、整理箱で4箱に換算される。

## 第2節 2区の遺構と遺物

日影の井戸から傾斜する平場の南端部と、そこから2m～1.5mほどの比高差で2段ほど落ちて達する平坦面及びその段差に生じた斜面を調査対象地区とした。全体の比高差は約6.4mを測る。なおこの平坦面の東部には、約1mおちて通路が存在している。いずれも南面した斜面である。

石積遺構が検出されているので、遺構及びトレンチごとに詳述する。

### (1) 石積1(8～10T)

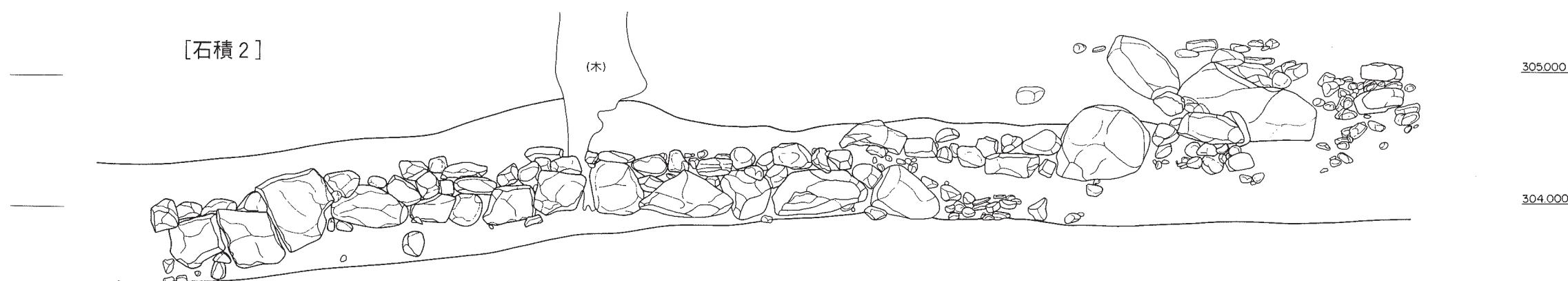
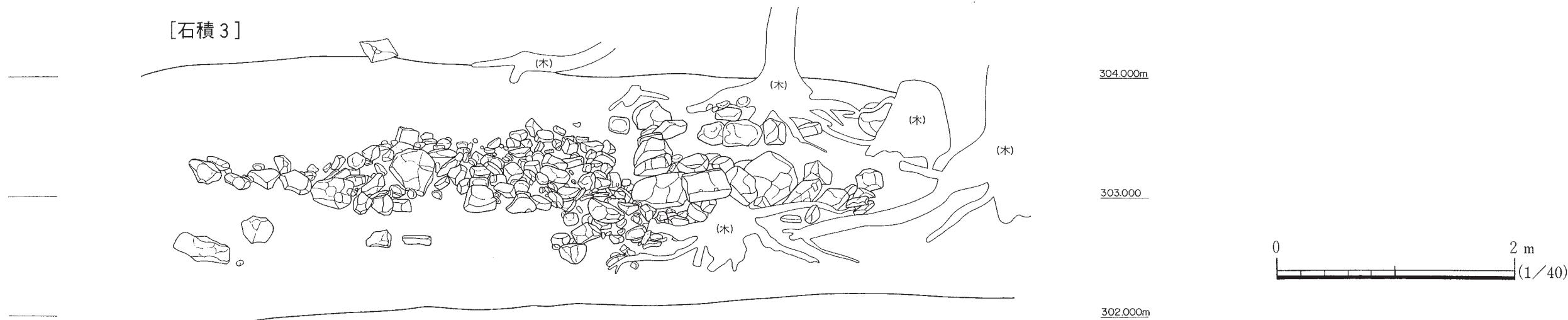
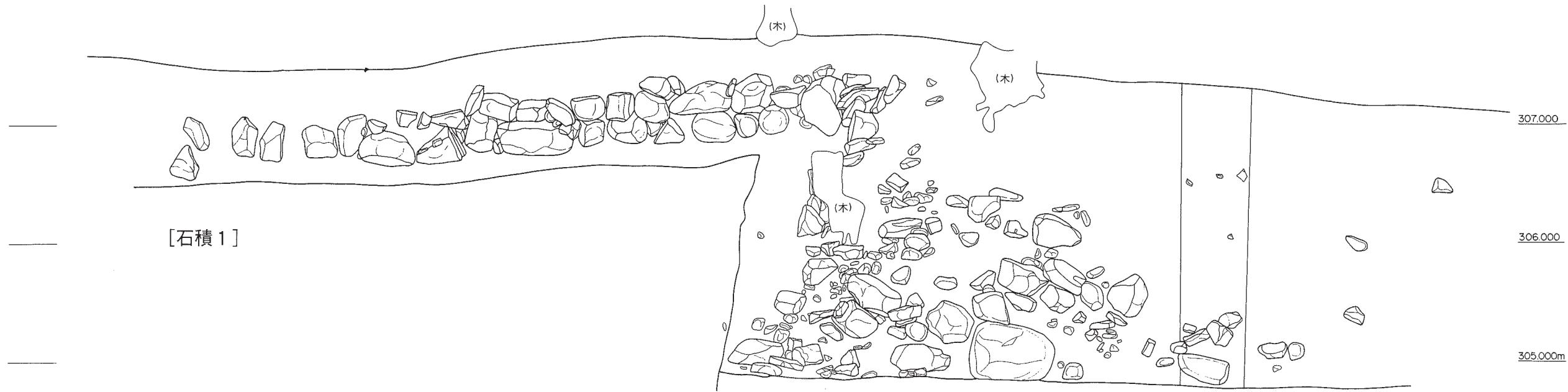
石積1は7トレンチを設定した平場から最初に傾斜する比高差約2mの斜面に検出された石積である。今回検出された石積遺構の中では最高所に位置する。長さ約30mある斜面の西方に位置し、約6m東へ延びて入角部をもち、約3m南側へ延びた後、東へ折れて出角部を形成し、1.5mほど東へ延びる。入角から出角にかけては崩壊しているが、西側6mの区間は残りがよく、斜面の上部に2段・高さ約50cmで積まれていることがわかる。積石のうち大きいものは石面が約60×20cmを測り、これを横長に用いて積んでいるが、天端部分は小型の石を用いており、全体的に方形に近い積石が多い。西端には矢穴をもつ石が用いられている。この斜面には石積はこれのみであるが、東方には崩落したとみられる石が露出している部分がみられた。

出土遺物は表土から陶器20点(図版19b)、磁器片18点で内10点は染付がみられる。すり鉢片4点、土師質土器片2点、ガラス片2点がみられた。崩落土からは陶器片8点、磁器片5点(内3点が染付)、すり鉢片2点、土師質土器片2点、下層からは土師質土器片2点で、これは外面に型押し文がみられるもの(図版19c)と大型の甕の胴部片がある。すり鉢片1点(図版19f)、底部穿孔がみられる陶器片1点(図版19g)がみられ、これは外面に施釉されるが器形から植木鉢の可能性がある。陶器片5点が検出され、相馬の碗1点(図版19d)が含まれ、磁器片3点は全て染付がみられる。内1点は蛸唐草のみられる注口部(図版19e)である。

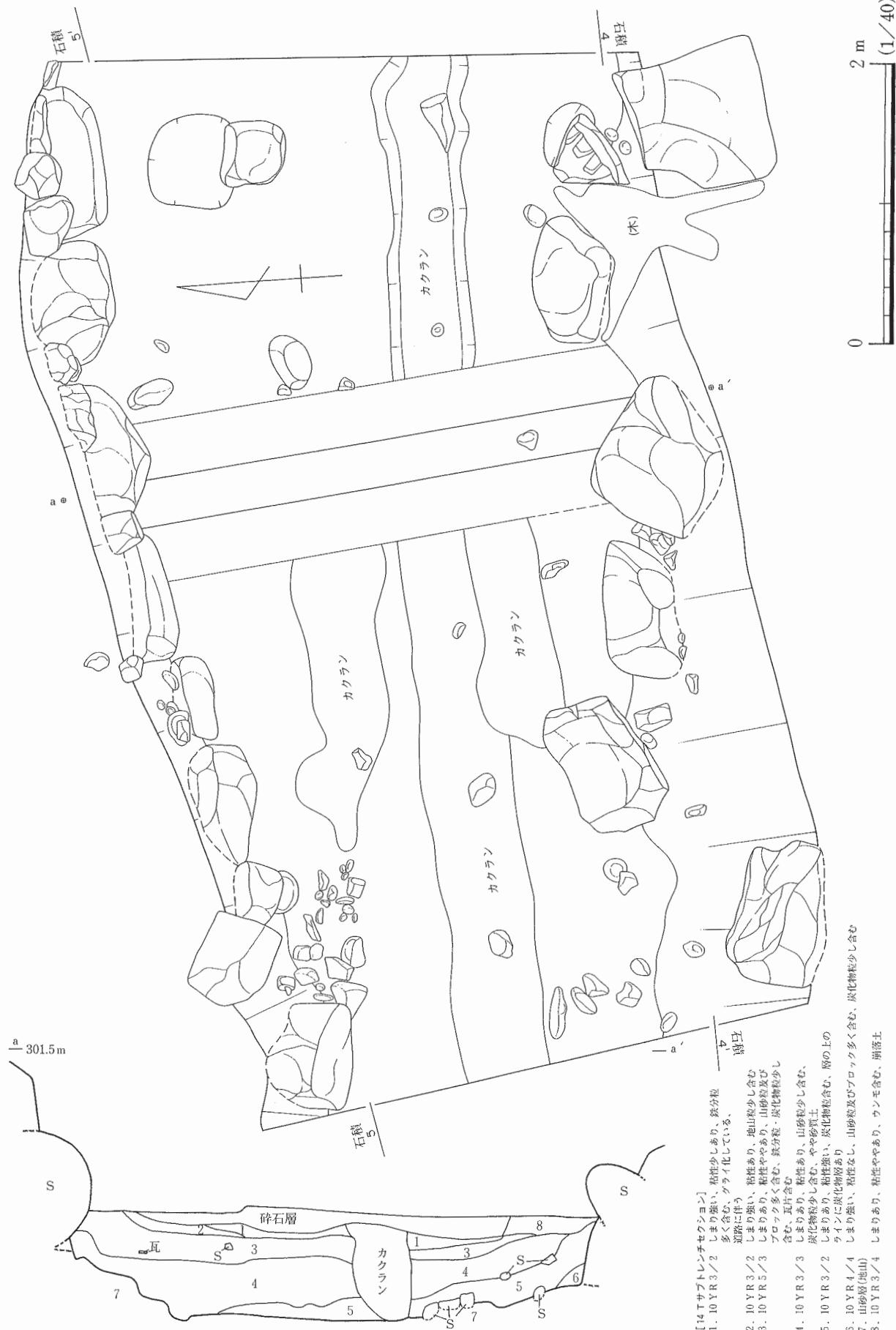
### (2) 石積2・3(サブトレンチa)

石積2は石積1の斜面よりさらにもう一段下の比高差約1.5mの斜面に検出された石積である。石積1のある斜面と石積2が検出された斜面との間は南へ傾斜する狭い犬走りがあり、遺構は検出されていない。この2段目の斜面は長さ約36mを測り、石積2はその最も東側に位置している。約8.5mにわたり1段～3段・高さ約50cmに積まれて、今回検出された石積の中で最も残りがよい。石面が約40×50cmの方形に近い積石を横長に用い、約20×10cmの小型の石を多用している。天端へいくほど小型化する傾向がみられる。この石積の前面も緩やかに南へ傾斜しているが、遺構は検出されていない。この石積2と同じ斜面の西方には約8.8mにわたって散乱した石(石積3)が確認されている。石積が崩落した状態とみられ段数及び高さは不明であり、約40×20cmほどの石が数石みられるが、直径約10～20cmの玉石や荒割の礫がみられ、前述の2つの石積(石積1・2)とは様相が異なる。ただし天端石とみられる約20×10cm程度の石も観察されることから崩落した石積と判断した。石積2・3はいずれも斜面上部に営まれたものである。これらの間には約4mにわたって直径20cm程度の礫が斜面基部に集中して検出されている。積んでいる様子はないが人為的である。

出土遺物は多く、図化できたものが多い。石積2下層からは片口がみられるすり鉢片1点(第18図1、原色図版7-6b)が検出された。本郷産であり18世紀後半に属する。第19図2(原色図版7-6a)も口唇部にのみ釉が施されたすり鉢片で、幕末あるいは明治に属する本郷である。もう1点はすり鉢の底部片(第19図1、原色図版7-5)で、18世紀頃の本郷である。碗1点(第18図8、原色図版7-7)は全体に白濁色の釉が施された相馬産である。18世紀中葉から後葉に属する。初期伊万里の碗(第18図2、原色図版7-8a)は17世紀前半に属する。原色図版8-2は緑色の半透明の釉が全体に施され、口縁部直下には焼成前の器面を掘り込んだ文様が一周する鉢で瀬戸産とみられる。石積3の表土からは陶器片1点(第18図3、原色図版7-1)が検出され、円筒形に立ち上がる器形であり底面に脚がつく。赤褐色の胎土に内外面とも黄白濁した釉がみられ、外面は底部際まで施釉される。他に器形等は不明であるが瀬戸とみられる陶器片1点(図版20a)がある。また口唇が波状を呈し花瓶あるいは香炉とみられる青磁が1点出土している。さらに陶器の底部片1点がみられ、器形は不明であるが外面には煤が付着し、焼成の際の粘土粒が残る。さらに薄手かつ小片であるが飴釉がみられ、焼成前に生地を刻んで籠目状の文様を描いた陶器片が1点検出され、サブトレント2層出土のものと類似している。石積3のL1からは陶器の小碗(第18図5、原色図版7-3)が出土し、これは口径に比較して底径が小さく、全体に灰白色の釉がみられる。第18図4(原色図版7-4)は灰緑色の釉が全体にかけられた陶器の碗で、外面は釉が流れたことによる文様がみられ、全体に貫入がみられる。18世紀中葉～後葉の相馬産である。第18図6(原色図版7-2)は畳みつき以外は全てオリーブ色の釉がかけられ、細かい貫入がみられる陶器の碗である。瀬戸産とみられる。もう1点は小型の碗であり、同様にオリーブ色の釉がみられるが、高台上までしか施されていない。やはり瀬戸である。すり鉢の口縁部片1点(第19図4、図版20k)は本郷とみられ、17世紀に遡る可能性がある。下層からは本郷産のすり鉢片1点(第19図3、原色図版8-1)が検出されており、小型で口縁部に飴釉がみられる。幕末～明治初頭のものである。相馬産の碗1点(第18図10、原色図版8-4a)は細かい貫入がみられる。第18図7(原色図版8-3)は伊万里産の碗である。第18図12(原色図版8-4b)は陶器の皿で外面には煤が付着し、焼成の際の粘土粒が残る。第18図11(原色図版8-5)は陶器の碗で器形がゆがんでいるが、全体に白濁した釉がかけられ口縁部の一部に緑色釉が流しがけされる。内面底には駒が描かれ、相馬焼であることがわかる。原色図版7-8bは初期伊万里の皿で17世紀前半とみられる。原色図版8-4cは陶器の皿で松の図柄が読み取れる。本郷産の碗の底部片1点(第18図15、原色図版8-8b)が検出され、幕末期に属し、高台にまで呉須で文様が描かれた丁寧なつくりのものである。第18図13(原色図版8-8a)は本郷系の甕の底部で底面内部がひとまわり小さく抉られ、高台状に成形されている。図版21bは大型の甕の胴部片である。サブトレント2層内からは飴釉の施された陶器の口縁部片が検出され、18世紀後半から19世紀前半の本郷焼(図版21h)である。また陶器片が2点(図版21f)が検出され、薄手かつ小片であるが飴釉が施され、焼成前に生地を刻んで籠目状の文様を描いている。岸産とみられる陶器片1点(図版21e)は薄手で、円筒形の壺あるいは花器の口頸部から肩にかけての部分とみられる。また、伊万里産の磁器片7点



第12図 石積 1～3 立面図



第13図 14T 実測図

(原色図版8-9)、瀬戸産の陶器片1点(図版21j)、相馬産の碗の小片1点がみられた。図版21gは内外面とも白色で文様はみられず白磁を模した本郷の皿である。1810~20年に属する。サブトレーンチ表土~2層からはすり鉢2点が検出され、第20図1(原色図版8-6b)は本郷とみられ、17世紀に遡る可能性がある。もう1点(第20図2、原色図版8-6a)は18世紀頃の本郷である。また第18図14(原色図版8-7a)は陶器の小碗で、高台はなく、内外面全体が焼き締められ錆色を呈し、非常に小型である。灯明皿で幕末期の本郷焼とみられ、13TL1出土のものと接合する。

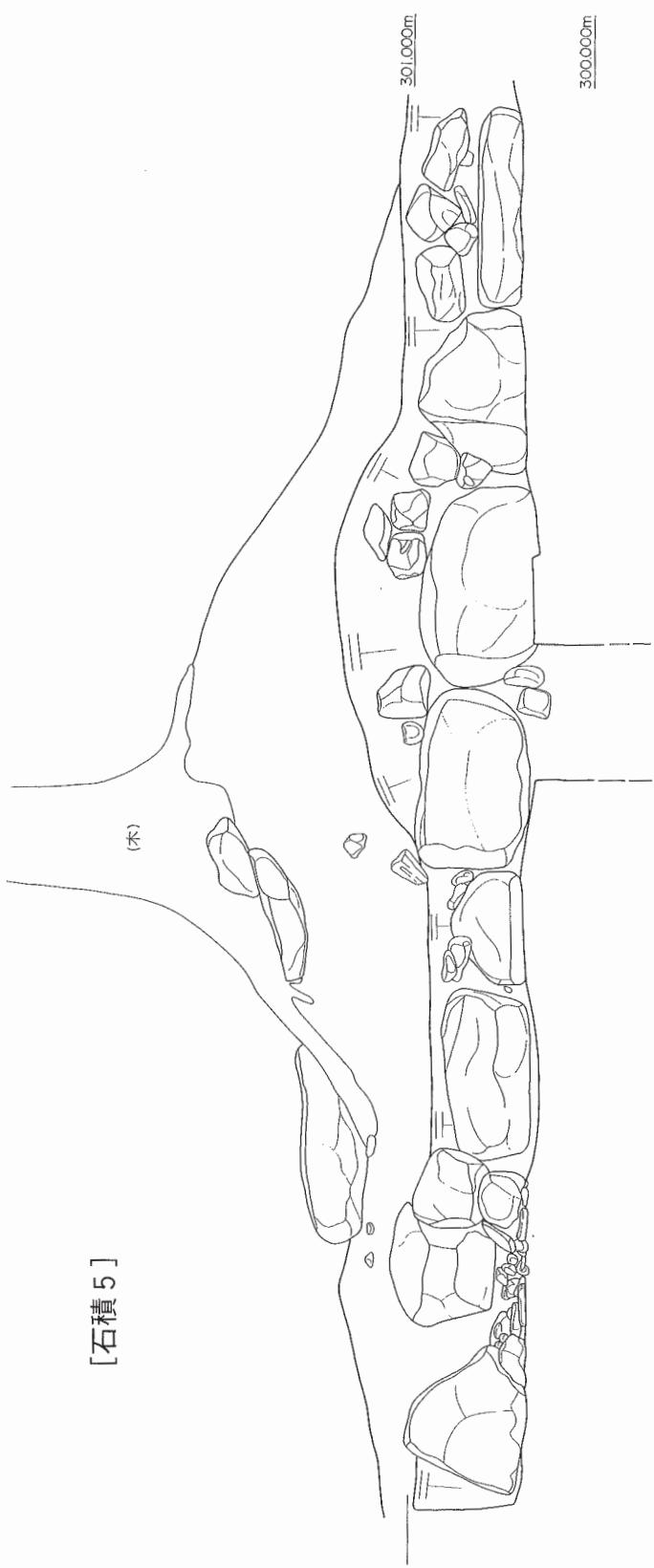
その他図示できないものに石積2・3の石面近くより陶器片39点(図版20b・d・f・j・p・q、21a)、磁器片34点(図版20e)、すり鉢片4点(図版20c)、瓦片1点、素焼きの甕の胴部片5点、崩落土より染付のみられる磁器碗片3点(図版20g)、陶器片1点(図版20i)、すり鉢の口縁部片1点(図版20h)が検出されている。表土からは染付6点を含む磁器片14点、本郷1点を含む陶器片7点、土師質土器片2点、すり鉢の口縁部片1点、平瓦片4点、その他ガラスが検出されている。L1からは瀬戸産の碗とみられる陶器片8点(図版20m)、磁器片4点がみられ、磁器片のうち2点は染付、内1点は白磁、内1点は伊万里系の角皿であり、13TL1出土のものと同文様である。他に土師質土器片5点が検出された。

### (3) 石積4・5(14T)

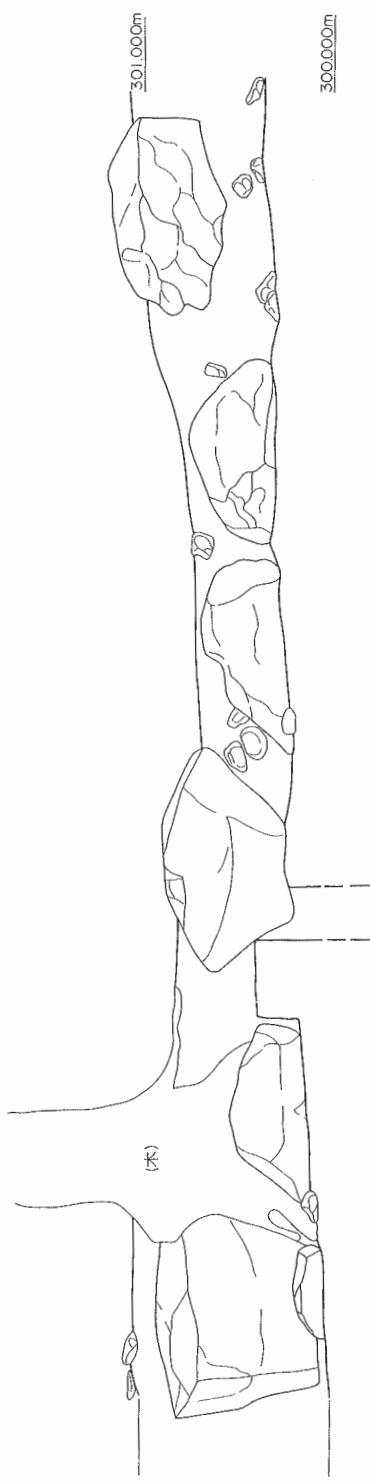
石積5は石積2の前面の南に傾斜する平場が一段落ちて通路となる、比高差約1m、長さ約20mの南面した小規模な斜面に検出された石積で、約7mにわたって検出されている。通路を挟んで南側にも北面して石積が築かれている(石積4)。両者とも積石は直径約1mの花崗岩の自然石を用い、花崗岩風化層(地山)を平坦に削平して据えていることが確認された。1石あるいは、2石で高さ約1mを測り、石積1~3とは石材の規模・形状ともに全く様相が異なる。この2つの石積の間は、地山が皿状に掘削されており、そこに盛土をして通路面を整地していることが確認された。したがって、地山を掘削しただけの通路の時期と盛土整地後の通路の時期と2時期の変遷が明らかとなった。石積4・5は盛土整地後の時期に伴うことが確認されている。

出土遺物は図示したものとして表土下より陶器の皿(第21図1、原色図版6-6a)1点がみられ、灰色の釉がかけられ鉄絵による草文が描かれる。本郷とみられる。高台内に墨書がみられ「エス□」と読める。石面近くからはかわらけ1点(第21図3、原色図版6-6b)が出土し回転糸切り痕がみられる。第21図6(原色図版4-3)は伊万里産とみられ、呉須で草花文が描かれ、蓋である可能性が高い。他に9点の磁器片(原色図版8-9)が出土し、いずれも伊万里である。皿、碗、猪口など様々な器形がみられ、初期伊万里とみられるものも1点ある。また白色を呈した伊万里の甕片3点がみられた。第21図4(原色図版6-6c)は相馬産の碗である。高台上まで灰青色の釉が厚く施されるが、内側は薄手に施されるため、ロクロ成形の痕跡である渦巻きが浮き上がり装飾的効果がうかがえる。第21図2(原色図版6-6e)は本郷産の皿で、器形としてはやや深めの皿である。呉須で文様が描かれ、初期伊万里に類似する。第20図3(原色図版6-6f)は18世紀頃の本郷産のすり鉢である。また波佐見焼(長崎)とみられる碗の

[石積 5]



[石積 4]



第14図 石積 4～5 立面図

胴部片1点(原色図版6-6d)がみられる。石積5の据え方内より厚手で染付のみられる磁器の碗1点(第21図5、原色図版6-5)が検出されている。図示できなかったものとして表土から染付11点(図版19h)を含む磁器片19点、陶器片28点(図版19i・j)、すり鉢片4点(図版19k)、平瓦片7点、丸瓦片1点(図版19l)、ガラスが検出されている。L1からは染付の碗とみられる磁器片11点(図版19m・n)がみられ内1点は表土出土のものと同文様である。陶器片10点(図版18q)は小片である。平瓦片4点、すり鉢片1点(図版18p)が検出されている。L2整地層からは平瓦片5点(図版18s)、磁器片1点、土師質土器片1点、すり鉢片1点、磁器片1点、陶器片2点(1点は本郷か)、硯1点(図版18r)が検出されている。下層からは陶器片3点、平瓦片3点が検出されている。カクランより平瓦片2点が出土している。

#### (4) 7T

当地区の最高所に設定した7トレンチにおいては、当地区を何層にも盛土して整地していることが観察された。したがって、前述した石積1は整地して拡張した平場の斜面に貼り付ける形で営まれていることが判明した。現地表面より1.35m落ちて検出された自然地形は湧水しており、この軟弱な地盤上への盛土を強化するために石積1は用いられた可能性が考えられる。なおこの部分での盛土整地層の厚さは125cmを測る。

出土遺物は図示したものに上層より出土した硯1点(第21図8、原色図版6-4)があるがこれは破損がひどく、やわらかい石材を用いていることがわかる。墨溜の部分には鉄分が付着しており詳細は明確ではない。かなり使い込んだ様子がうかがえる。L1からは陶器の小碗1点(第21図7、原色図版8-7b)が出土し、非常に小型で高台も後付ではなく一体的につくり出したものである。灯明皿とみられ、内面と外面の上半分にのみ飴釉がみられ、幕末期の本郷焼とみられる。

図示できなかったものとしては磁器片1点が表採されている。上層からは染付3点を含む磁器片11点、陶器片31点、土師質土器片19点、瓦片5点、すり鉢片2点、炻器片1点(図版18a)がありいずれも非常に小片かつ磨滅している。ガラス片もみられた。L1からは陶器片20点、磁器片11点、土師質土器片9点、瓦片4点(図版18b)、すり鉢片1点がみられ、いずれも非常に小片で磨滅が激しい。L2からは小片であるが瀬戸産の陶器片(図版18c)が1点みられた。ほかに土師質土器片27点、染付14点を含む磁器片32点、陶器片39点(図版18d)、すり鉢片3点、ガラスなどがみられ、いずれも非常に小片かつ磨滅している。L3(整地層)からは磁器片4点、陶器片3点、土師質土器片24点がみられ小片かつ磨滅している。旧地形上からは土師質土器片6点(図版18e)が出土し、いずれも小片かつ磨滅が激しい。整地層から土師質土器が多く出土することが特徴的である。

#### (5) 12T

2区の中央、石積2・3の基盤となる平場の中央部に設定した3×6mの南北に長いトレンチである。現況で窪みがあったため井戸跡の可能性を考慮して設定した。調査の結果、現況の窪みは後世のカクランであることが判明した。堆積土は2層で旧生活面までは15cmほどである。現況で1mほどの比高差をもって傾斜するが、旧生活面においても同様の傾斜であったことが

判明した。遺構は検出されていない。出土遺物は染付のみられる碗1点(図版18 f)が表採され、カクランより瓦片1点、磁器片1点、L1より瓦片1点、土師質土器片5点、すり鉢片2点、陶器片23点(図版18 g)、磁器片22点が検出され、磁器の内染付が7点で染付の内1点は伊万里系の角皿(原色図版6-3 a)である。2層からは陶器片30点(図版18 h)、土師質土器片3点(図版18 i)、すり鉢片2点、磁器片6点がみられ、内4点が染付で、染付の内1点は伊万里系の角皿(原色図版6-3 d)である。3層からは磁器片3点、陶器片4点(図版18 j)、炻器片1点が検出されている。

#### (6) 13T

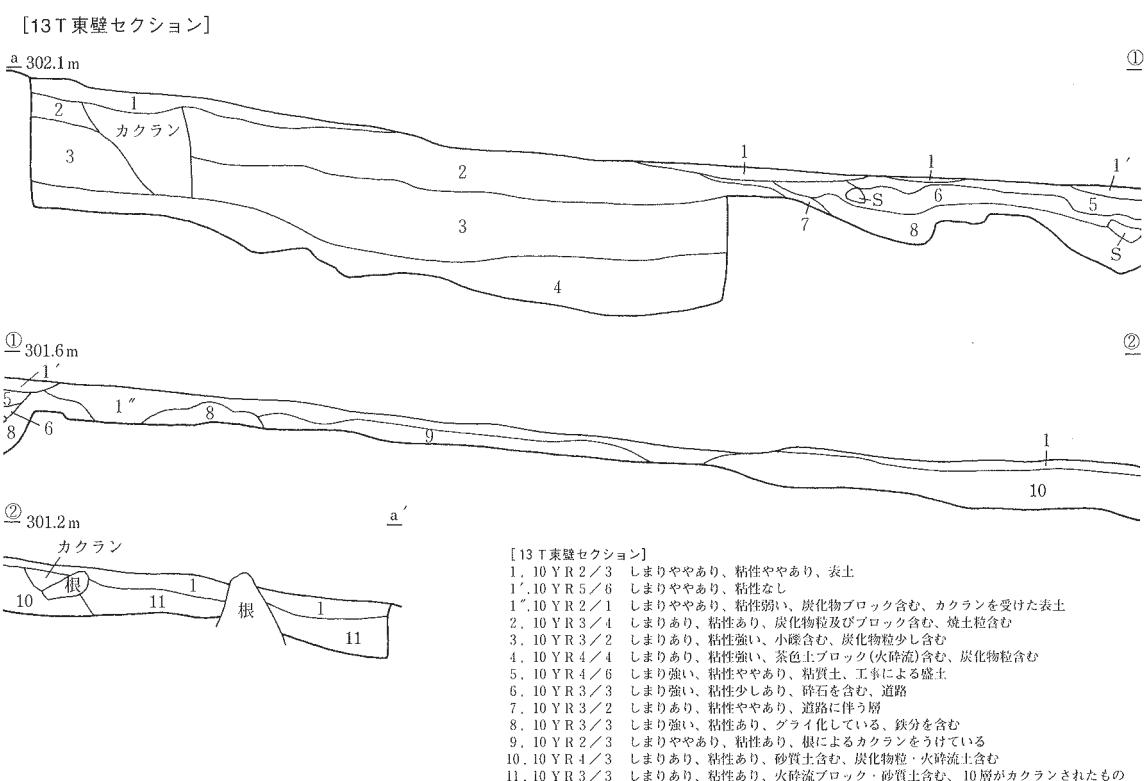
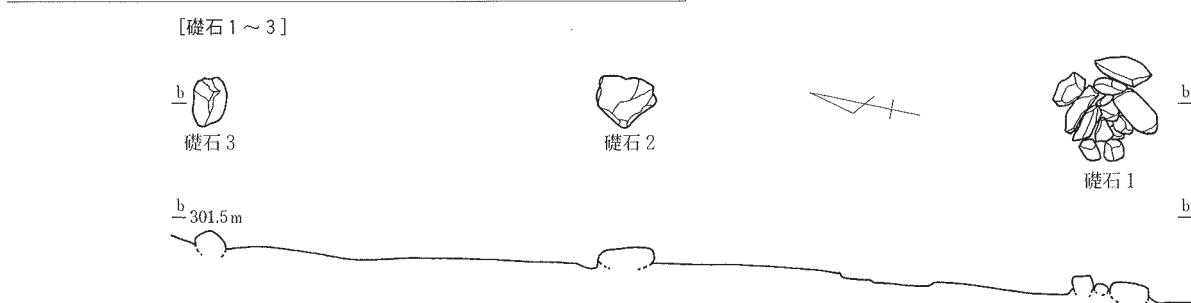
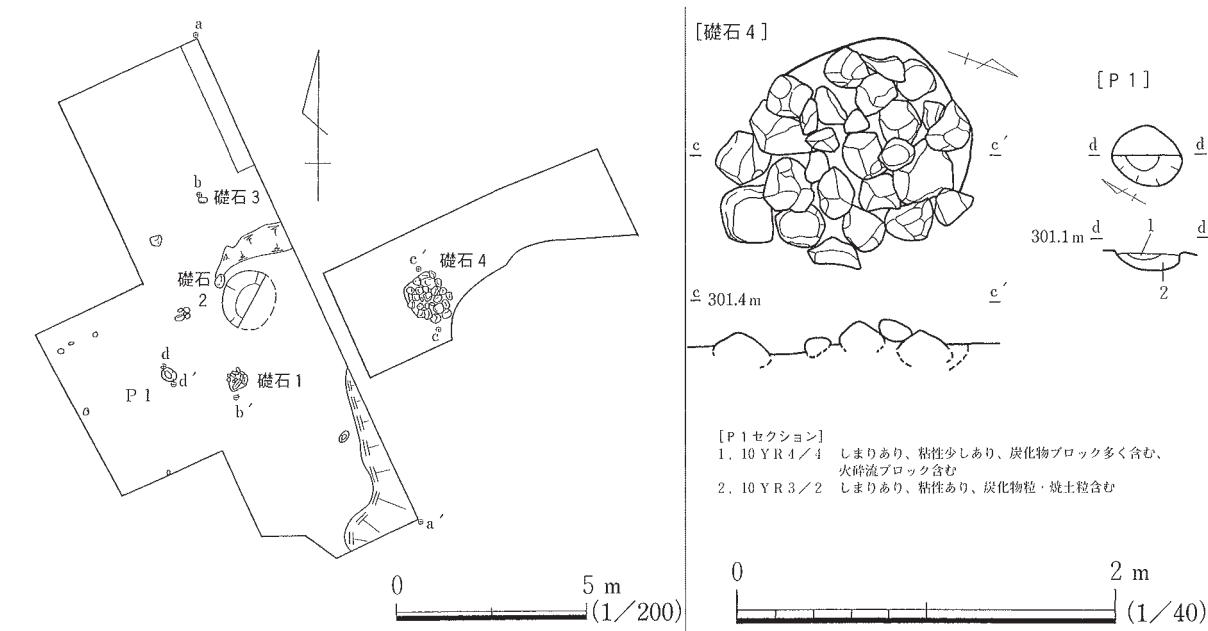
石積3の前面に広がる平場に設定した4×14mの南北に長いトレンチである。礎石跡が4基検出されている。検出面まではわずか5~10cmであるため、そのほかの礎石は破壊された可能性が高い。検出された礎石列はほぼ南北に3基(礎石1~3)が並び、柱間は南より2.7m、2.1mを測るがそれ以上の延長及び対応する礎石は検出できなかった。礎石は直径30cm程度の平坦な石を1石、あるいは長径20cm程度の石を数石敷き並べて約50cm四方の礎石とするものとがみられた。前者は束石、後者は根固石の可能性がある。したがって、侍屋敷等が存在したと考えられるが、その規模等については不明である。また、礎石4は様相が異なり、長径1.4mの楕円形状に直径約30cmの石を敷き並べて礎石としたものである。その規模から他の礎石跡とは区別される。おそらくは当平場南部の切岸を抉るように形成された沢状部分の上端部に位置することから、この沢状部分が通路であった可能性が考えられ、礎石4はこの通路に対する門跡の根固石である可能性が示唆されよう。

出土遺物は磁器片2点、陶器片1点が表採されている。L1からは伊万里系とみられる角皿(原色図版6-3 b)1点がみられ、先付鉢と思われる。他に染付8点を含む磁器片22点、陶器片29点(図版18 k~n)、すり鉢片4点、土師質土器片5点、炻器片1点、ガラスなどがみられた。2層からは染付22点を含む磁器片44点(図版18 o)、うち1点は初期伊万里とみられる。陶器片99点、内2点は本郷、1点は相馬産の碗の底部片が出土している。すり鉢片4点、土師質土器片27点、炻器片3点、丸瓦片1点、平瓦片1点がみられ非常に小片で磨滅が激しい。カクランからはすり鉢片1点、陶器片24点、磁器片7点、土師質土器片2点が出土し、いずれも小片かつ磨滅している。

### 第3節 出土遺物

出土遺物は1区では瓦と鉄製品(主に釘)が多量に出土し、2区では陶磁器類が多く出土していることが大きな特徴である。したがって、2区が日常生活の平場と判断でき、逆に1区の建造物跡は日常的ではない用途、すなわち蔵であることを裏付けよう。

出土量が膨大であるため、陶磁器類については各遺構ごとに概略を記したが、瓦については整理箱での換算数を示し、概略的な分類を示す。また、代表的な各分類の瓦については第23~25図に示した。鉄製品、銅製品、古銭、碁石については一覧表でその詳述に代える。



第15図 13T 実測図

## (1) 瓦

瓦はそれぞれの調査区から検出され、その分量は実に整理箱80箱以上を数える。特に、SB01及びSB03周辺から最も多く検出され、SB03東側に延長したサブトレーンチa～cからは大量の瓦片が集中して検出された。したがって、最も出土量の多いサブトレーンチbの瓦を分類することで、1区出土瓦の全体の様相を把握することとする。サブトレーンチb出土の瓦を例に瓦の分類を以下に示す。

- 平瓦Ⅰ群1類　　表面が灰色を呈し、断面がやや白色を呈するもの。比較的硬質で胎土も均一なものが多い。黒ウンモが混じる。最も出土量が多い。凹面は平滑でよく磨かれ調整されている。凸面はやや粗雑でヘラケズリの痕跡が少し残るものもある。なお、厚さが違うものが3種みられ、さらに凹面の調整の方法では、  
a. 角が面取りされているもの b. 角が面取りされていないものとに分類されるが、前者は数量が少ない。厚みと調整方法には相関関係はみられなかつたため、大量生産する中での工人の違いによるものと判断され、特に分類をしなかった。また、断面が灰色の強い一群がみられ、硬質で、胎土には白色土がマーブル状に練りこまれた状態が観察された。胎土の色からは丸瓦Ⅲ群bに分類できる可能性がある。
- 平瓦Ⅱ群1類　　外面が黒色を呈し、断面がやや白色を呈するもの。黒色は還元によるものとみられる。Ⅰ群と違い軟質で、砂質土を多く含む。ウンモが多く含まれることも特徴である。凹面は平滑でよく調整されてはいるが、ヘラケズリの痕跡がやや残る。Ⅰ群1類ほどではないが厚みの違うものが少なくとも2種類確認されており、厚さ約2cmの厚手のものが数量的には多数を占めている。平瓦分類においてはⅠ群1類に次いで数量が多い。
- 平瓦Ⅱ群2類　　Ⅱ群1類と同様に外面は黒色を呈し、軟質で砂質土を多く含むが、断面が赤褐色を呈することから分類した。かなり小片が多い。厚みは大別して2種類観察され、薄手のものが多い。
- 平瓦Ⅲ群　　内外面とも灰色で石英粒を胎土に含む。ウンモは少ない。凹面が丁寧に調整されている。器面全体に反りが少なく、表裏の判断が難しい。硬質で、数量は少ない。
- 平瓦Ⅳ群　　内外面ともに白褐色を呈し、ウンモを多く含む。凹面は丁寧に調整されている。比較的硬質である。
- 丸瓦Ⅰ群1類　　平瓦Ⅰ群1類に同じ。内面には布目痕や縄痕がみられる。
- 丸瓦Ⅱ群1類　　平瓦Ⅱ群1類に同じ。Ⅰ群1類より厚手のものが多い。内面に布目痕や縄目痕がみられ、縄目は交差しX状を呈するものが多い。表面はよく調整がなされてはいるが、ケズリの痕跡が観察されるものもある。また、タタキ締めた痕跡とみられる格子目文が観察されるものが含まれる。
- 丸瓦Ⅱ群2類　　平瓦Ⅱ群2類に同じ。少数であり、小片が多い。

丸瓦II群3類	外面が白褐色を呈し、断面はII群2類と同様に赤褐色を呈する。軟質で胎土の様相がII群1・2類と同様であるため、II群に分類した。裏面には布目痕がみられ外面はよく調整されている。
丸瓦III群a	平瓦III群と同じ。内面に布目痕と縄目痕が残る。
丸瓦III類b	内外面とも灰色を呈し、III群aに類似するがこれと比較して厚手で、胎土に径0.5~1mm程度の石英とみられる白色粒が多く混じる特徴があり、胎土が均質ではない。裏面には布目痕・縄痕が残り、表面の調整はaと比較して粗雑である。
丸瓦IV群1類	内外面とも白灰褐色を呈し、硬質である。平瓦IV群に類似。表面はよく磨かれているが、タタキ痕(格子目)が残るものやヘラケズリの痕跡がみられるものもある。裏面には布目痕・縄目痕が残る。胎土にはウンモを含む。
丸瓦IV群2類	内外面ともに白褐色を呈し、軟質である。胎土にウンモをあまり含まない。成形等は丁寧になされ、表面はよく磨かれているが、タタキ痕(格子目)が残るものも稀にみられる。裏面には布目痕と縄目痕がみられる。
軒丸I群1類	丸瓦I群1類と同じ。直径約1.5cmの釘孔がみられる。
軒丸II類1類	丸瓦II群1類と同じ。
軒平I群1類	平瓦I群1類と同じ。小片が多い。断面の観察から平瓦に軒の部分を取り付けていることがわかる。軒の文様は接合の前か後かは不明。
軒平II群1類	平瓦II群1類と同じ。平瓦に顎を取り付けて軒を作り、そのあとで型押による軒の文様をつけていることが観察された。
面戸II群1類	平瓦II群1類と同じ。1点のみ検出。
輪違I群1類	丸瓦I群1類と同じ。裏面には布目痕・縄目痕が残る。表面は平滑に仕上げられているが、瓦が重なる部分にヘラケズリ痕が残るものがみられる。
輪違II群1類	丸瓦II群2類と同じ。裏面に布目痕・縄目痕がみられる。表面の調整がやや粗雑である。輪違I群1類同様、瓦が重なる部分にヘラケズリ痕が残るものがみられた。
輪違IV群1類	丸瓦IV群1類と同じ。
輪違IV群2類	丸瓦IV群2類と同じ。

以上のように、形状、胎土から分類すると、I群及びII群1類の瓦の出土量が多いことが観察される。しかしながら、I~IV群のいずれの軒平・軒丸の文様にも大きな変化はみられず、文様からの年代変遷を追うことは難しい。ただし、軒平瓦の作り方に差異があることが発見された。すなわち顎部を取り付けてから軒平部の文様を型押ししたものと、型押しして作られた軒平の顎部に平瓦を差し込むように取り付けたものとの2種類である。これは上記の分類では軒平I群1類と軒平II群1類とに分けてはいるが、必ずしもその分類にあてはまるわけではなく、これらの分類とどのように相関してくるかについては分析不足であり、今後類例の増加をまって改めて分類・整理したいと考えている。

## (2) 石製品

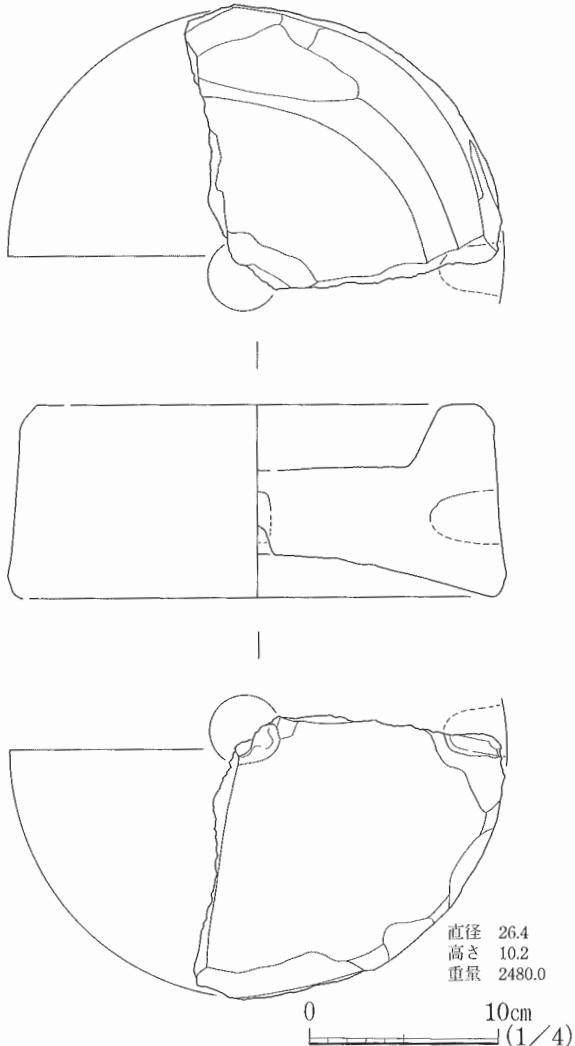
石製品については硯3点、石臼1点、碁石13点、砥石4点が検出されている。硯・石臼については出土地点にて詳述している。砥石・碁石については図版を参照されたい。

## (3) 鉄製品

全体で319点検出され、図示できたものは205点、内鉄釘が277点と大半を占める。鎌状の鉄製品(第30図23)がみられ、1区の建造物跡の性格を推察する一つの材料となる。詳細については一覧表を参照していただきたい。

## (4) 銅製品・古銭

銅製品の出土は非常に少なく、さらに図示できたものは8点のみであった。火縄銃の玉とみられるものが多いことから、当地においても戊辰戦争時に、戦闘が展開された可能性が示唆されよう。



第16図 出土遺物：石臼(S B01-f 磚1層)

## 第4節 まとめ

1区においては、土台石を用いた建造物が3棟検出され、内2棟(1・3号)は瓦葺の建造物であった可能性が高いことが明らかとなった。このような構造の建造物は当城址においては初めての発見であるとともに、二本松藩主丹羽氏の家紋が施された瓦をもつことから、丹羽期の明確な遺構が検出されたことも特筆されよう。これにより丹羽氏が城址の頂上付近まで使用していたことが明らかとなった。寛文及び元禄以前の様子を示すといわれる絵図面においては、「蔵屋敷」と呼称されていることからも蔵である可能性が高く、土台石に横木を据え、それにホゾ穴で柱を立ち上げる構造の蔵であったと推測される。陶磁器などの日常用具の出土が少ないことも、これらの建造物が生活する場ではなかったことがうかがえ、蔵であることを裏付けていると思われる。また、この土台石は軒石を兼ねていた可能性もあり、そうした場合はひとまわり小さな構造となる。それでも3号建物跡は15mを超える桁行をもち、大規模な建造物であることに相違はない。また、1号と3号は入口部が判明しており、この部分の検討から建物の

床の高さを類推することが可能であろう。なお、建物跡内部には玉石が充填されており、この機能については検討中であるが、守山城(郡山市)や薬師城(広島県川内町)、平山城(京都府綾部市)に類例がみられる。ただし、当遺構の場合は土台石を埋めてしまうほど玉石が盛り上げられており、当然ながら機能時には玉石は土台石と同レベルあるいはやや高い程度であったと考えられ、根太も置いて使用したと思われるが、その痕跡を確認することはできなかった。以上のことから、現段階ではこの玉石の機能は建造物の乾燥のために用いられたものと解釈しておきたい。したがって、この“蔵”に収納された物品は常に乾燥が必要な物であるといえ、硝煙蔵である可能性が考えられよう。さらに、この玉石を土台石上に盛り上げた時期は、この玉石の上部に生育していた杉の年輪が53年であったので、それ以前であることは明らかとなった。当地は第2次世界大戦時に畠として開墾がなされたといわれ、今回の調査でも畠の痕跡が確認されている。したがってその際に平場を整理し、平場に散乱する邪魔な玉石を、石材が集中しているこれらの建物群の上部に盛り上げた可能性が考えられるが、そうした場合にこの玉石がどこから持ち込まれたものは明確ではない。西側の本丸側の平場及び斜面に石垣が存在し、これが崩壊した時に崩落した裏込石である可能性が高いが、想像の域をでないものである。今後の調査により石垣の痕跡等を発見できれば、このことを裏付けることができよう。

2号建物跡は1・3号とはその構造がやや異なっているため、その機能も異なると思われる。瓦を伴わないことからコバ葺あるいはカヤ葺の屋根をもち、束柱あるいは根太による床を持つ建造物と考えられる。1・3号とは収納するものが異なる蔵である可能性と小規模な屋敷、絵図面からは番屋である可能性などが考えられる。束石の状況から一部が土間、一部が床である可能性が指摘されており、そうであれば後者の可能性が高いだろう。

これらの建造物が蔵であるとすれば、1区北側の遺構がない部分はその作業空間として解釈することが可能である。

この3棟の所属時期については丹羽氏入府(寛永20年=1643年)以降であることは明らかであるが、その詳細な時期は検討中である。寛政(1789~1801)の頃を表した絵図では、既に平場として意識されなくなることに注目すると、それ以前の遺構である可能性が考えられる。

2区において今回新たに検出された3段にわたる石垣の存在は、現況の地形が後世に大きく改変されておらず、城が機能していた時期の状況で残存していることが判明した。したがって、城内に同様の石垣が埋れている可能性を示唆するものであり、今後の調査を進めるうえで十分に注意すべきであることが認識された。またその機能は、石積4・5の地点から本丸を見た場合の視覚的効果を狙ったものと土留めとしての機能とが推定される。

これらの石積は4・5を除いて、昨年度検出された石積同様、

- (1) 材が小型であること
- (2) 勾配が急であること(ほぼ垂直)
- (3) 裏込石がみられないこと
- (4) 両端のおさめ方に算木積がみられないこと

の4点の特徴が共通する。しかしその一方で

- (1) 矢穴が伴うこと(後補の可能性がある)
- (2) 斜面の上部に営まれること
- (3) より石材が小型化し、積み方が乱雑であること

などの相違点がみられる。これらの石垣の年代については、他城址との比較も必要であり、明確な年代を示せないが、昨年検出された石積同様、当城址最古期に属する可能性が高い。しかしながら後世に手を加えているため石積1・3などは本来の形状を残しておらず、石積2のみが本来の形状を保っていると判断された。

また、石積4・5は石積1～3とは全く様相が異なっているが、これが時期差によるものなのか、積み手の差によるものなのか、あるいは平場入口の通路に面する部分というその立地によるものなのか、検討を要するところである。おそらくは時期差によるものと想定される。すなわち14Tの部分は二城代時代の東城と西城とを結ぶ通路に当たり、当該地が通路として整備された時期は二城代時代にはありえない。したがって地山を削っただけの通路の時期は中世に比定され、盛土整地をし、石積を用いて通路を整備した時期は蒲生期と考えると、石積4・5の様相が理解できるのではないだろうか。

このように今回の調査では、明確に丹羽氏の時期に所属する遺構が検出されたことが特筆され、とくに1区の蔵屋敷の検出は絵図面の信憑性の高さが証明された調査となった。また、2区においては昨年同様、本丸付近において大規模な土地改変を施工していることが明らかとなり、城郭が機能していた当時の地形がよく保存されていることと、在地系の石積技術の様相をうかがうことのできる調査であったといえよう。

- 参考文献 1992 『二本松城址Ⅰ』二本松市教育委員会  
1997 『二本松城址Ⅱ』二本松市教育委員会  
2000 『二本松城址Ⅲ』二本松市教育委員会  
2001 『二本松城址Ⅳ』二本松市教育委員会  
2002 『二本松城址Ⅴ』二本松市教育委員会  
2003 『二本松城址Ⅵ』二本松市教育委員会

第1表 出土遺物觀察表[鉄製品]

挿図番号	図版番号	出土地点:層位	遺物名	規格(cm・g)			備 考
				長さ・大きさ	厚み	重さ	
32図14	図版28 n	石積 2 サブトレ	鉄釘	(2.7)	0.4×0.45	1.2	
32図15	図版28 o	7 T L 1	刀小状鉄製品	(2.65)×1.3	0.4	4.0	
		7 T L 1	不明鉄製品	3.0×2.8	1.2	28.4	六角形
		7 T L 1	鉄釘?	(2.05)	径0.3	0.4	
		7 T L 1	鉄釘?	(2.25)	径0.3	0.4	
32図 1	図版28 a	7 T サブトレ内	鉄釘	(1.5)	0.4×0.4	1.1	
32図 3	図版28 d	7 T 2層	鉄釘	(2.6)	0.45×0.5	2.3	
32図 2	図版28 b	7 T 整地層上層	鉄釘	(2.15)	0.45×0.5	1.7	
		7 T 2層	鉄釘	(3.4)	0.4×0.4	1.9	
32図 5	図版28 c	7 T 2層	鉄釘	(7.05)	0.45×0.6	6.3	
32図 6	図版28 e	7 T 5層	刀状鉄製品	(13.55)	a - 3.0×0.25 b - 2.2×0.3	40.0	
32図 7	図版28 f	12T 表土	鉄釘	(5.25)	0.6×0.55	6.0	
		12T 表土	不明鉄製品	1.6×1.65	0.15	1.1	
		13T 表土	鉄釘?	(5.15)	0.6×0.7	6.9	
			鉄釘?	(9.4)	径0.35	5.2	
			鉄釘	12.5	径0.5	16.7	
			鏡?	11.8	0.5×0.5	22.8	
			鉄釘?	(32.0)	径0.4	19.4	
32図10	図版28 j	13T 2層	鉄釘	(3.6)	0.6×0.45	3.1	
32図 4	図版28 h	13T 2層	鉄釘	(1.65)	0.3×0.3	0.6	
32図 9	図版28 i	13T 2層内	鉄釘	(3.4)	0.6×0.6	4.0	
		13T 2層内	鉄滓?	8.2×4.5	3.7	110.3	
32図 8	図版28 g	13T 東拡張部 表土	鉄釘	(3.85)	0.65×0.8	6.5	
		13T 東拡張部 2層	鉄釘?	(4.1)	径0.2	0.6	
32図12	図版28 l	14T 表土～2層	鉄釘	(3.15)	0.55×0.65	3.1	
32図11	図版28 k	14T 石積4・5 表土	鉄釘	(3.45)	0.65×0.45	3.7	
		14T 石積4・5 表土	不明鉄製品	4.0×4.85	0.25	16.2	
		14T 遺構面	鉄釘?	(1.75)	0.3×0.35	0.3	
32図13	図版28 m	14T 4層	鉄釘	(3.05)	0.55×0.65	3.0	
		14T 3層	鉄釘	(2.5)	0.35×0.4	2.9	炭化物付着
			不明鉄製品	(1.65)×(1.0)	0.8	1.2	
			鉄釘	(1.65)	0.3×0.4	2.1	
32図16	図版28 p	石積 3 サブトレ 2層	鉄釘	(6.15)	0.5×0.5	5.3	
図版28 q		石積 1 崩落土	鉄釘	(4.9)	0.6×0.6	総計55.3	木片付着、瓦片付着
		2 T 東拡張部 表土	鉄釘	8.4	径0.4	5.8	
		~L 1	不明製品	(5.0)	-----	35.0	
		2 T 北拡張部 L 5	鉄釘?	(14.2)	径0.3	4.0	
		2 T 北拡張部 L 2	鉄釘	(2.0)	0.3×0.4	0.9	
		4 T L 2	不明鉄製品	9.3	径0.35	6.3	
		4 T 上層	不明鉄製品	2.0×2.3	0.9	6.5	
		4 T サブトレ内	不明鉄製品	1.9×2.05	0.8	2.6	
26図 6	図版22 f		鉄釘	(5.1)	0.6×0.55	3.9	
26図 5	図版22 e		小札?	(2.8)×3.05	0.5~0.8	4.2	
			不明鉄製品	-----	0.2	8.0	
26図 7	図版22 g	4 T 生活面上層	板状鉄製品	2.68	0.25×1.13	2.3	
		5 T L 2	鉄滓	3.4×2.9	1.1	11.0	
			鉄釘	(2.8)	0.3×0.4	1.4	
26図 8	図版22 i		鉄釘	(2.8)	0.5×0.5	2.2	
27図 1	図版23 a	3 T 北側 盛土	鉄釘	(3.95)	0.5×0.5	3.4	
27図 2	図版23 b	3 T L 2' (S B02 付近)	鉄釘	4.1	0.3×0.25	1.9	
27図 9	図版23 i		鉄釘	(3.2)	0.45×0.45	2.3	
27図10	図版23 j		鉄釘	(2.2)	0.5×0.45	1.3	
27図14	図版23 n	3 T SB02付近 L 3上	鉄釘	5.2	0.45×0.45	3.2	
27図16	図版23 p	3 T SB02サブトレ L 2'	鉄釘	(6.35)	0.5×0.45	4.8	
27図 3	図版23 c	3 T 西拡張部 崩落土	鉄釘	(4.1)	0.45×0.55	3.5	
27図 4	図版23 d	3 T SB02	鉄釘	(5.4)	a - 0.6×0.7 b - 0.65×0.5	6.2	
		3 T SB02サブトレ L 6	鉄釘?	(1.6)	0.4×0.5	1.3	
27図18	図版23 s	3 T SB02サブトレ L 6	鉄釘	(3.5)	0.5×0.45	1.9	
27図17	図版23 r		鉄釘	8.05	0.5×0.65	6.8	木片付着
27図20	図版23 t		鉄釘	(5.3)	0.35×0.3	2.5	
27図11	図版23 k	3 T 西拡張部 SB02 L 2'	鉄釘	(6.2)	0.65×0.65	6.9	
27図13	図版23 m		鉄釘	(2.6)	0.35×0.35	1.0	
27図12	図版23 l		鉄釘?	(3.3)	0.65×0.65	19.0	
27図24	図版23 y	3 T SB02 サブトレ f	鉄釘	(8.5)	0.5×0.6	6.8	
26図 3	図版22 d	3 T SB02内焼土1層	鉄釘	(1.75)	0.4×0.35	1.1	
26図 4	図版22 c	3 T SB02内焼土	鉄釘	(2.55)	0.45×0.5	0.9	
26図 2	図版22 b	3 T SB02内SD01 1層	鉄釘	(3.3)	0.4×0.5	1.6	
26図 1	図版22 a	3 T SB02内SD01	刀小状鉄製品	(6.1)	0.95×0.35	7.4	
		3 T SB02内SD01	不明鉄製品	3.5×1.8	0.8	6.8	
27図23	図版23 x		鉄釘	(3.1)	0.4×0.35	1.6	
27図22	図版23 w		鉄釘	(3.55)	0.55×0.6	2.7	
		3 T SB02 サブトレ f L 4	不明鉄製品	2.5×3.4	0.15	2.3	
			不明鉄製品	1.7×1.2	0.25	0.6	
27図21	図版23 v		鉄釘	(2.3)	0.55×0.55	1.5	

挿図番号	図版番号	出土地点：層位	遺物名	規格(cm・g)			備考
				長さ・大きさ	厚み	重さ	
27図5	図版23 g	3 T S B02上 L 2'	鉄釘	(7.0)	0.5×0.55	10.4	炭化物付着
27図8	図版23 h		鉄釘	(6.3)	a -0.5×0.45 b -0.3×0.53	4.7	木片付着
27図7	図版23 f		鉄釘	(12.65)	0.6×0.55	16.9	
27図6	図版23 e		板状鉄製品?	(17.8)	a -0.7×1.1 b -0.45×1.05	79.5	
27図15	図版23 o	3 T S B02 L 4	鉄釘	(4.6)	0.6×0.55	4.2	
27図19	図版23 q	3 T S B02サブトレ c	鉄釘	(3.05)	0.3×0.4	1.4	
		1 T L 2'	不明鉄製品	9.5	-----	11.6	
			鉄釘	5.2	径0.3	2.1	
			鉄滓	4.6×3.8	1.5	21.0	
		1 T L 2'	鉄釘?	(9.3)	径0.35	4.8	
			鉄釘?	(8.0)	径0.3	3.3	
			鉄釘?	(6.5)	径0.3	3.4	
		1 T カクラン	鉄釘?	(7.3)	径0.3	3.1	
		1-2 T 間北抜張部 L 2'	不明鉄製品	3.05×2.0	1.2	12.6	
		S B01	鉄釘	7.6	径0.35	5.0	
26図15	図版22 o	S B01-c	鉄釘	(5.12)	0.45×0.6	5.5	
26図13	図版22 m	S B01-a 土台石付近	鉄釘	(2.15)	0.4×0.3	1.0	炭化物付着
26図10	図版22 p	S B01-d 碠3層	板状鉄釘	7.05	0.3×0.65	6.3	
26図16	図版22 q	S B01 表土下	鉄釘	(5.05)	0.5×0.6	7.6	木片付着
26図17	図版22 r	S B01-b 碠2層	装飾具?	3.3×3.25	0.6×0.35	9.0	
26図14	図版22 n	S B01-c 碠2層	鉄釘	(4.25)	0.3×0.35	1.8	
26図18	図版22 t	S B01 L 1~L 2	鉄釘	(4.15)	0.45×0.45	2.4	
26図21	図版22 u	S B01 L 2	鉄釘	(4.35)	0.4×0.4	1.7	
26図20	図版22 v	S B01 L 4	鉄釘	7.0	0.45×0.5	6.5	
26図9	図版22 j	S B01 土台石上(L 4)	鉄釘	(6.8)	0.5×0.6	6.4	
26図12	図版22 l		鉄釘	(2.9)	0.4×0.3	1.0	
26図11	図版22 k		鉄釘	(2.6)	0.45×0.4	1.7	木片付着
26図26	図版22 a b		鉄釘	(2.0)	0.3×0.4	0.5	
26図24	図版22 z		鉄釘	(6.65)	0.5×0.6	5.3	
26図27	図版22 a a		鉄釘	(2.85)	0.5×0.55	2.8	
26図25	図版22 y	S B01 L 4	鉄釘	(3.8)	0.4×0.45	2.7	
26図19	図版22 s		鉄釘	(7.95)	0.55×0.6	6.9	
26図22	図版22 w		鉄釘	(2.05)	0.3×0.3	0.5	
26図23	図版22 x		鉄釘	(6.65)	0.5×0.6	5.3	
31図12	図版27 b	S B03 表採	鉄釘	(3.75)	0.4×0.5	2.5	
31図11	図版27 a	S B03 表土	鉄釘	(2.3)	0.35×0.5	1.2	
31図13	図版27 c	S B03上	鉄釘	(6.7)	0.8×0.75	18.3	
31図14	図版27 d	S B03上	不明鉄製品	21.22	0.55×0.55	10.0	
31図18	図版27 j	S B03 瓦層	鉄釘	(5.85)	0.45×0.5	4.0	
31図21	図版27 k	S B03 瓦層	刀小状鉄製品	(3.8)	0.5×0.6	4.1	
31図5	図版26 y	S B03-b 碠1層上	鉄釘	(3.15)×1.33	0.43	4.2	
31図7	図版26 a a	S B03-b 階段周辺	鉄釘	(2.2)	0.45×0.5	1.4	
31図6	図版26 z	S B03 階段部北部	鉄釘	(2.1)	0.5×0.5	7.1	
31図20	図版27 i	S B03-c L 2	鉄釘	(3.55)	0.4×0.45	1.8	
31図9	図版26 a c	S B03-c 碠1層上	鉄釘	(5.05)	0.5×0.65	4.8	
31図10	図版26 a d	S B03-c 土台石上	鉄釘	(8.6)	0.5×0.65	12.0	
31図8	図版26 a b	S B03-c 碠1層	鉄釘	(5.15)	0.4×0.55	5.8	
31図3	図版26 w	S B03横断トレンチ 碠1層	楔?	5.15	1.7×2.0	84.0	
31図19	図版27 b	S B03	鉄釘	(4.65)	0.5×0.55	5.1	
31図16	図版27 f	S B03 L 1~L 2	鉄釘	(4.85)	0.45×0.4	3.2	
31図17	図版27 g		鉄釘	(8.4)	0.45×0.55	8.2	
31図15	図版27 e		板状鉄釘	(9.35)	0.5×0.75	13.5	
			板状鉄釘	(4.05)	0.4×0.5	3.6	
			不明鉄製品	1.6×2.9	0.3~0.7	4.6	
30図22	図版26 i	IIT S B03サブトレ c L 2	鉄釘?	(1.5)	0.3×0.4	1.7	
30図30	図版26 p	IIT S B03サブトレ d 塵土3	鉄釘	(1.45)	0.35×0.35	0.8	
30図25	図版26 l	IIT S B03サブトレ d	鉄釘	(4.05)	0.4×0.35	2.3	
30図26	図版26 m	S B03サブトレ d L 1~L 2	鉄釘	(6.85)	0.45×0.45	6.1	
30図27	図版26 n		鉄釘	(4.0)	0.45×0.4	2.1	
30図28	図版26 o		鉄釘	(3.05)	0.3×0.25	1.4	
30図24	図版26 k		鉄釘	(3.8)	0.4×0.45	2.0	
30図23	図版26 j		鉄釘	(8.25)	0.75×0.8	36.5	木片付着
30図33	図版26 t		檜状鉄製品	7.4×4.1	0.6	53.5	
		S B03サブトレ e 茶色土下層	鉄釘?	(2.2)	0.35×0.4		
			(全体)	2.65×2.65	0.75	3.9	木片付着
			鉄釘?	(3.2)	0.5×0.4		
			(全体)	2.3×3.1	1.2	3.8	木片付着
30図32	図版26 s	S B03サブトレ e 黒色土層	鉄釘	(2.2)	0.45×0.5	4.1	
30図31	図版26 r		鉄釘	(4.05)	0.5×0.4	3.8	木片付着
30図29	図版26 q		鉄釘	(5.1)	0.5×0.7	7.4	
			鉄釘?	(3.3)×2.9	1.3	5.9	木片付着
		S B03-c サブトレ g	鉄釘	(1.1)	0.35×0.35	0.8	土台石の埋土内

挿図番号	図版番号	出土地点：層位	遺物名	規格(cm・g)			備 考
				長さ・大きさ	厚み	重さ	
31図 2	図版26 u	S B03サブトレ g 2層	鉄釘	(2.45)	0.35×0.35	1.0	
31図 1	図版26 v		鉄釘	(3.75)	0.45×0.4	2.1	
			鉄釘	(2.0)	0.35×0.3	0.4	
30図17	図版26 d		鉄釘	(3.05)	0.4×0.35	1.6	
30図15	図版26 c		鉄釘	(3.25)	0.53×0.5	1.8	
30図16	図版26 b		鉄釘	(3.9)	0.45×0.5	4.6	
30図14	図版26 a	S B03サブトレ c L 2～瓦層	鉄釘	(4.7)	0.45×0.55	5.7	
30図18	図版26 e		鉄釘	(4.85)	0.3×0.5	2.1	
			鉄釘	(1.55)	0.45×0.5	0.7	
30図20	図版26 g		鉄釘	(2.65)	0.4×0.45	1.7	木片付着
30図19	図版26 f		鉄釘	(3.55)	0.25×0.35	1.8	
30図21	図版26 h		鉄釘	(2.4)	0.5×0.55	1.6	
28図 1	図版24 a	S B03サブトレ a L 1～2層	鉄釘	(6.2)	0.4×0.45	3.3	
28図25	図版24 z	S B03サブトレ a 瓦層上	鉄釘	(5.9)	0.4×0.45	5.2	
28図 2	図版24 b		鉄釘	(8.7)	0.55×0.6	9.0	
28図 5	図版24 e		鉄釘	(4.8)	0.35×0.4	3.4	
28図 7	図版24 f		鉄釘	(3.9)	0.4×0.5	1.7	
28図 3	図版24 c		鉄釘	(3.5)	0.35×0.45	2.3	
28図10	図版24 j		鉄釘	(3.65)	0.4×0.45	2.3	
28図 4	図版24 d		鉄釘	(4.15)	0.35×0.5	3.1	
28図14	図版24 n		鉄釘	(2.95)	0.4×0.4	1.2	
28図 9	図版24 i		鉄釘	(3.25)	0.35×0.5	1.9	
28図11	図版24 k		鉄釘	(4.3)	0.35×0.25	1.8	
28図 6	図版24 g		鉄釘	(4.05)	0.35×0.55	2.9	
28図15	図版24 o		鉄釘	(5.55)	0.5×0.5	4.5	
28図12	図版24 l		鉄釘	(4.45)	0.5×0.7	5.8	
28図13	図版24 m		鉄釘	(5.95)	0.35×0.5	4.4	
28図 8	図版24 h		鉄釘	(4.72)	0.45×0.6	4.4	
28図17	図版24 q		鉄釘	(4.05)	0.45×0.45	3.2	
28図16	図版24 p		鉄釘	(2.95)	0.3×0.4	1.6	
28図22	図版24 u		鉄釘	(2.65)	0.4×0.55	3.2	
28図21	図版24 t		鉄釘	(4.6)	0.4×0.4	2.9	
28図26	図版24 w		鉄釘	(4.9)	0.4×0.5	3.8	
28図18	図版24 r		鉄釘	(5.6)	0.45×0.6	8.5	
28図19	図版24 s		鉄釘	(5.25)	0.3×0.3	3.3	
28図20	図版24 x		鉄釘	(4.65)	0.4×0.35	2.4	
28図23	図版24 v		鉄釘	(6.1)	0.4×0.55	6.0	
28図24	図版24 y		不明鉄製品	1.85×2.93	0.2	3.8	
		S B03 サブトレ a L 2	鉄釘	4.0	0.35×0.4	1.3	
			鉄釘	(4.25)	0.45×0.55	4.3	
			鉄釘	(3.1)	0.3×0.4	1.4	
			鉄釘	(1.55)	0.35×0.4	0.8	
			鉄釘	(2.0)	0.3×0.4	1.7	
			鉄釘	(2.05)	0.2×0.3	0.2	
			鉄釘	(1.75)	0.4×0.4	1.2	
			鉄釘	5.0	0.3×0.4	2.2	
			鉄釘	(1.0)	0.3×0.4	0.4	
			鉄釘	(1.8)	0.35×0.4	2.5	
			鉄釘	(1.2)	0.15×0.35	0.2	
			鉄釘	(1.6)	0.4×0.3	0.4	
			鉄釘	(2.4)	0.35×0.4	2.3	
			鉄釘	(2.15)	0.35×0.35	0.8	
			不明鉄製品	(2.35)×(2.25)	0.7	7.8	
29図 4	図版24 a s	S B03 サブトレ a 瓦層	鉄釘	(2.35)	0.25×0.25	1.1	
28図29	図版24 a d		鉄釘	(3.0)	0.4×0.5	1.8	
28図32	図版24 a f		鉄釘	(2.53)	0.3×0.45	1.5	
28図33	図版24 a g		鉄釘	(3.05)	0.4×0.4	1.8	
28図30	図版24 a e		鉄釘	(2.6)	0.6×0.6	3.5	
28図38	図版24 a m		鉄釘	4.05	0.3×0.4	1.8	
28図40	図版24 a o		鉄釘	(3.45)	0.4×0.65	2.3	木片付着
28図34	図版24 a i		鉄釘	(4.1)	0.45×0.65	8.6	炭化物付着
29図 3	図版24 a r		鉄釘	(3.5)	0.35×0.3	1.1	
28図28	図版24 a c		鉄釘	(6.5)	0.45×0.7	14.1	
28図35	図版24 a j		鉄釘	(3.42)	0.5×0.6	4.6	
28図39	図版24 a n		鉄釘	(4.0)	0.25×0.4	1.8	
28図37	図版24 a l		鉄釘	(4.1)	0.4×0.45	3.3	
29図 2	図版24 a q		鉄釘	4.05	0.3×0.4	1.5	
29図 1	図版24 a p		鉄釘	(4.0)	0.3×0.5	1.2	
28図36	図版24 a k	S B03 サブトレ a L 2～瓦層	鉄釘	(4.45)	0.4×0.55	3.4	
28図31	図版24 a h		鉄釘	6.2	0.4×0.5	4.3	
28図27	図版24 a b		鉄釘	5.7	0.4×0.45	4.0	
			不明鉄製品	(1.3)×(1.1)	0.8	1.0	
			不明鉄製品	(1.3)×(0.85)	1.0	1.0	
			不明鉄製品	(0.85)×(0.95)	0.5	0.4	
			不明鉄製品	2.0×1.75	1.1	4.2	
			鉄釘	(2.4)	0.6×0.5	1.2	木片付着
			鉄釘	(1.6)	0.45×0.4	0.7	
			鉄釘	(1.6)	0.45×0.4	0.7	

挿図番号	図版番号	出土地点：層位	遺物名	規格(cm・g)			備考
				長さ・大きさ	厚み	重さ	
		S B03 サブトレ b L 1～2層	鉄釘	(2.15)	0.45×0.4	1.2	
			鉄釘	(2.5)	0.3×0.4	1.4	
			鉄釘	(1.35)	0.3×0.4	0.7	
			鉄釘	(1.4)	0.4×0.5	1.4	
			鉄釘	(3.25)	0.45×0.5	2.9	木片付着
			鉄釘	(1.35)	0.4×0.5	0.8	
			鉄釘	(2.5)	0.4×0.5	1.8	
			鉄釘	(1.2)	0.3×0.45	0.4	
			鉄釘	(1.05)	0.4×0.4	0.7	
			鉄釘	(1.9)	0.3×0.3	1.0	
			鉄釘	(1.6)	0.35×0.4	0.5	
			鉄釘	(1.55)	0.35×0.5	0.6	
			鉄釘	(1.2)	0.3×0.4	1.5	
			鉄釘	(1.8)	0.4×0.4	0.9	
			鉄釘	(2.0)	0.35×0.4	1.3	
			鉄釘	(2.6)	0.35×0.4	5.0	瓦片付着
29図9	図版25 f		鉄釘	(5.1)	0.5×0.35	4.8	
29図6	図版25 b		鉄釘	(2.4)	0.3×0.35	0.9	
29図10	図版25 g		鉄釘	(4.95)	0.45×0.55	3.8	
29図5	図版25 a		鉄釘	(2.65)	0.4×0.75	4.5	
29図7	図版25 c		鉄釘	(2.55)	0.35×0.45	4.0	
29図11	図版25 e		鉄釘	(3.8)	0.4×0.35	2.0	
29図8	図版25 d		鉄釘	(3.35)	0.4×0.3	2.7	
30図1	図版25 a p	S B03 サブトレ b 瓦層	鉄釘	(2.4)	0.2×0.25	0.7	
30図2	図版25 a o		鉄釘	(2.5)	0.25×0.4	1.4	
30図3	図版25 a q		鉄釘	(3.4)	0.4×0.5	2.3	
30図7	図版25 a r		鉄釘	7.3	0.4×0.3	5.9	
			鉄釘	(1.7)	0.4×0.55	1.5	
			鉄釘	(1.9)	0.2×0.25	0.5	
			鉄釘	(3.1)	0.2×0.3	0.9	
30図12	図版25 a z		鉄釘	(5.1)	0.3×0.4	3.0	
29図25	図版25 y	S B03 サブトレ b L 2	円状不明製品	外 2.4×2.35 内 0.7×0.75	0.2	3.1	
30図13	図版25 b a		鉄釘	(3.6)	0.5×0.55	4.2	瓦片付着
			鉄釘	(2.0)	0.4×0.4	2.5	
		S B03 サブトレ b L 2	鉄釘	(1.7)	0.45×0.35	1.3	
29図12	図版25 h		鉄釘	(4.55)	0.4×0.4	4.7	
29図20	図版25 p		鉄釘	(6.7)	0.45×0.5	9.3	
29図22	図版25 s		鉄釘	(2.2)	0.3×0.35	0.9	木片付着
29図21	図版25 q		鉄釘	(7.6)	0.35×0.45	7.3	木片付着
29図19	図版25 o		鉄釘	(5.7)	0.3×0.25	3.1	
29図18	図版25 n		鉄釘	(5.3)	0.35×0.3	2.9	
29図27	図版25 u		鉄釘	(5.15)	0.35×0.35	3.3	
29図29	図版25 x		鉄釘	(4.0)	0.25×0.3	2.4	
29図16	図版25 l		鉄釘	(4.45)	0.3×0.35	2.6	
29図24	図版25 t		円状不明製品	外 2.7 内 0.85	0.22	2.0	
29図23	図版25 r		鉄釘	(4.6)	0.3×0.35	2.0	
29図28	図版25 w		鉄釘	(4.5)	0.3×0.4	1.9	
29図15	図版25 k		鉄釘	(4.75)	0.3×0.35	3.1	
29図27	図版25 v		鉄釘	(4.4)	0.4×0.3	2.9	
29図13	図版25 i		鉄釘	(3.8)	0.35×0.3	2.5	
29図14	図版25 j		鉄釘	4.0	0.35×0.35	2.2	
29図17	図版25 m		鉄釘	(6.1)	0.4×0.4	4.2	
		S B03 サブトレ b L 2～瓦層	鉄釘	(3.2)	0.45×0.6	3.9	
			鉄釘	(3.2)	0.4×0.4	2.9	
			鉄釘	(3.4)	0.35×0.5	1.6	
			鉄釘	(1.4)	0.35×0.35	0.9	
			鉄釘	(2.95)	0.35×0.4	1.6	
			鉄釘	(2.0)	0.3×0.4	1.0	
			鉄釘	(2.5)	0.3×0.3	0.9	
			鉄釘	(0.65)	0.2×0.2	0.2	
			鉄釘	(2.8)	0.4×0.4	1.8	
29図33	図版25 a c		鉄釘	(3.5)	0.35×0.3	0.9	
29図34	図版25 a d		鉄釘	(4.55)	0.35×0.4	2.3	
29図35	図版25 a f		鉄釘	(3.6)	0.35×0.5	1.5	
29図32	図版25 a b		鉄釘	(3.4)	0.5×0.55	2.5	
29図30	図版25 z		鉄釘	(3.8)	0.25×0.3	1.0	
29図40	図版25 a j		鉄釘	(2.8)	0.45×0.35	1.7	
29図41	図版25 a k		鉄釘	(3.5)	0.3×0.35	1.3	
29図39	図版25 a i		鉄釘	(3.8)	0.35×0.4	2.1	
29図43	図版25 a m		鉄釘	(3.45)	0.4×0.5	3.4	
29図31	図版25 a a		鉄釘	(3.35)	0.35×0.45	1.5	
29図36	図版25 a e		鉄釘	(3.7)	0.4×0.4	2.7	
29図42	図版25 a l		鉄釘	(5.9)	0.35×0.4	3.9	
29図37	図版25 a g		鉄釘	(4.8)	0.35×0.4	2.5	

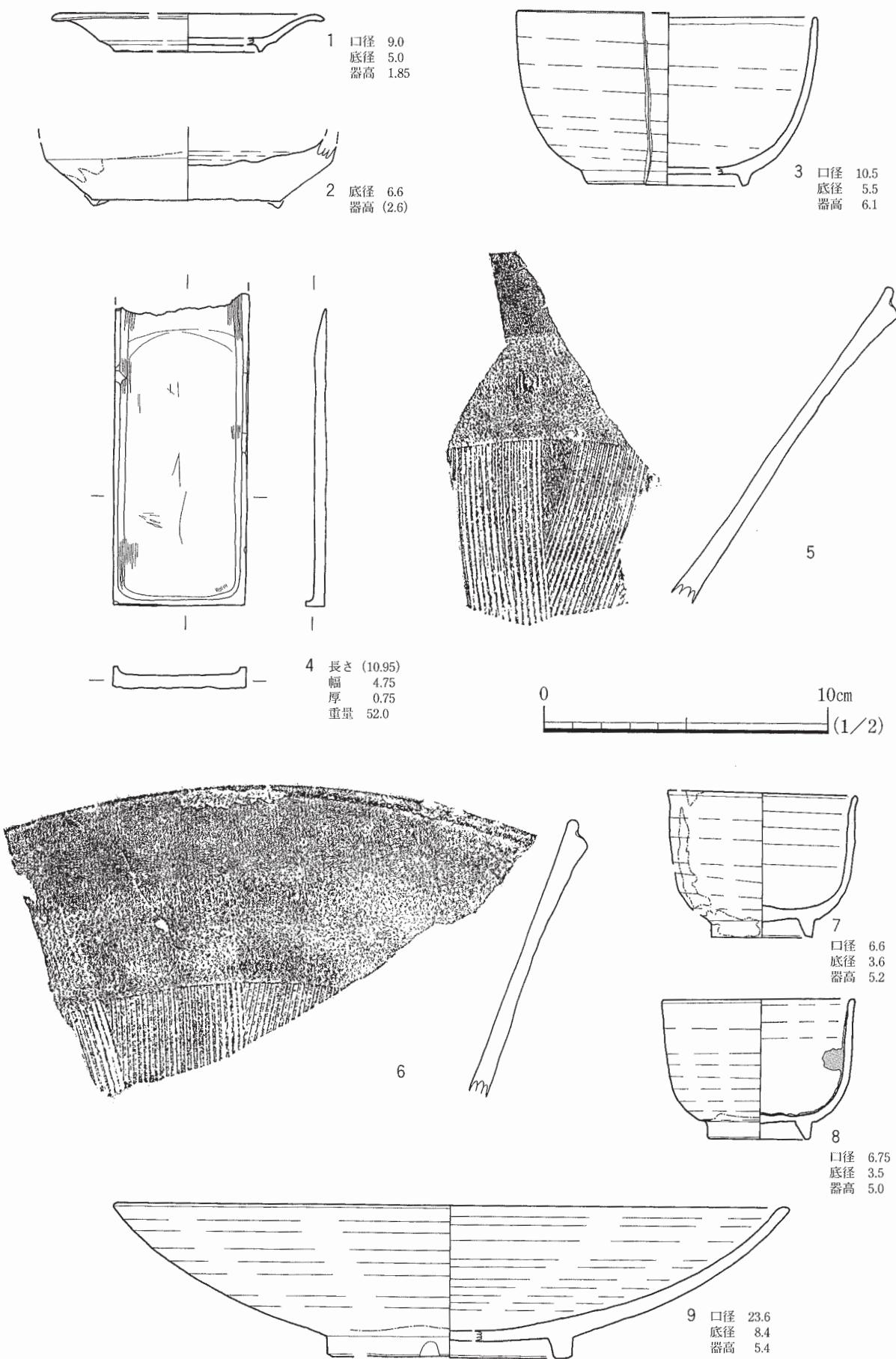
挿図番号	図版番号	出土地点：層位	遺物名	規格(cm・g)			備考
				長さ・大きさ	厚み	重さ	
29図38	図版25 a h	S B03 サブトレ b 瓦層	鉄釘	5.35	0.35×0.3	2.4	
29図44	図版25 a n		鉄釘	(4.05)	0.4×0.45	4.1	瓦片付着
			鉄釘	(1.1)	0.35×0.4	6.0	
			鉄釘	(0.7)	0.3×0.4	2.0	
			鉄釘	(2.05)	0.2×0.2	0.4	
			鉄釘	(1.3)	0.35×0.5	0.7	
			鉄釘	(1.7)	0.3×0.4	0.4	
			鉄釘	(1.3)	0.3×0.4	0.4	
			鉄釘	(1.9)	0.4×0.45	1.7	
			鉄釘	(2.1)	0.3×0.35	0.5	
			鉄釘	(1.9)	0.25×0.25	0.4	
			鉄釘	(1.5)	0.4×0.5	0.7	
			鉄釘	(0.9)	0.3×0.35	0.4	
30図 4	図版25 a s		鉄釘	(2.7)	0.35×0.35	1.2	
30図 5	図版25 a t		鉄釘	(2.65)	0.35×0.5	1.8	
30図11	図版25 a x		鉄釘	(5.75)	0.4×0.3	3.7	
30図10	図版25 a w		鉄釘	(5.55)	0.37×0.5	0.9	
30図 8	図版25 a u		鉄釘	(4.0)	0.4×0.35	2.1	
30図 9	図版25 a v		鉄釘	(4.1)	0.35×0.45	2.5	
31図 4	図版26 x	S B03-b 磨1層	鉄釘	(7.6)	0.55×0.45	11.4	
30図 6	図版25 a y	11T S B03 サブトレ b	鉄釘	(3.45)	0.4×0.3	2.2	
		S B03 サブトレ b 瓦層	鉄釘	(1.5)	0.45×0.35	1.8	

第2表 出土遺物観察表[古銭]

挿図番号	図版番号	銭文	出土地点：層位	規格(cm・g)				備考
				外径	内径	厚み	重さ	
33図 1	図版33 a	元〇通寶	1区 3T S B02サブトレ b 溝内	2.35	0.7×0.7	0.1	2.5	
33図 4	図版33 b	寛永通寶	1区 4T 上層	2.3	0.68×0.7	0.1	2.1	
33図 7	図版33 d	寛永通寶	1区 5T L 2	2.85	0.62×0.62	0.1	4.0	裏に模様あり
33図 6	図版33 c	寛永通寶		2.55	0.57×0.57	0.15	3.2	
33図 5	図版33 e	咸平元寶	1区 5T 北拡張部 2層(下)	2.45	0.6×0.6	0.15	2.9	
33図 3	図版33 g	寛永通寶	1区 S B03 レキ層③	2.55	0.55×0.55	0.15	3.0	裏に「文」
33図 2	図版33 f	皇宋通寶	1区 S B03サブトレ a 4層	2.4	0.65×0.65	0.15	2.0	
33図 8	図版33 j	寛永通寶	2区 石積3サブトレ 表土～2層	2.3	0.65×0.65	0.1	2.3	
33図 9	図版33 h	○○○寶	2区 7T 整地層内	2.5	-----	0.1	1.6	半分欠損
	図版33 i	一錢	2区 石積1 表土	2.8	-----	0.15	6.3	明治17年

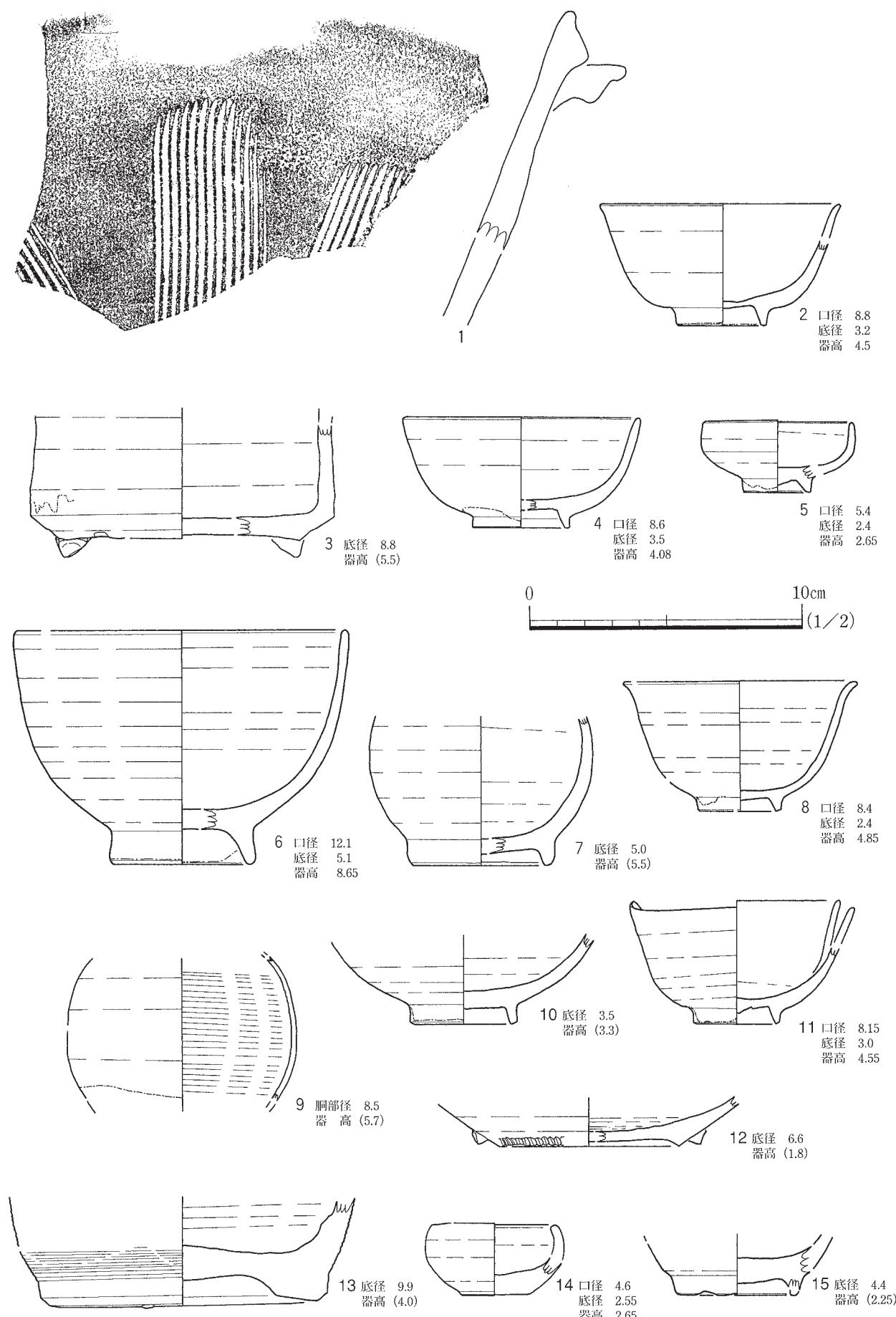
第3表 出土遺物観察表[碁石]

挿図番号	図版番号	出土地点：層位	形状	規格(cm・g)			石質	備考
				大きさ	厚み	重さ		
	図版29 a	1区 3T L 3	不整楕円形	1.75×2.15	0.4	2.4	頁岩	
	図版29 b	1区 3T S B02サブトレ a	不整楕円形	1.85×2.2	0.7	4.1	頁岩	
	図版29 c	1区 4T 上層～下層	不整楕円形	1.5×1.95	0.85	3.2	灰色	
	図版29 d	1区 S B03 表採	不整円形	1.9×2.0	0.7	3.7	硅岩	灰色
	図版29 g	1区 S B03 サブトレ b L 2	楕円形	1.2×1.7	0.45	1.3	灰色	
	図版29 e	1区 S B03 サブトレ a	不整円形	3.1×2.9	1.3	17.3		
	図版29 f	1区 S B03-b 階段前 L 1	不整円形	1.95×1.7	0.55	2.8	頁岩	
	図版29 h	1区 S B03-c L 2	不整円形	1.55×1.85	0.7	2.9	頁岩	
	図版29 i	2区 12T 2層上	不整円形	2.35×2.7	1.05	8.9		
	図版29 k	2区 13T L 1	不整楕円形	2.4×2.85	0.55	5.1	茶色	
	図版29 j	2区 13T 2層内	不整円形	1.76×1.95	0.75	3.9		
	図版29 l	2区 13T カクラン	不整楕円形	2.05×2.55	0.5	2.3	茶色	
	図版29 m	2区 14T L 1	不整円形	1.83×1.95	0.65	2.6	白茶色	



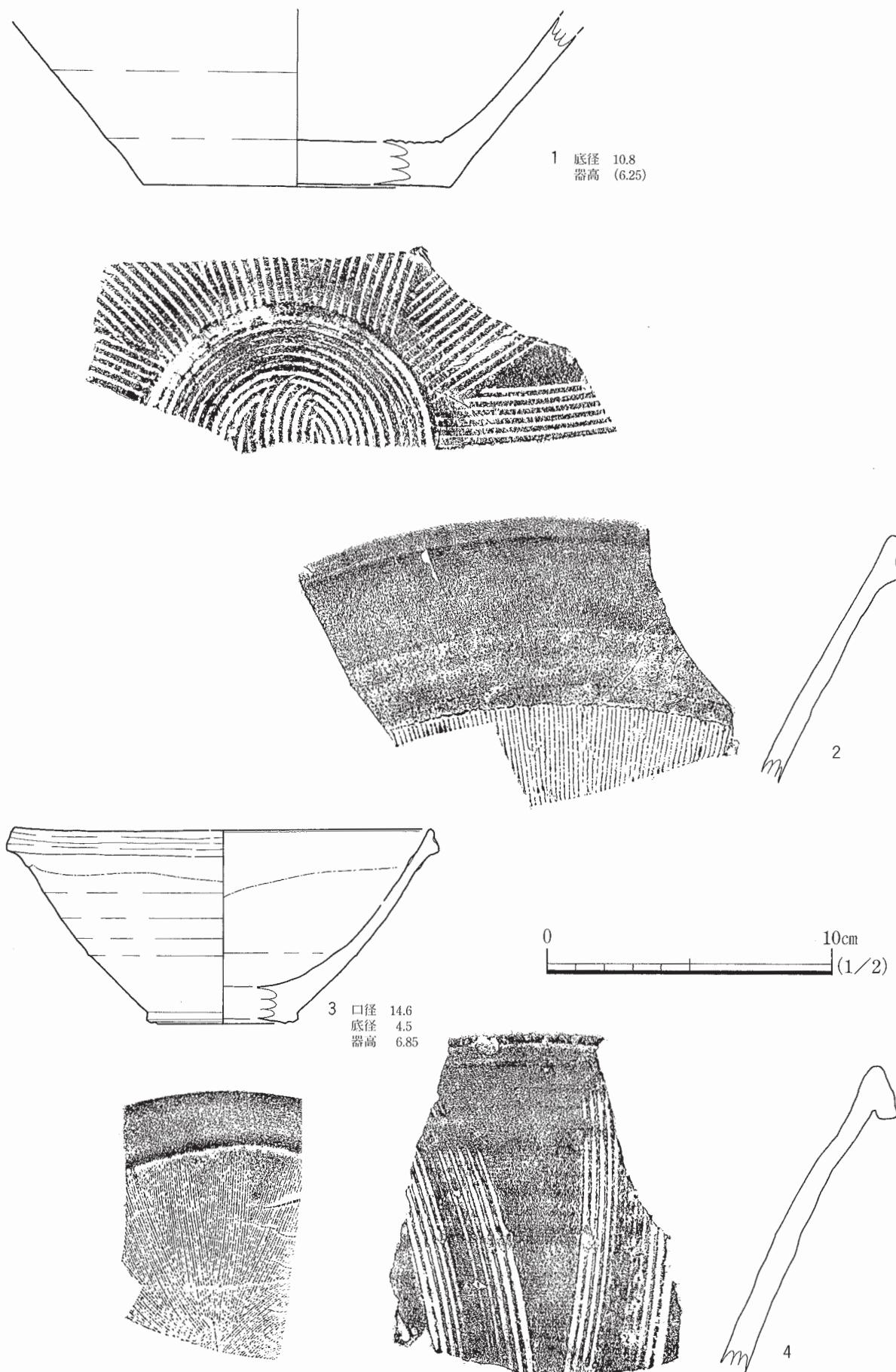
第17図 出土遺物：陶磁器類(1)

(1-S B01-d 磁1層、2-S B01、3-S B01-e、4-S B01L 1、  
5・6-S B02サブトレンチc L 7、7・8-S B03サブトレンチa 2～瓦層、9-S B02L 2')

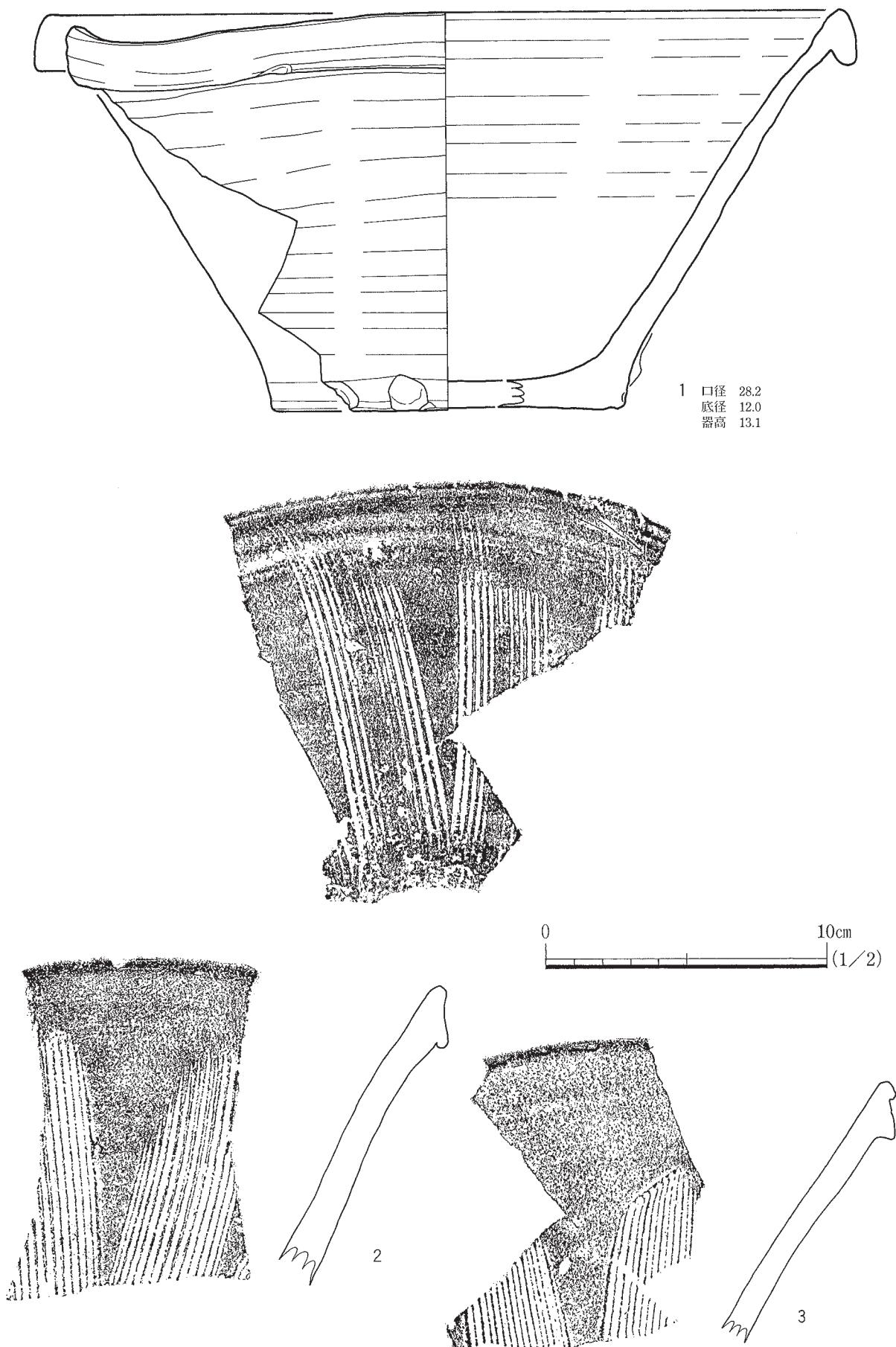


第18図 出土遺物：陶磁器類(2)

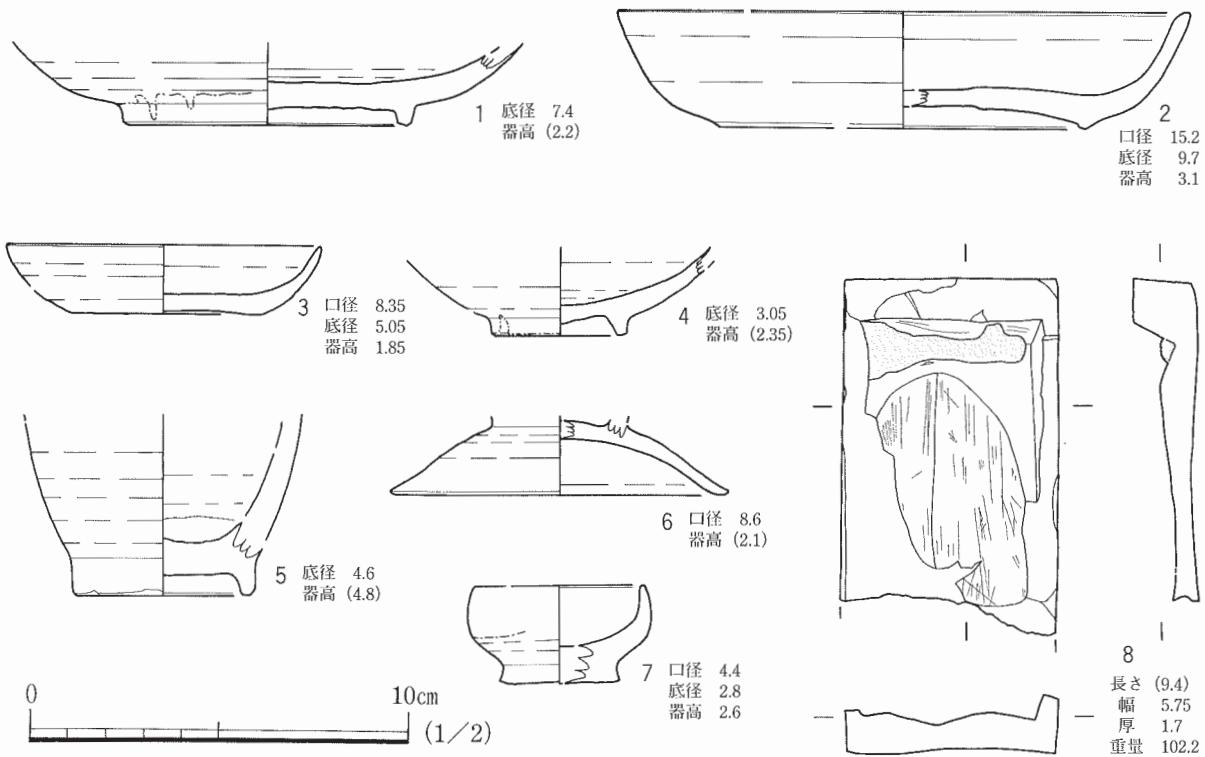
(1・2・8—石積2下層、3—石積3表土、4～6—石積3L1、7・9～13・15—石積3下層、  
14—石積3サブトレンチ表土～2層)



第19図 出土遺物：陶磁器類(3)  
(1・2—石積2下層、3—石積3下層、4—石積3L1)

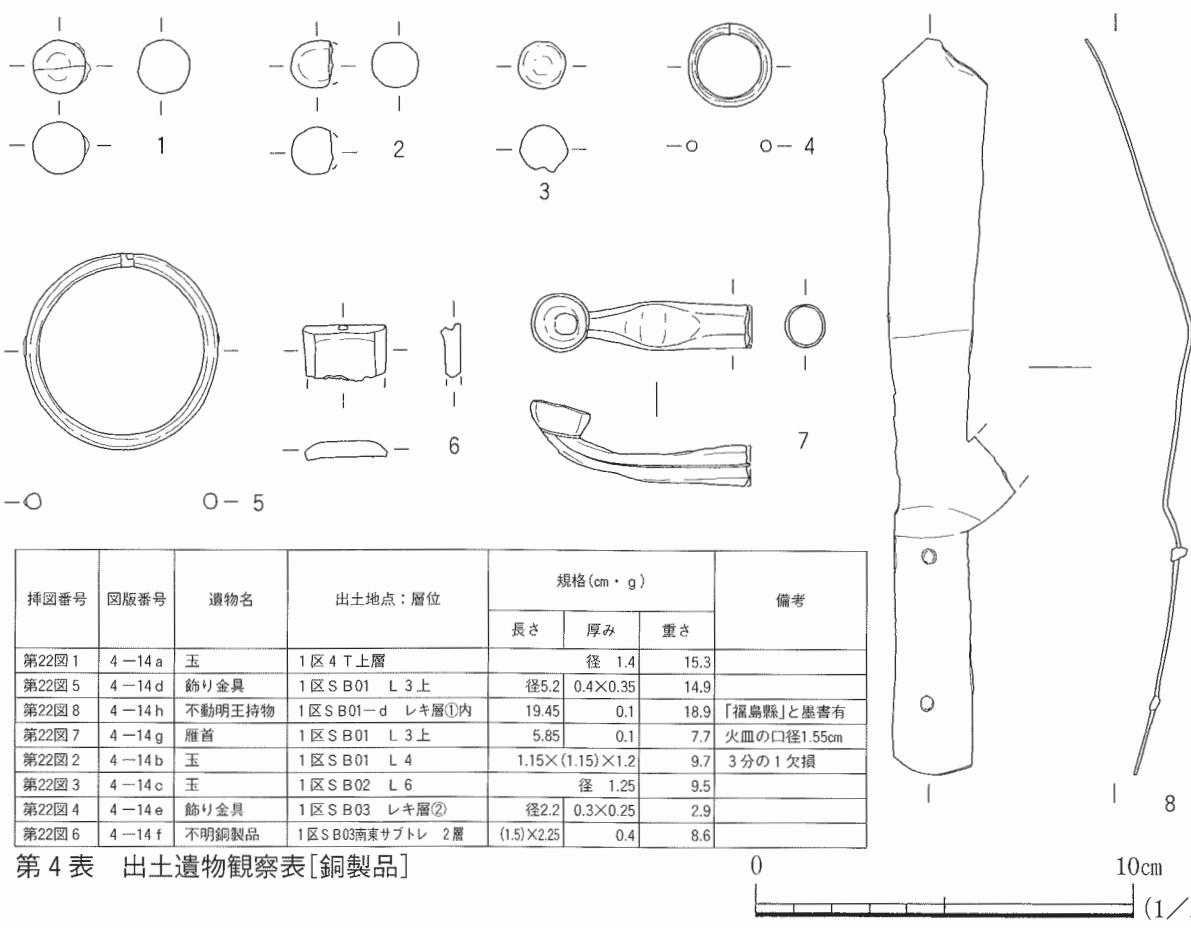


第20図 出土遺物：陶磁器類(4)  
(1・2—石積3サブトレンチ表土～2層、3—石積4・5下層)



第21図 出土遺物：陶磁器類(5)

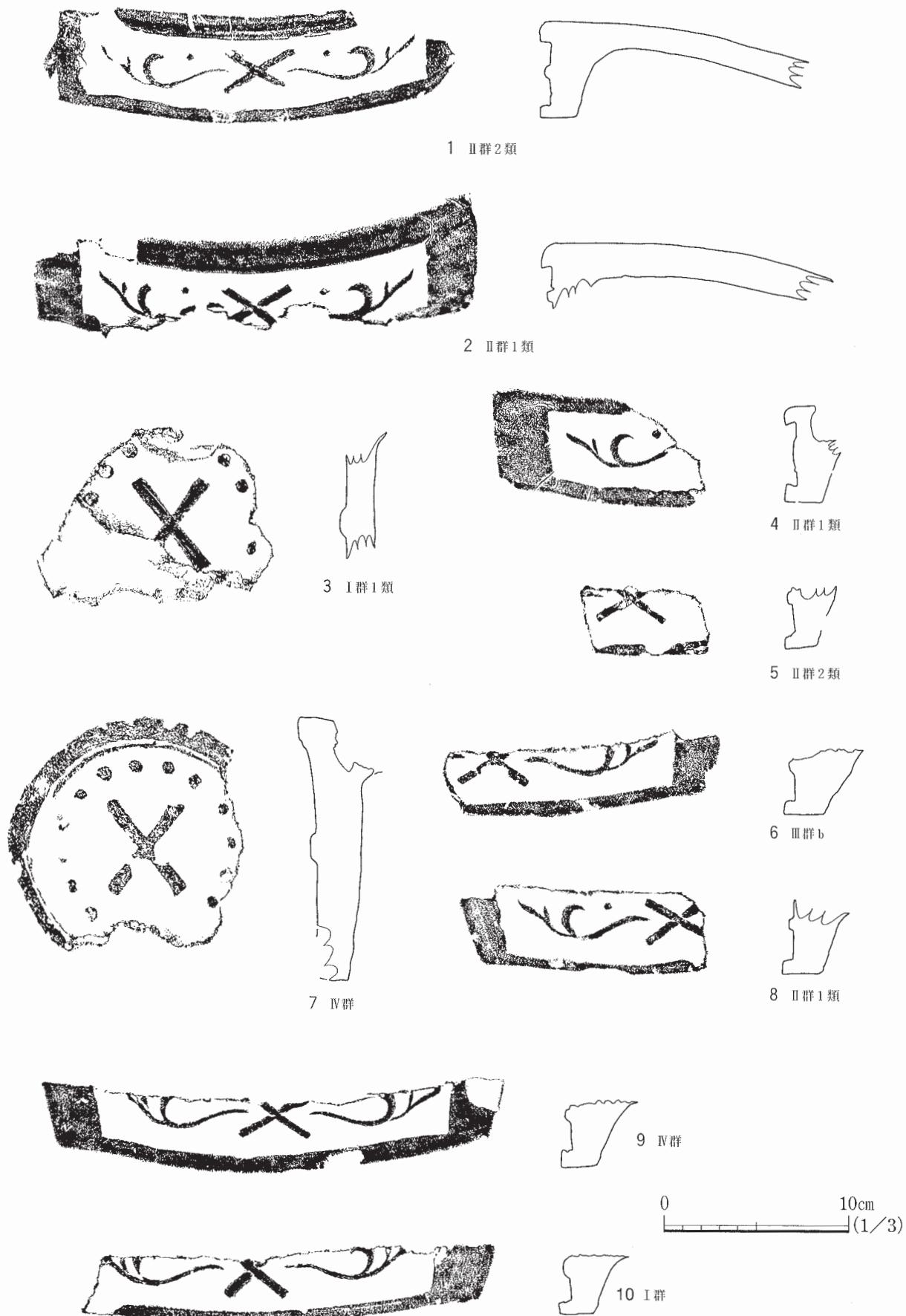
(1—石積4・5表土下、2～6—石積4・5下層、7—7 TL 1、8—7 T上層)



第4表 出土遺物観察表[銅製品]

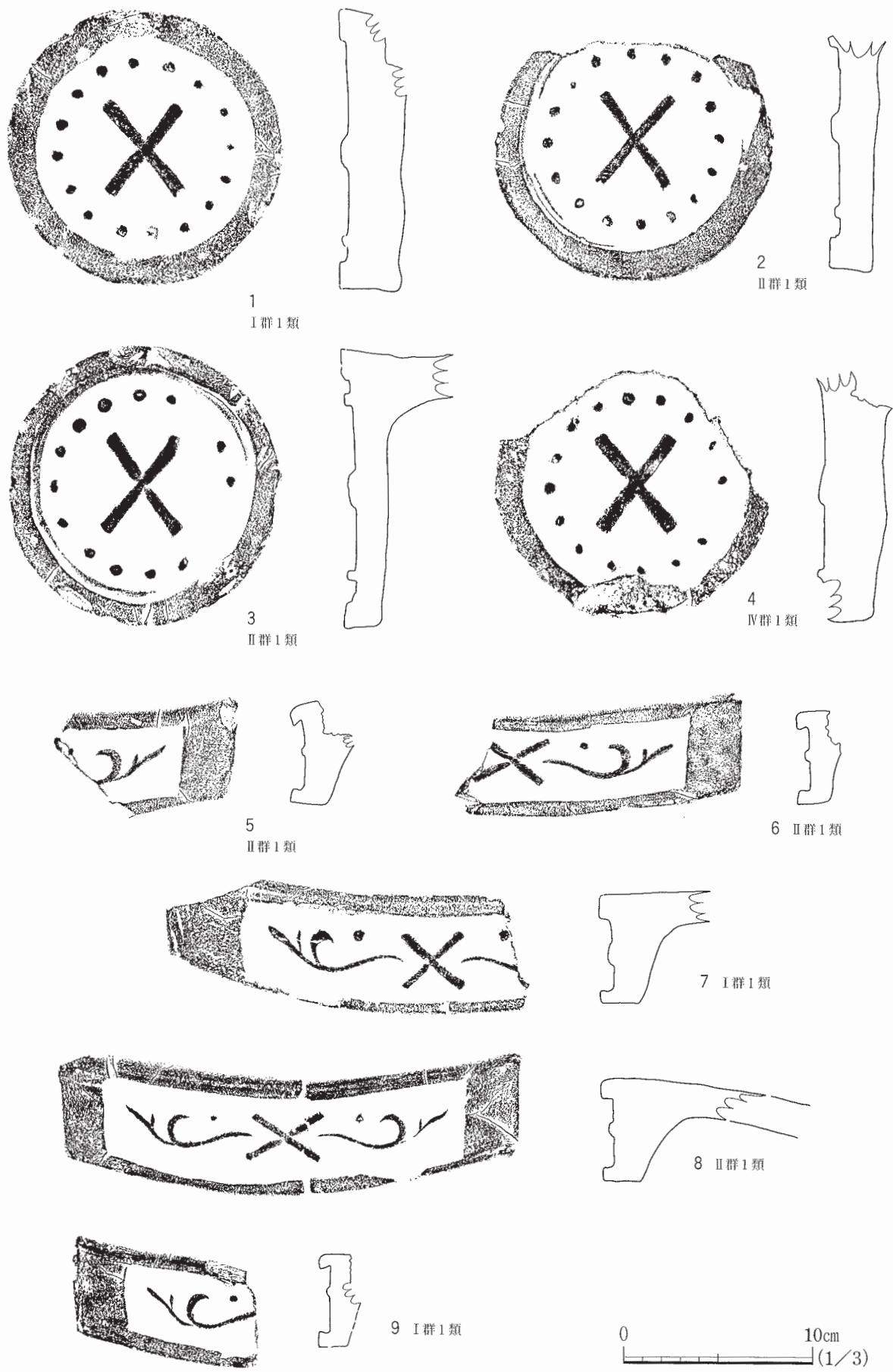
挿図番号	図版番号	遺物名	出土地点：層位	規格(cm・g)			備考
				長さ	厚み	重さ	
第22図1	4-14 a	玉	1区4T上層		径 1.4	15.3	
第22図5	4-14 d	飾り金具	1区SB01 L 3上	径5.2	0.4×0.35	14.9	
第22図8	4-14 h	不動明王持物	1区SB01-d レキ層①内	19.45	0.1	18.9	「福島縣」と墨書有
第22図7	4-14 g	雁首	1区SB01 L 3上	5.85	0.1	7.7	火皿の口徑1.55cm
第22図2	4-14 b	玉	1区SB01 L 4	1.15×(1.15)×1.2		9.7	3分の1欠損
第22図3	4-14 c	玉	1区SB02 L 6	径 1.25		9.5	
第22図4	4-14 e	飾り金具	1区SB03 レキ層②	径2.2	0.3×0.25	2.9	
第22図6	4-14 f	不明銅製品	1区SB03南東サブトレ 2層	(1.5)×2.25	0.4	8.6	

第22図 出土遺物：銅製品



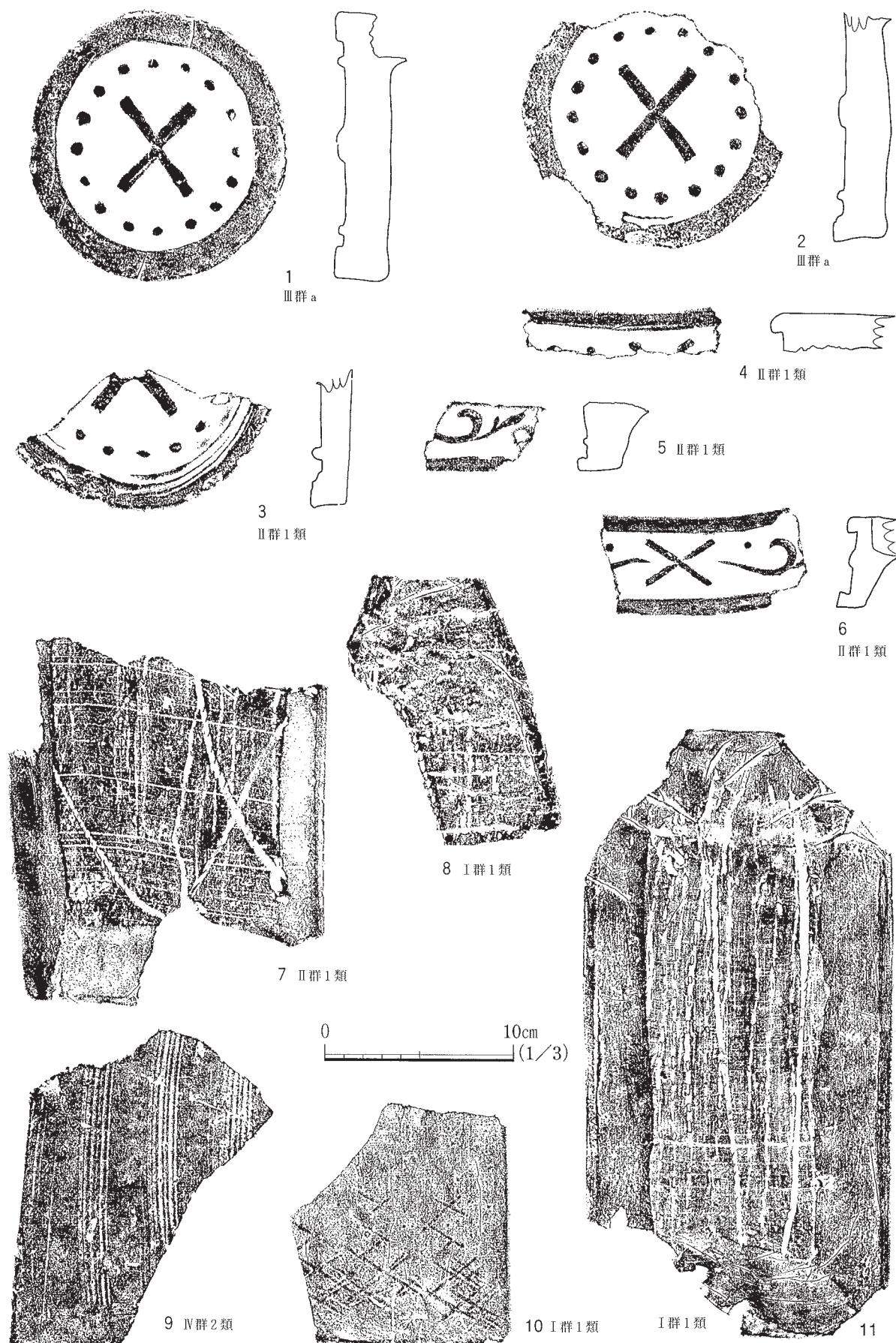
第23図 出土遺物：瓦(1)

(1-SB01表土、2-SB01-b礫1層、3-SB01上層、4~6-SB01上層、)  
7-SB03L1、8~10-SB03瓦層)

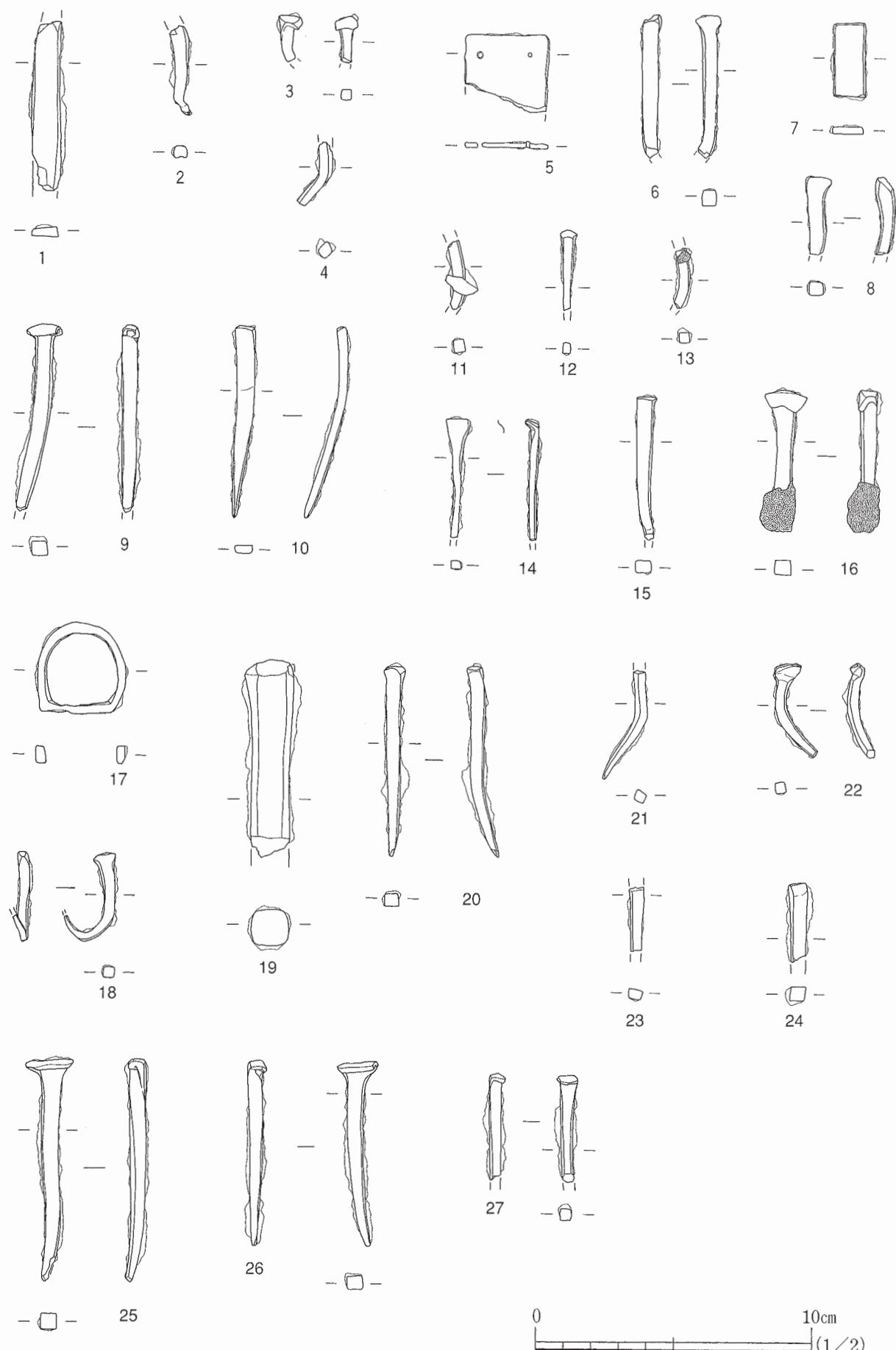


第24図 出土遺物：瓦(2)

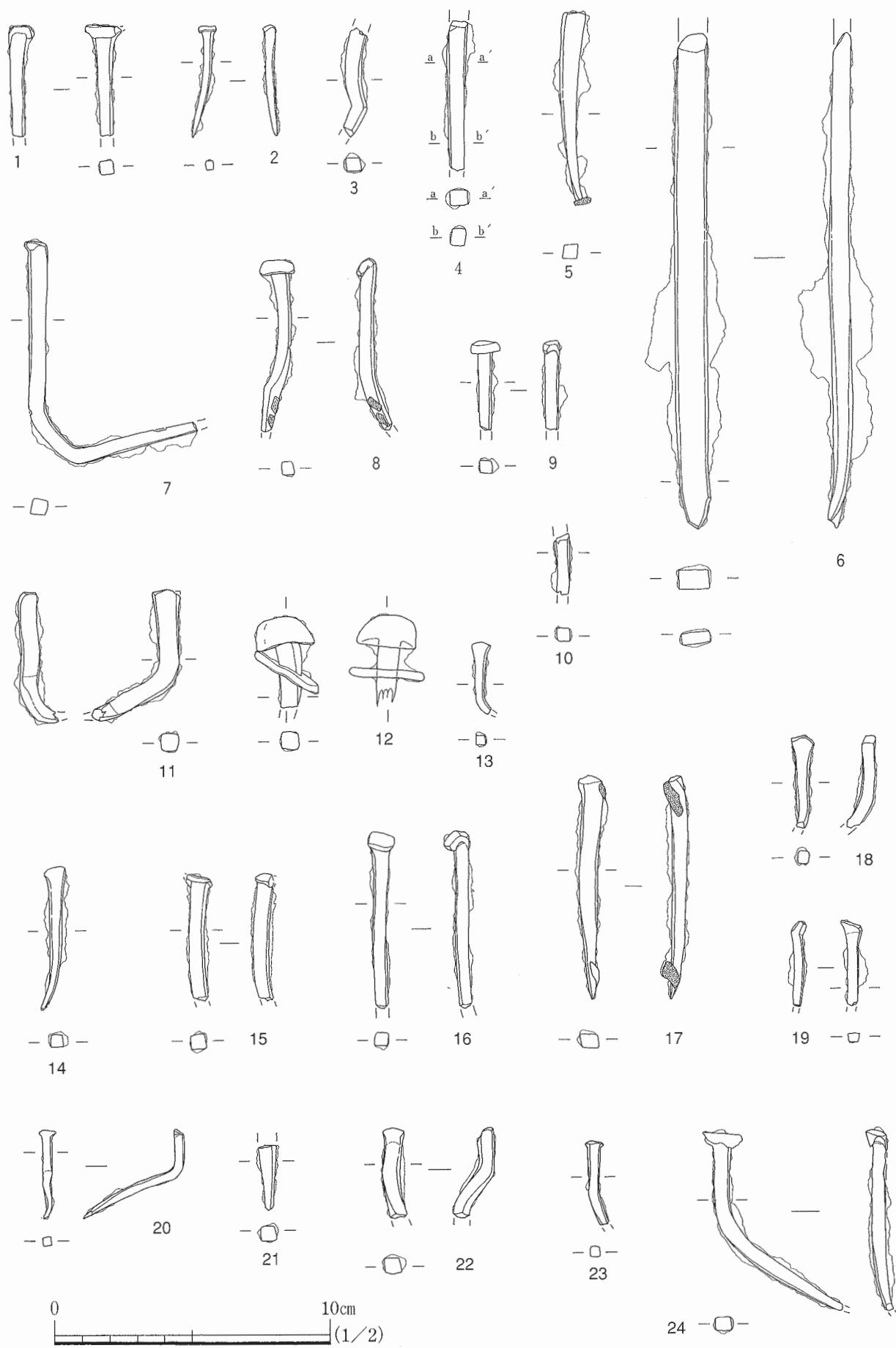
(1～7—SB03サブトレンチa瓦層、8—SB03サブトレンチc瓦層、9—SB03サブトレンチg)



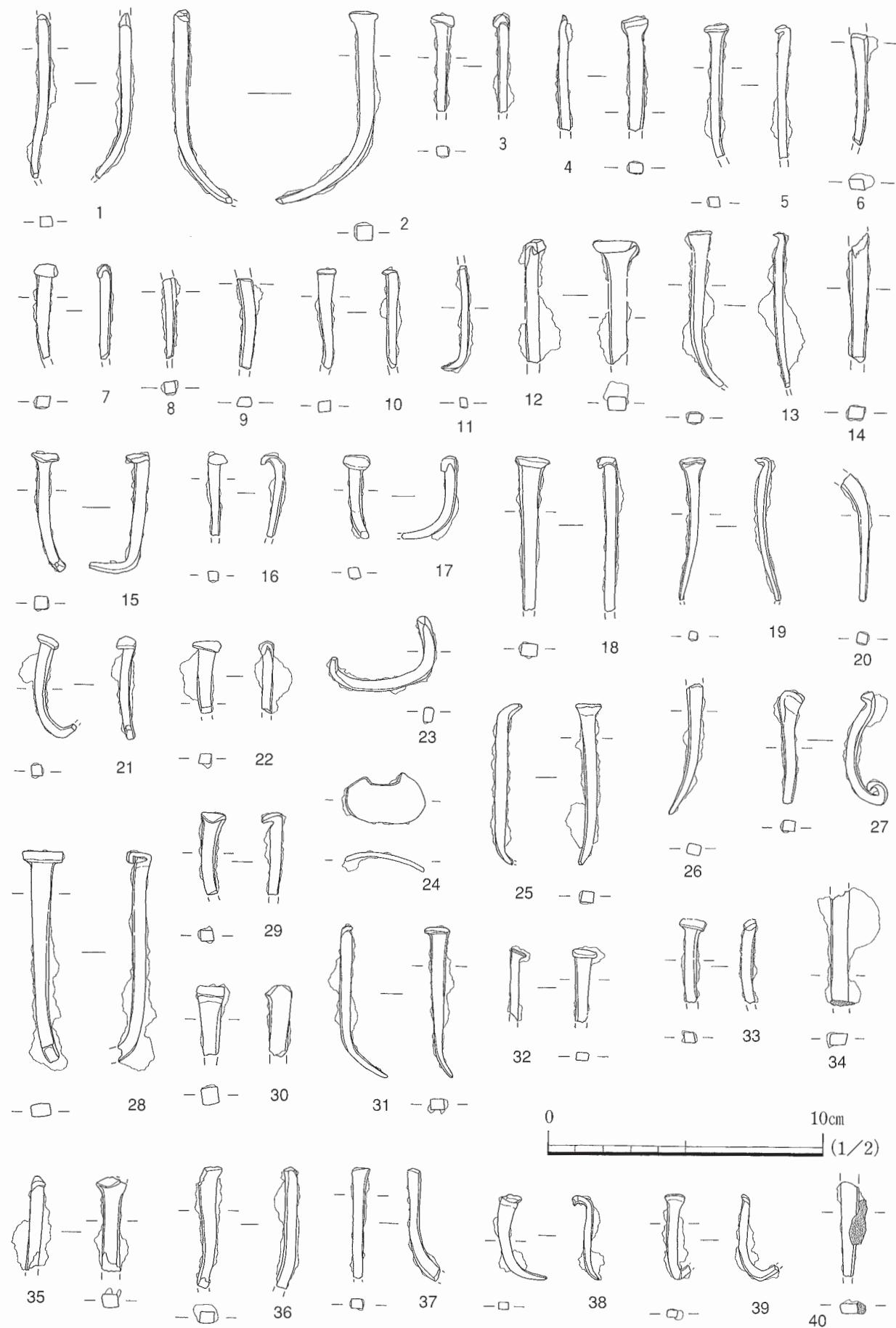
第25図 出土遺物：瓦(3)  
(1~8・10-SB03サブトレント b 瓦層、9・11-SB03東崖面表土)



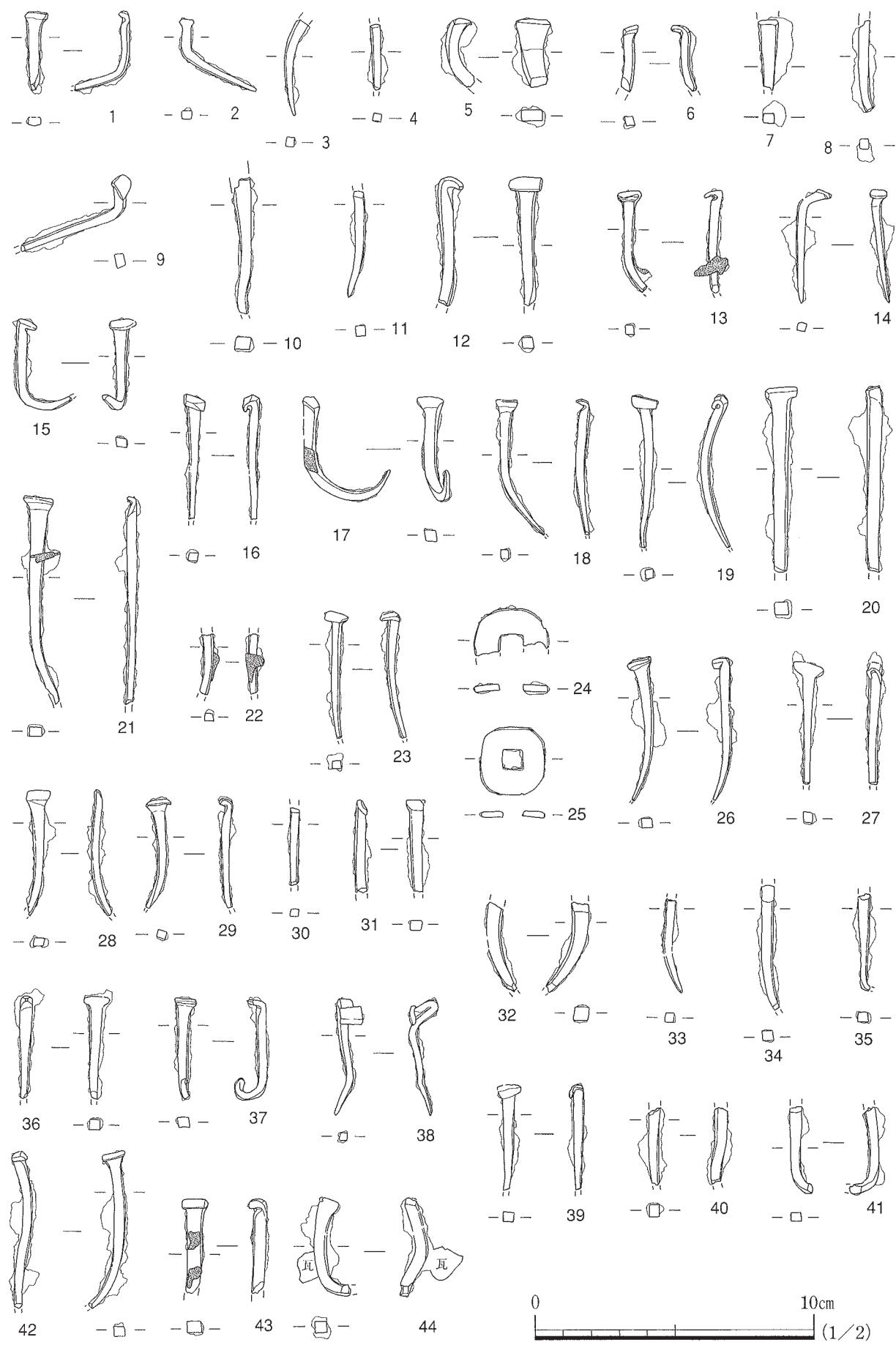
第26図 出土遺物：鉄製品(1)



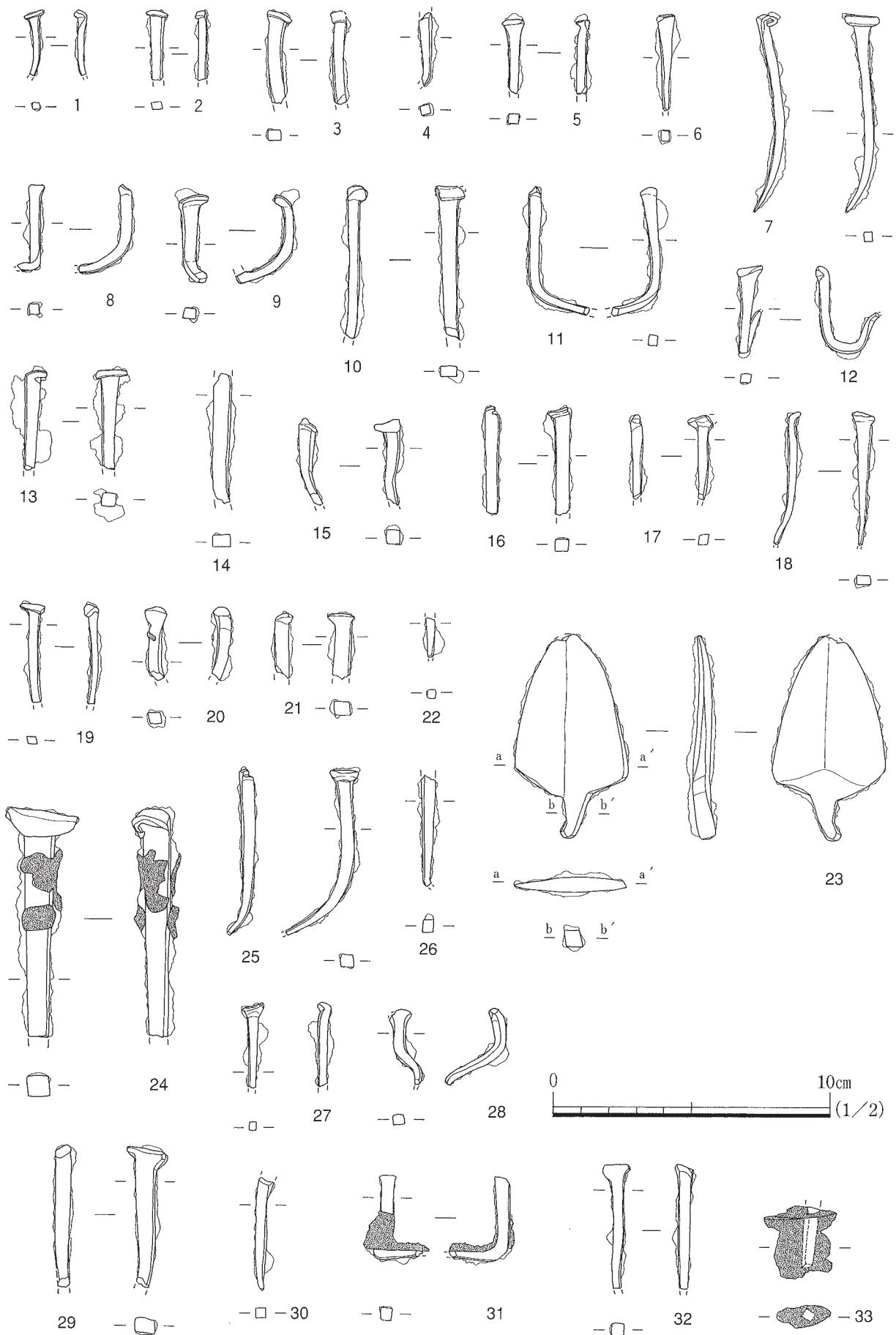
第27図 出土遺物：鉄製品(2)



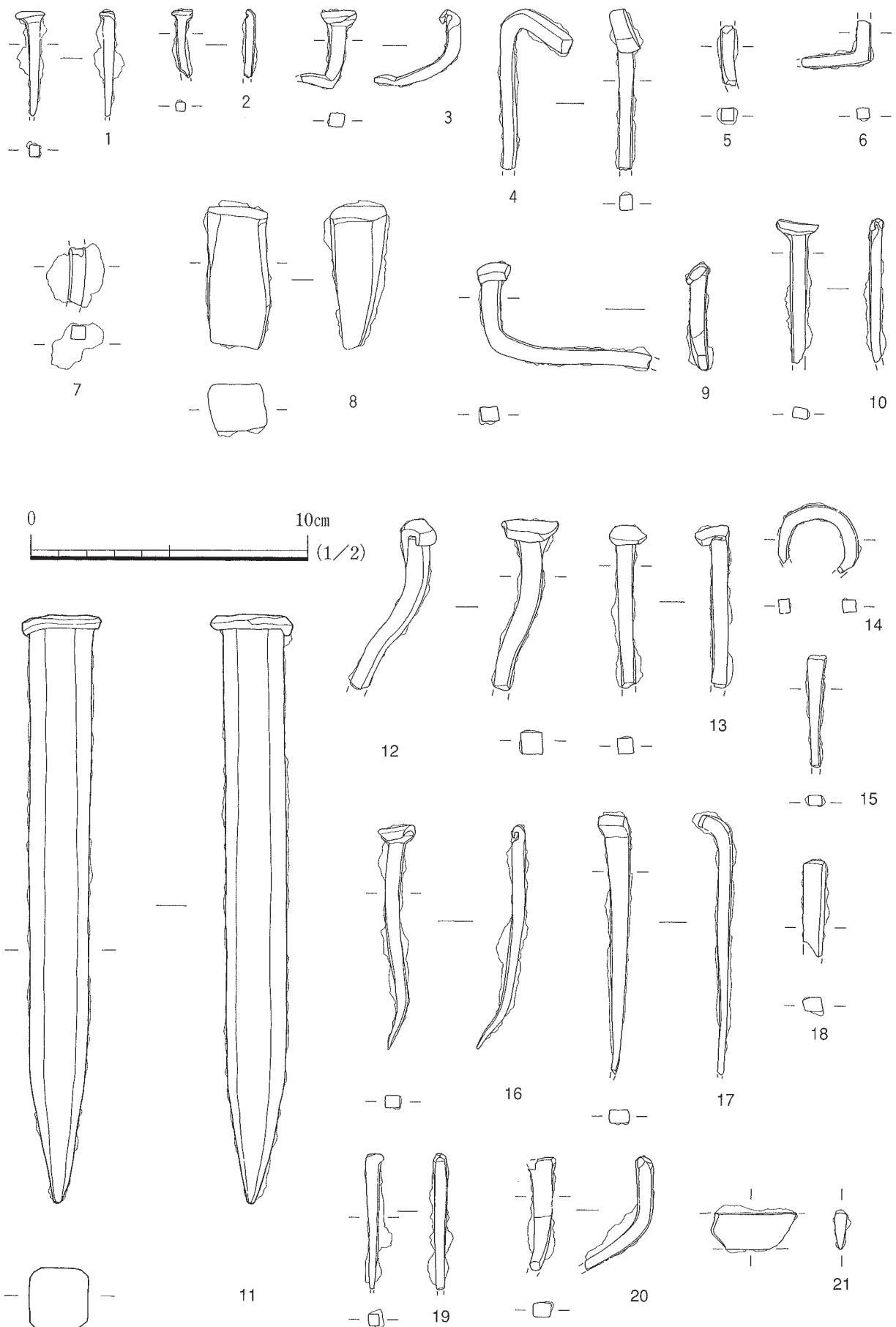
第28図 出土遺物：鉄製品(3)



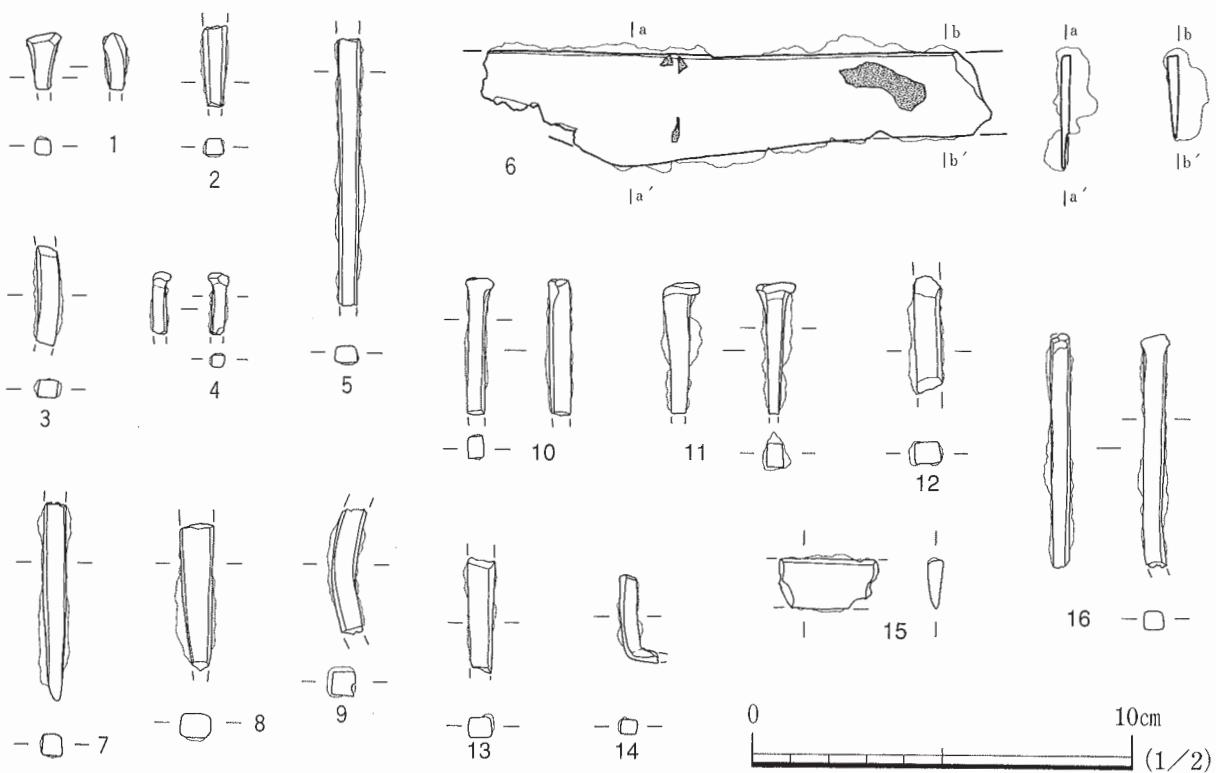
第29図 出土遺物：鉄製品(4)



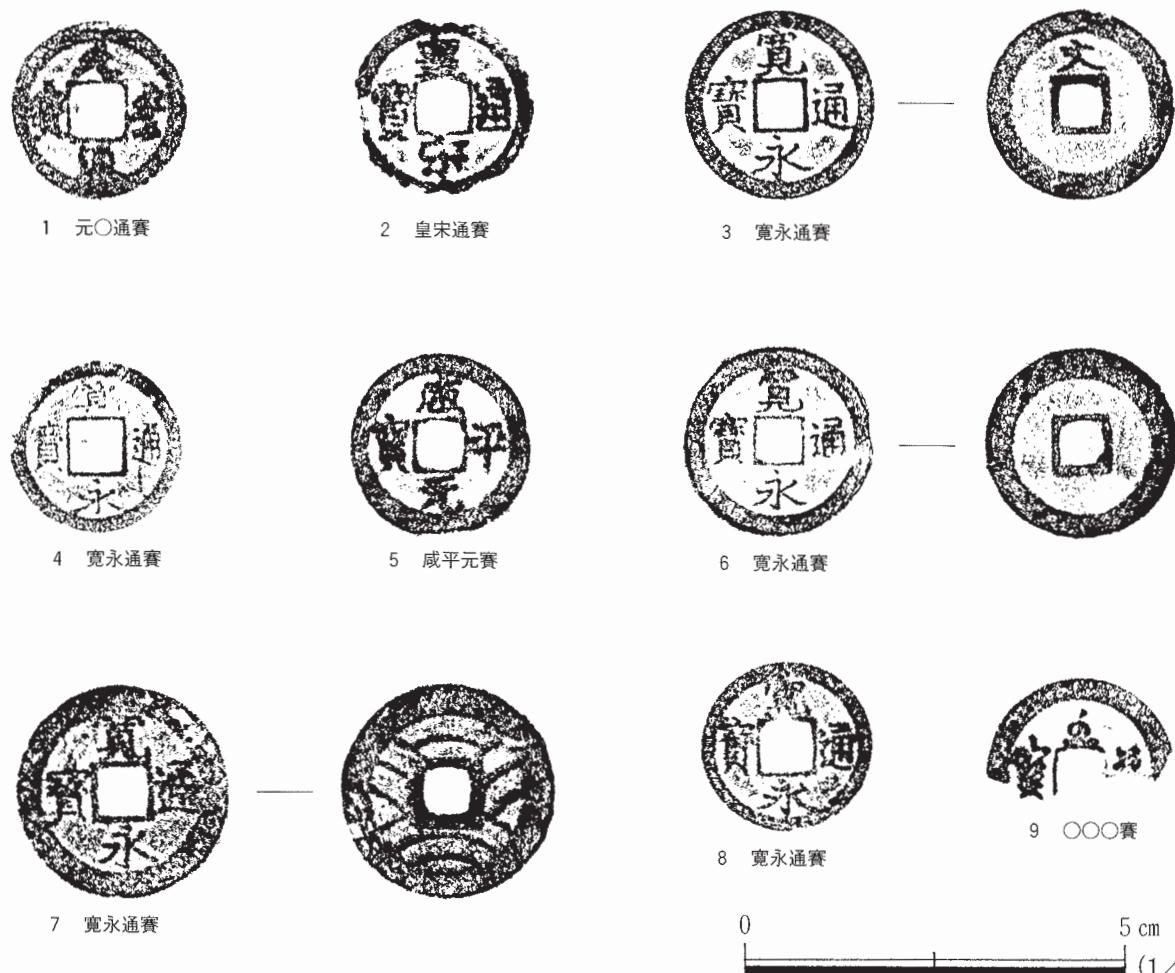
第30図 出土遺物：鉄製品(5)



第31図 出土遺物：鉄製品(6)



第32図 出土遺物：鉄製品(7)



第33図 出土遺物：古銭(1-SB02、2・3-SB03、4-4T)  
5~7-5T、8-石積3、9-7T)

図版1(左)  
1区礎石1～4精査状況  
(北より)

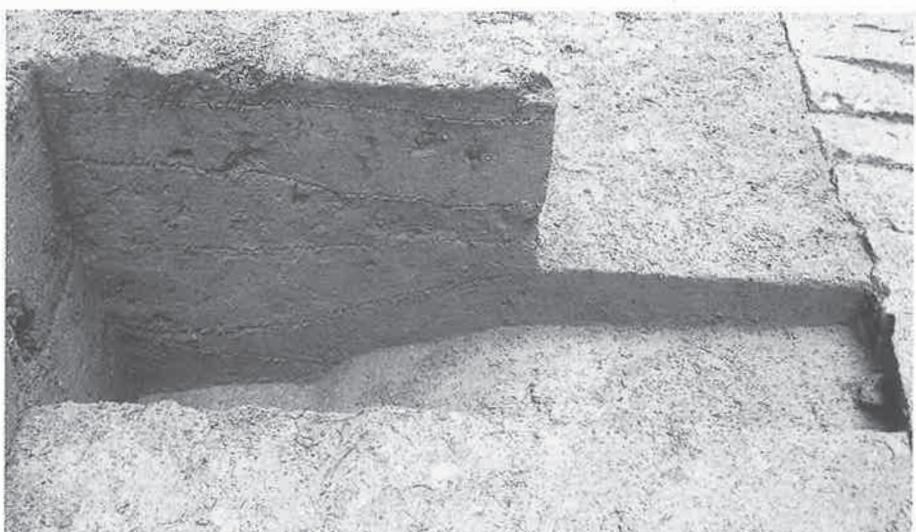


図版2(右)  
1区礎石3精査状況  
(北東より)

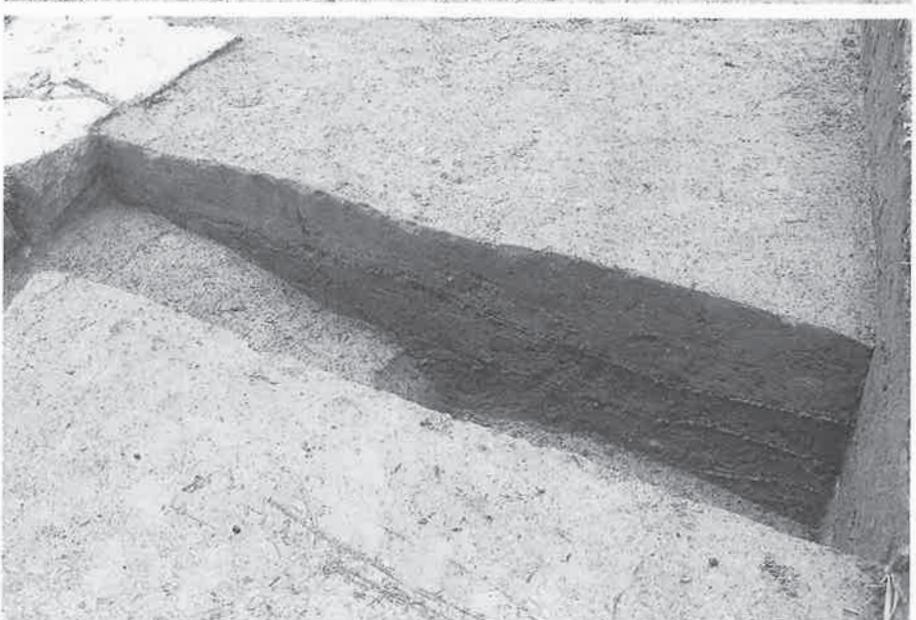


図版3(左) 1区礎石4精査状況  
(北西より)

図版4 1区礎石2(左)・  
礎石1(右)精査状況  
(北西より)



図版5 SB02サブトレンチa  
セクション(南西より)



図版6 SB02サブトレンチb  
セクション(南東より)



図版7 7 T 北壁・西壁セクション(東より)



図版8 5 T 石列遺構精査状況  
(北東より)



図版9 2区石積1精査状況(南より)



図版10(左) 2区石積3  
精査状況(南より)

図版11(左下) 2区礎石1  
精査状況(北東より)

図版12(右下) 2区礎石4  
精査状況(北西より)





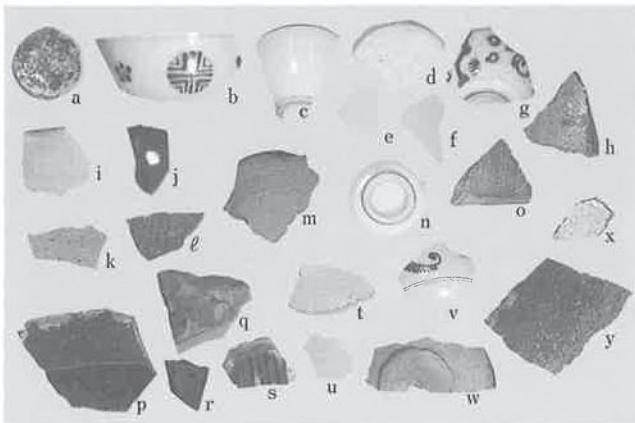
図版13 2区石積5精査状況  
(南東より)



図版14 2区石積4、14T  
精査状況(西より)

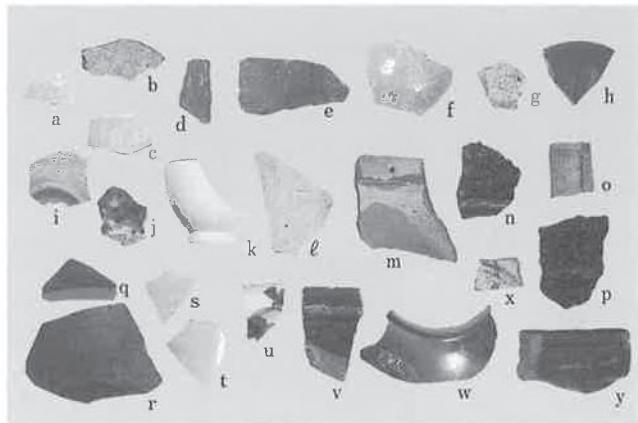


図版15 14Tセクション  
(西より)



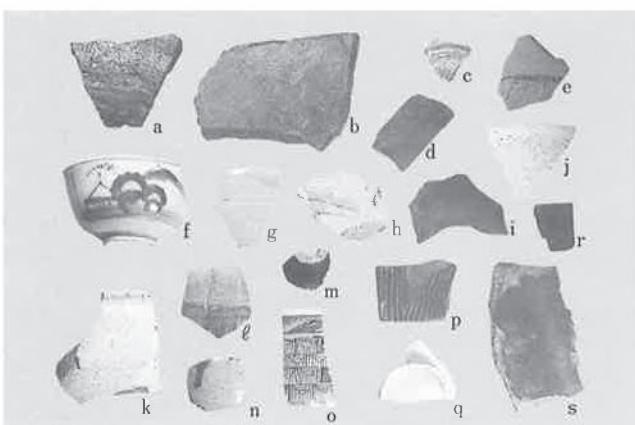
図版16 1区SB01・02、1～5T出土遺物

(a～c—南東サブトレンチ2層、d～h—SB01、  
i～p—SB02、q～s—1T礎石4、  
t—3TS01、u～w—4T、x～y—5T)



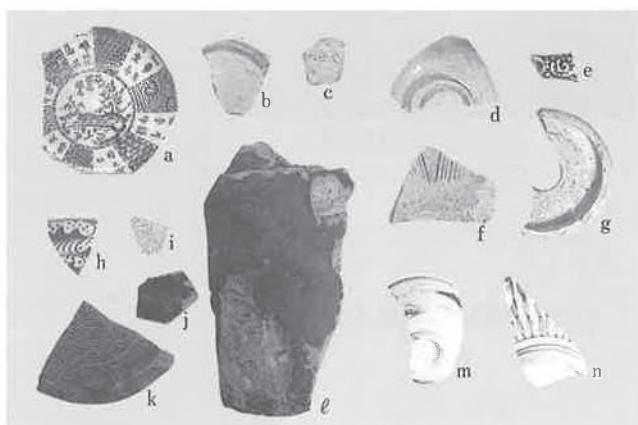
図版17 SB03出土遺物

(a～c—サブトレンチa、d～h—サブトレンチb、  
i～j—サブトレンチf、k～m—サブトレンチg、  
n～o—階段部、p～r—SB03-a、  
s～t—SB03-c、u～y—SB03周辺)



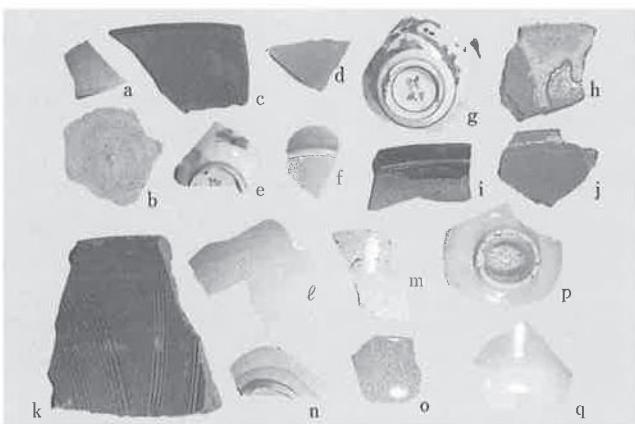
図版18 7・12～14T出土遺物

(a～e—7T、f～j—12T、k～o—13T  
p～s—14T)



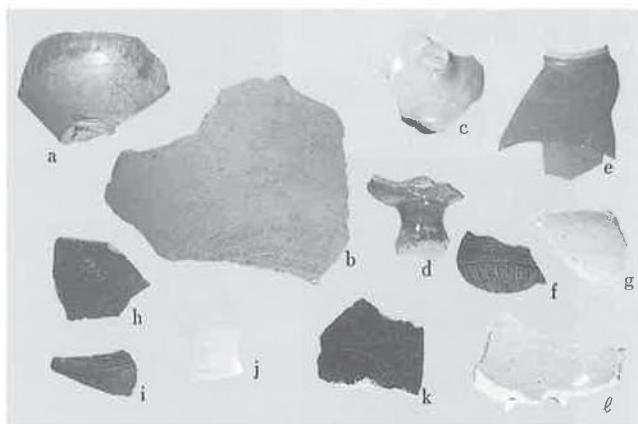
図版19 2区石積1・4・5出土遺物

(a—2区表探、b～g—石積1、  
h～n—石積4・5)



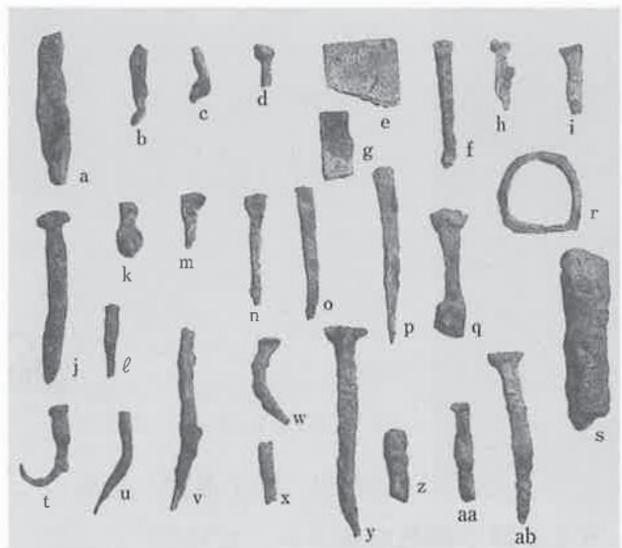
図版20 2区石積2・3出土遺物

(b～j—石積2、a・k～q—石積3)



図版21 2区石積3出土遺物

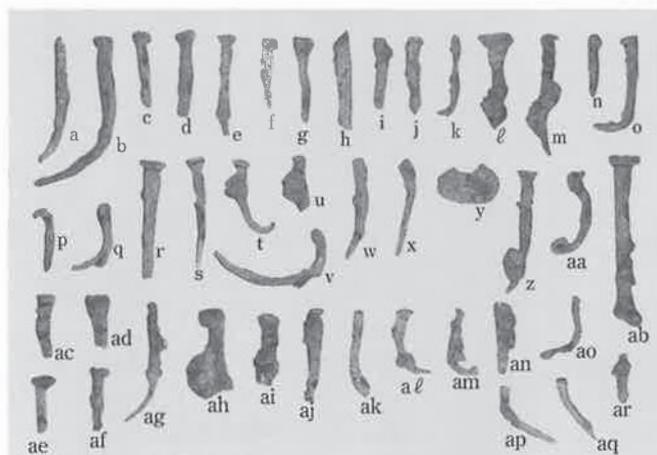
(a～b・l—石積3、c～k—石積3サブトレンチ)



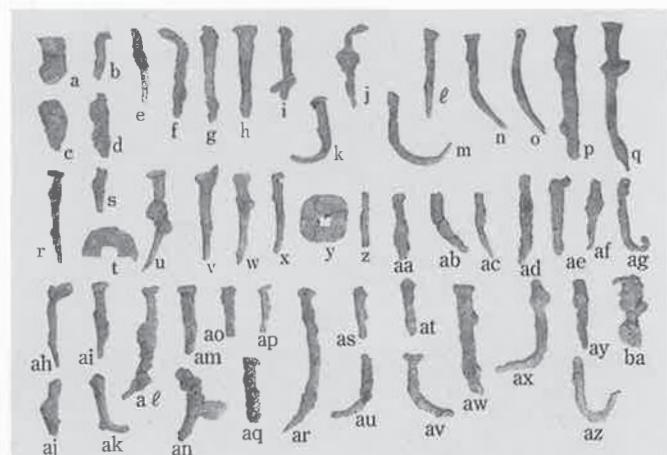
図版22 3～5 T、SB01出土鉄製品



図版23 1区SB02出土鉄製品



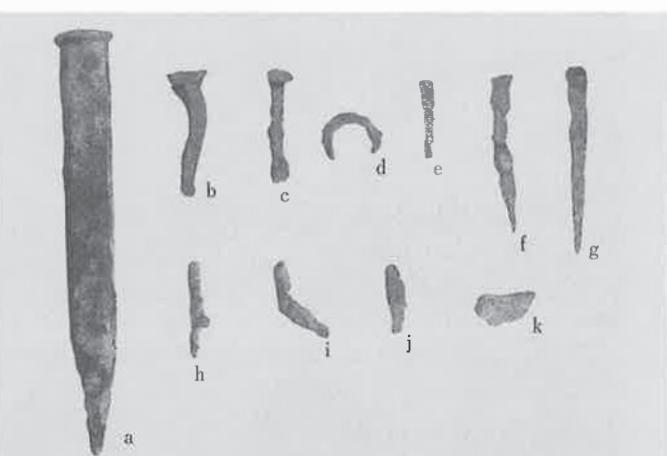
図版24 1区SB03出土鉄製品(1)



図版25 1区SB03出土鉄製品(2)

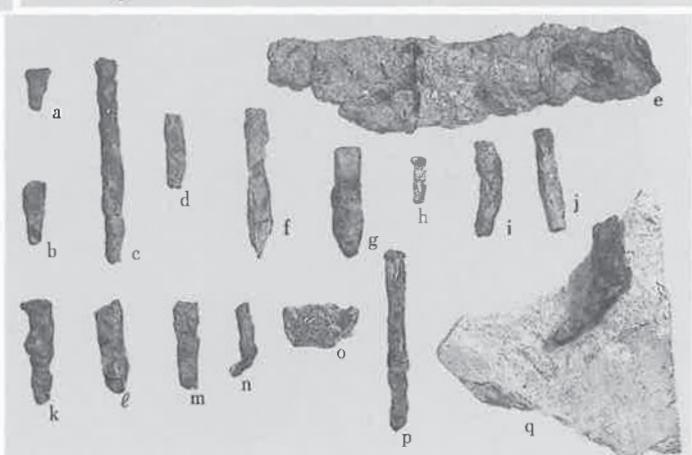


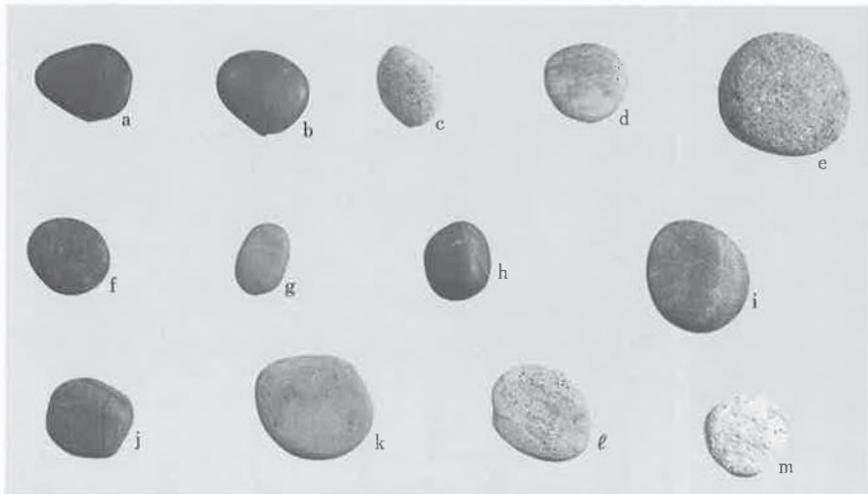
図版26(左上) 1区SB03出土鉄製品(3)



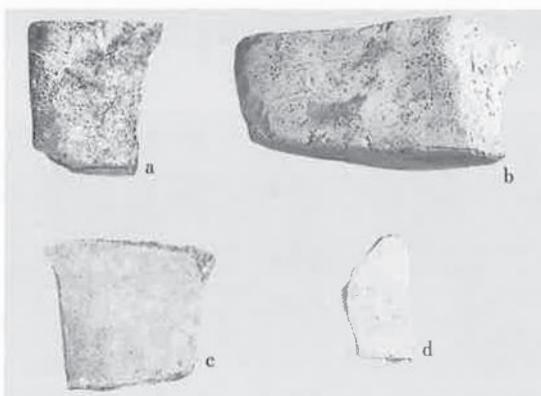
図版27(右上) 1区SB03出土鉄製品(4)

図版28(右下) 石積1・2、7・13T出土  
鉄製品

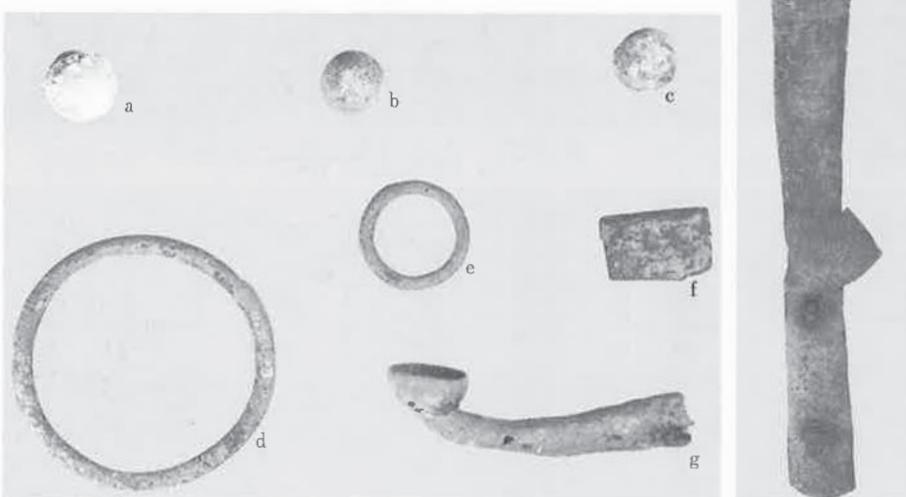




図版29 出土遺物：碁石

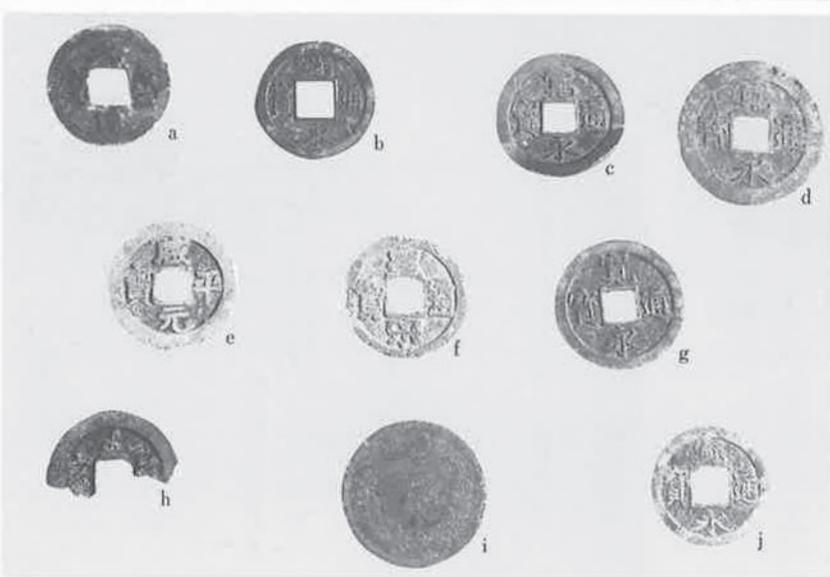


図版30 出土遺物：砥石



図版31(左)  
出土遺物：銅製品(1)

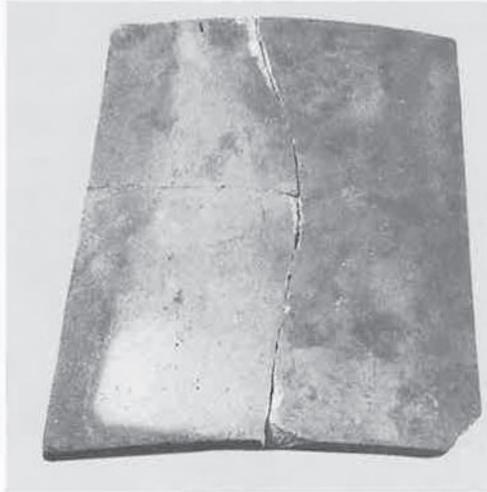
図版32(右)  
出土遺物：銅製品(2)



図版33 出土遺物：古銭

※図版34・36はS B03サブトレンチ a 出土、  
図版35・37・38はS B03サブトレンチ b  
出土

図版34 出土遺物：軒丸瓦



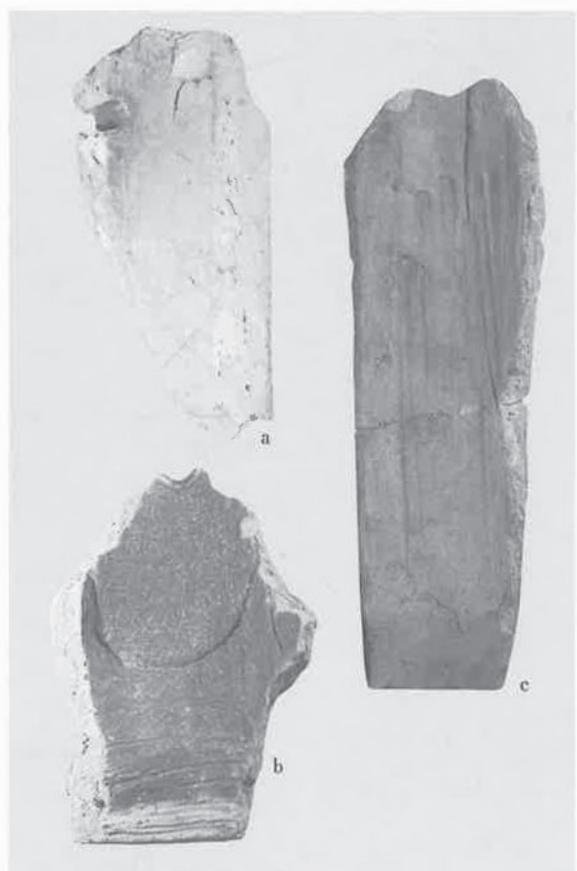
図版35 出土遺物：平瓦



図版36 出土遺物：軒平瓦・輪違



図版37 出土遺物：丸瓦(凸面)



図版38 出土遺物：丸瓦(凹面)

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	にほんまつじょうし7							
書名	二本松城址Ⅶ							
副書名	平成15年度発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	二本松市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	中村真由美							
編集機関	福島県二本松市教育委員会							
所在地	〒964-8601 福島県二本松市金色403番地の1							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にほんまつじよつうしき 二本松城址	ふくしまけんにほんまつしがくない 福島県二本松市郭内4丁目	07210	00019	37° 35' 47"	140° 25' 55"	第8次 20030618 ~0905	2,600m <sup>2</sup>	保存管理 計画に基づく資料 収集
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
二本松城址	城館	中世～近世	礎石立建物跡 3 石積 5ヶ所 礎石跡 8	陶磁器(瀬戸・初期伊万里・ 本郷・相馬・白磁)、すり鉢、 灯明皿、釘、雁首、古銭、硯、 石臼、碁石、直違紋入軒丸瓦、 軒平瓦				藏とみられる礎石立建物 跡の発見。既存の石垣と 技法の異なる石垣を発見。 蒲生期の通路の検出。

二本松市文化財調査報告書 第26集

### 二本松城址Ⅶ

平成15年度発掘調査報告書

平成16年3月31日発行

編集・発行 福島県二本松市教育委員会

福島県二本松市金色403番地の1

TEL 0243-23-1111

印 刷 株式会社 日進堂印刷所

福島県福島市庄野字柿場1番地の1

TEL 024-594-2211

©2004